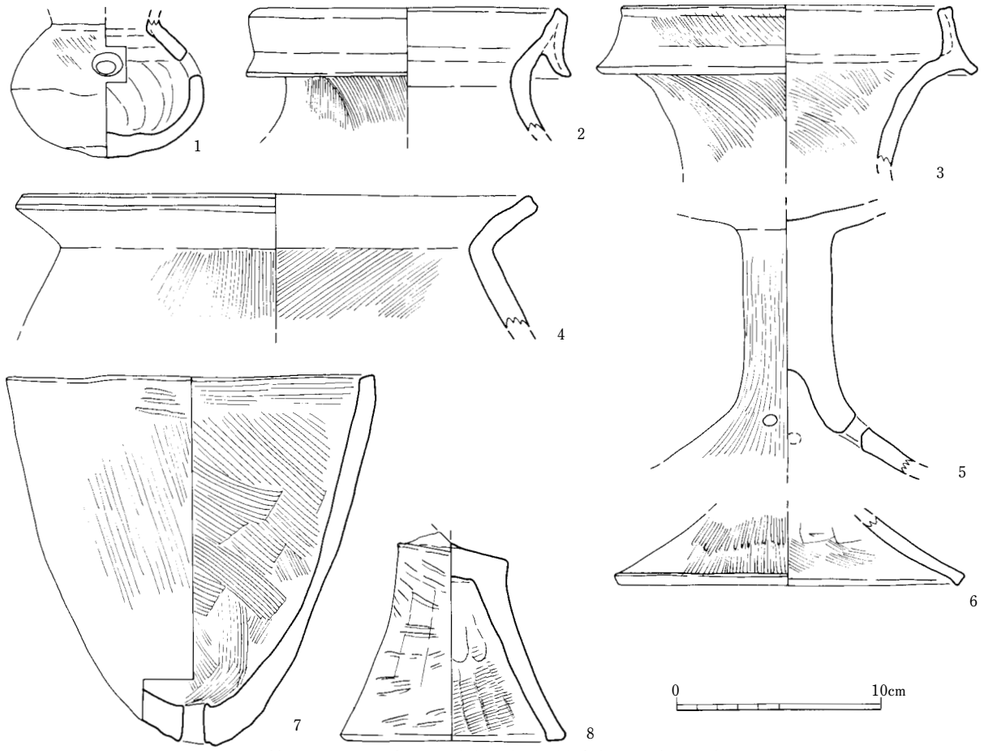
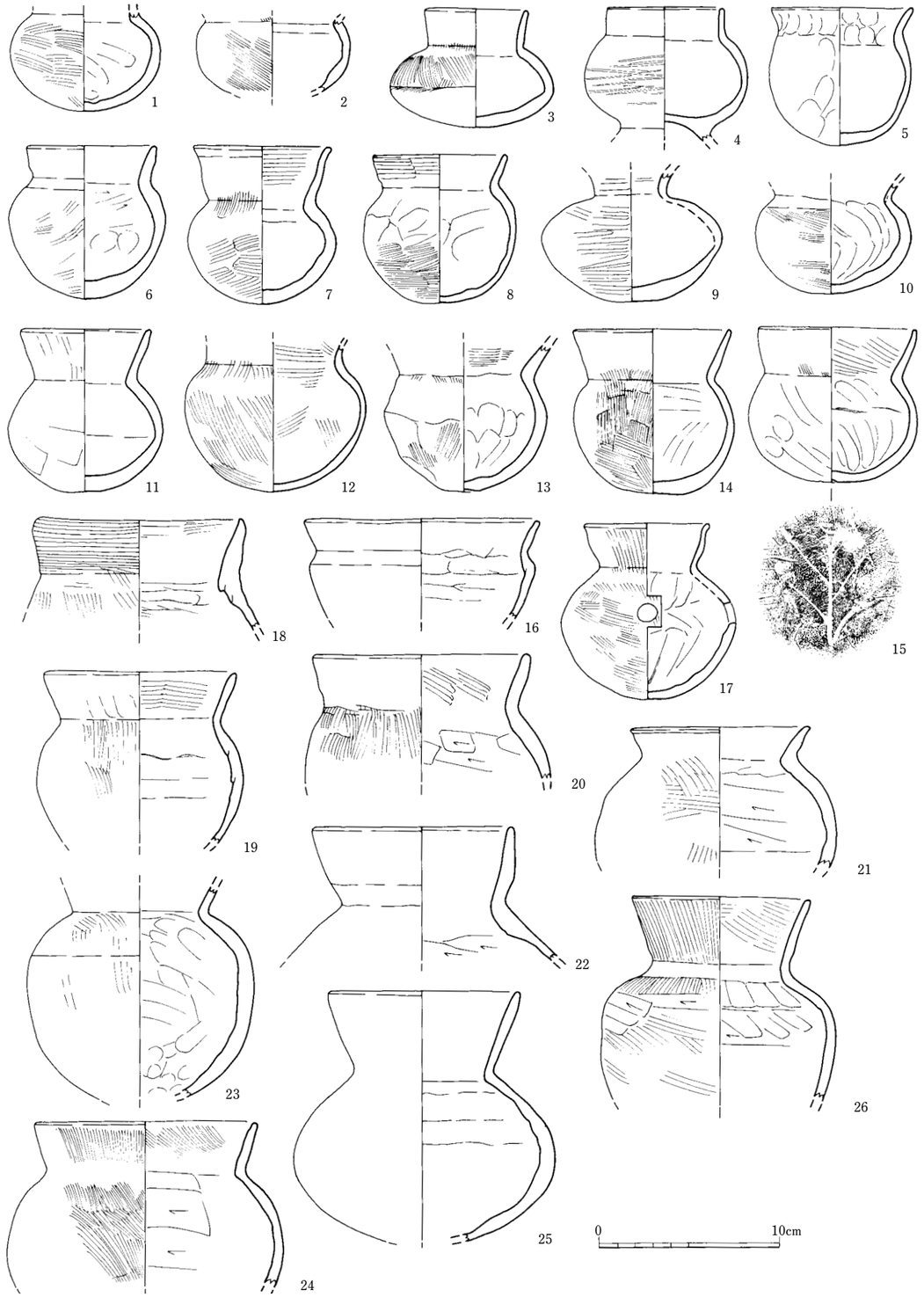


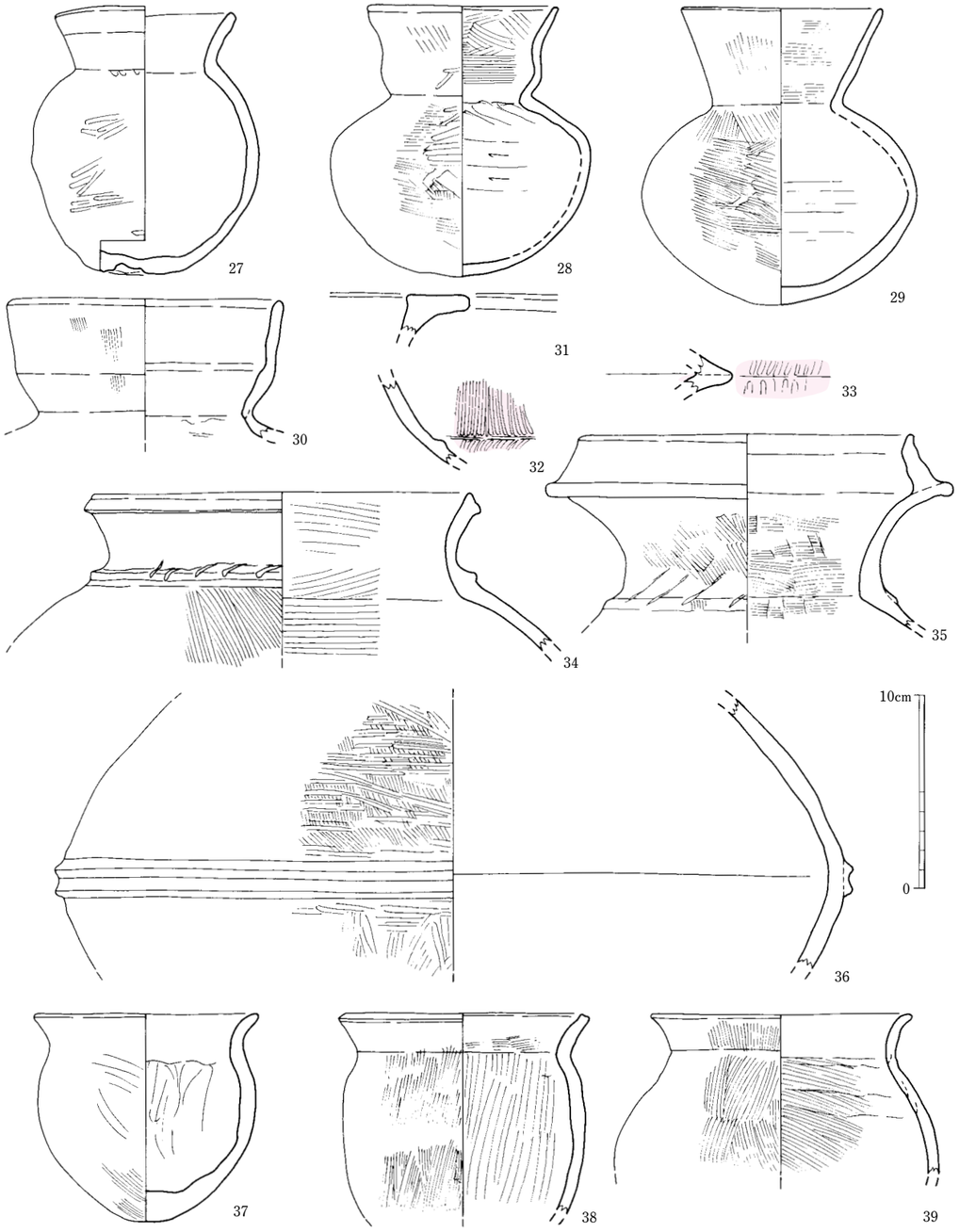
第147図　大谷下層出土土器実測図（1/３）

面工具によるナデを施す。１８～３０は中型の壺である。小型壺よりも調整のバリエーションは多く、外面刷毛目・ナデ・ケズリ・ミガキ、内面ナデ・指ナデ・ケズリが施される。２１・２４は口縁が短く、他の例は小型壺とほぼ同じ比率である。２７は歪みが大きく、底部には工具痕と考えられる凹みが見られるが、形態の歪さから意図的ではない可能性が高い。２８は口縁部が緩やかなＳ字形を呈し、外面に刷毛目後一部ミガキを施す。２０・２２・２５・２９は外面に黒斑、１９・２３・２６・２７は外面に煤が見られる。３１～３６は弥生土器の壺で混入品である。３１は鋤先状の口縁部で弥生時代中期の所産である。３２・３３は丹塗り磨研壺の一部で肩部ならびに口縁部が遺存する。３４は大形の甕に近いもので、頸部に突帯を付し、キザミが施される。３５は二重口縁壺で、頸部に断面三角形の薄い突帯が付され、その上方に大きくはみ出してキザミが施される。３６は広口壺の体部で、胴部最大径部分に突帯が２条付される。外面刷毛目後ミガキ、内面ナデを施す。３７～４３は小型の甕である。概ね外面刷毛目、内面ケズリないしはナデを施す。３７は外面上位タタキ、下位刷毛目、内面ヘラ状工具痕を施す。外面および口縁部に黒斑が見られる。４３は底部のみが遺存し、平底を呈す。外面ナデを施し、黒斑が見られる。４４～５１は平底の底部で混入品か。４５は底部が厚く、弥生時代中期の所産と考えられる。４６・４９は外面に黒斑が見られる。５１は底部端部が突出しており、外面にはタタキが施される。５２～６０は甕である。概ね外面刷毛目、内面ケズリを施す。５３は外面に煤が見られる。５６は外面刷毛目後ミガキ状工具痕を施す。５７は弥生時代中期の甕で頸部下に断面三角形の突帯が付される。５８はやや球形を呈し、外面に黒斑が見られる。６１～９４は高杯である。概ね杯部外面刷毛目、内面および脚部外面刷毛目ないしはナデ、脚部内面ケズリを施す。６１～７２は口縁が緩やかに外反し、杯部の屈曲もあま

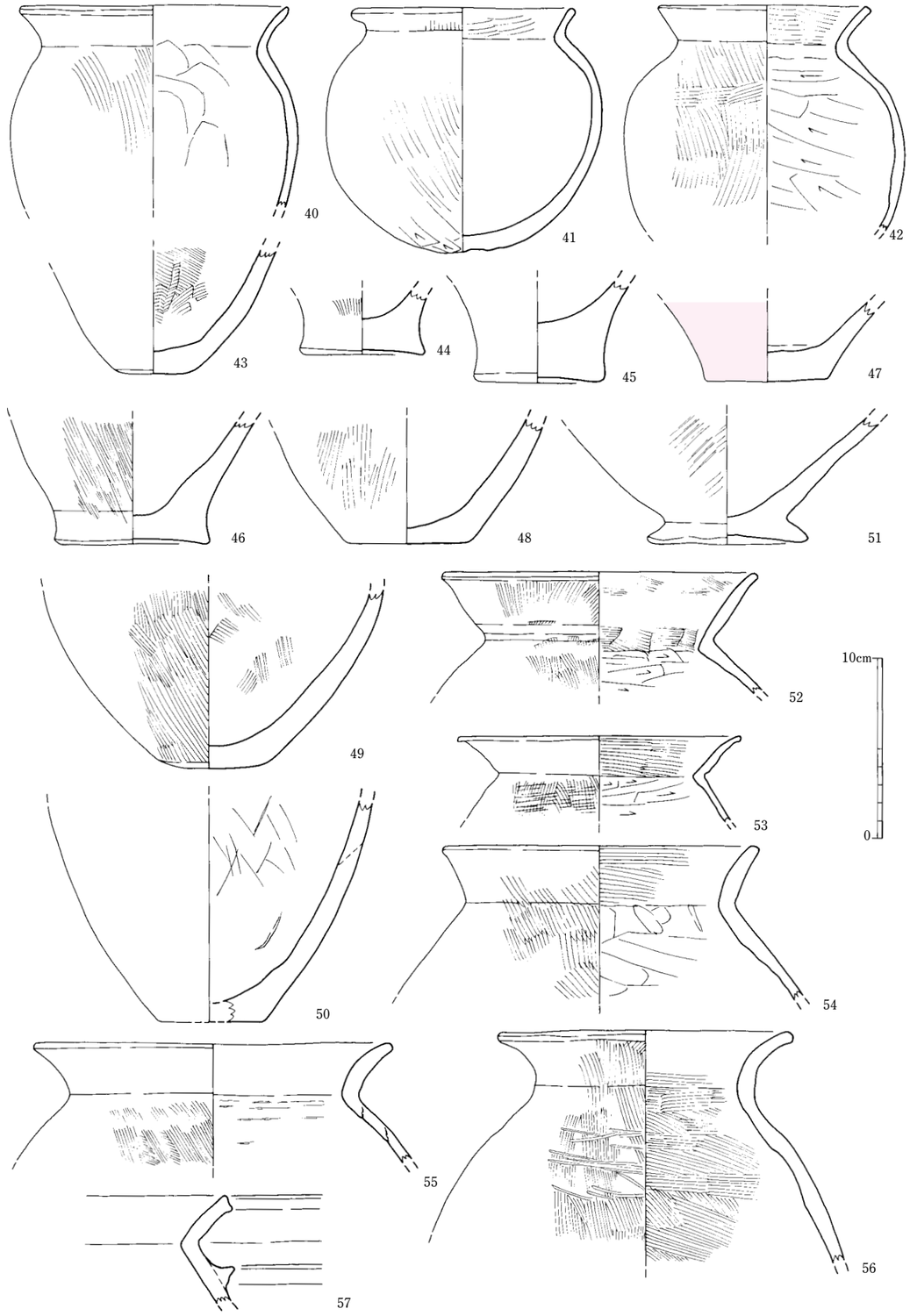


第148図　大谷中層出土土器実測図①（1/３）

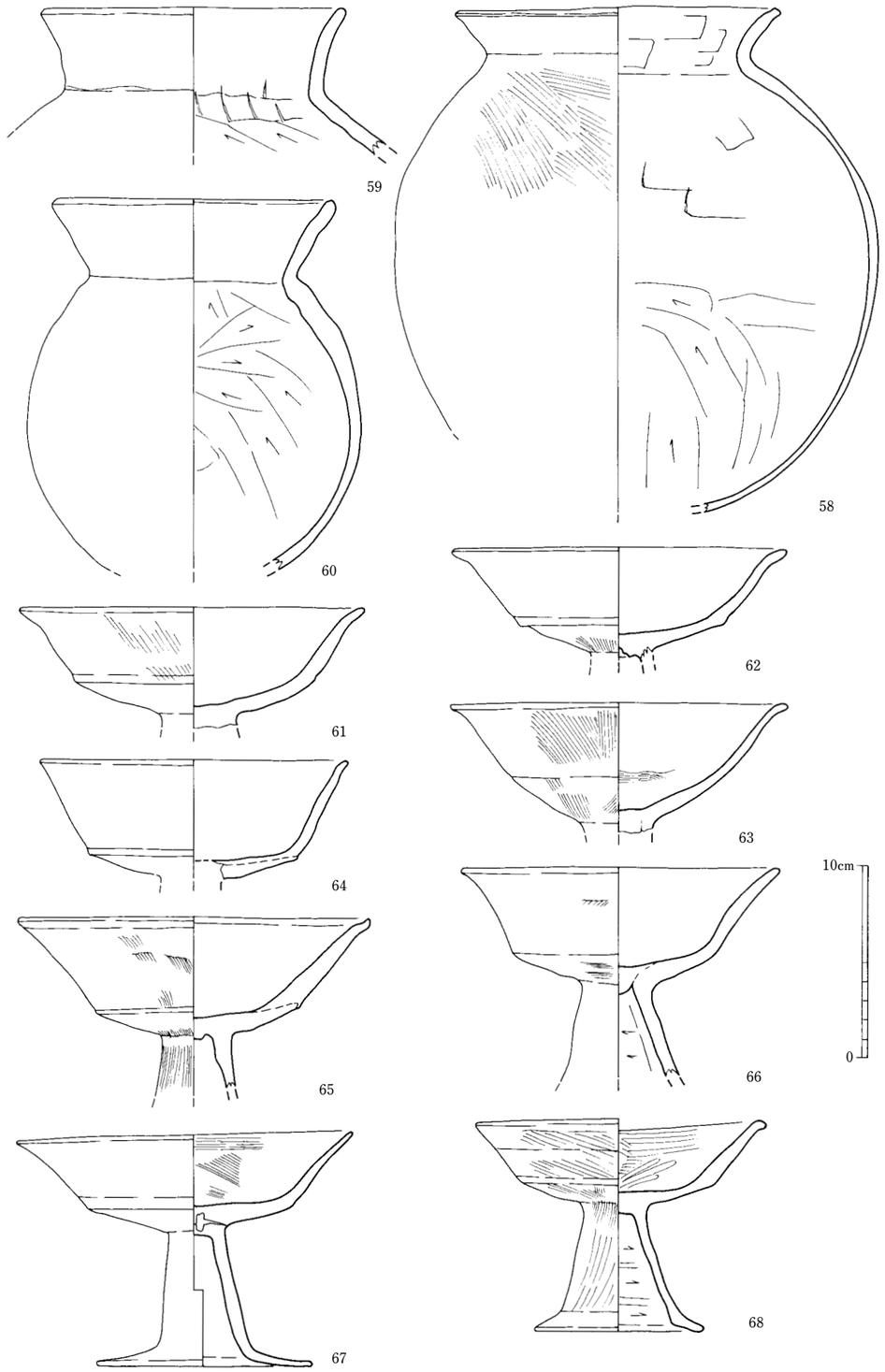
り明確ではない。６７は接合面の杯・脚部両方に径4㎜、深さ3㎜程度の臍が穿たれており、接合を良くするために他の粘土などを嵌めていたものか。６８は杯部内面にミガキを施す。６６・７２は充填法の痕跡が見られる。７１の外面に黒斑が見られる。７３～７５はやや大形の高杯で、屈曲部に明確に段を持つ。７３は摩滅のため調整は不明である。７４は外面刷毛目、内面ナデを施す。７５は内外面共に刷毛目を施す。７６～９２は脚部のみが遺存している。７６～８９は下位で明確に屈曲し開くもので、８３は外面、８６は脚部端付近に黒斑が見られる。９０～９２は脚部が緩や



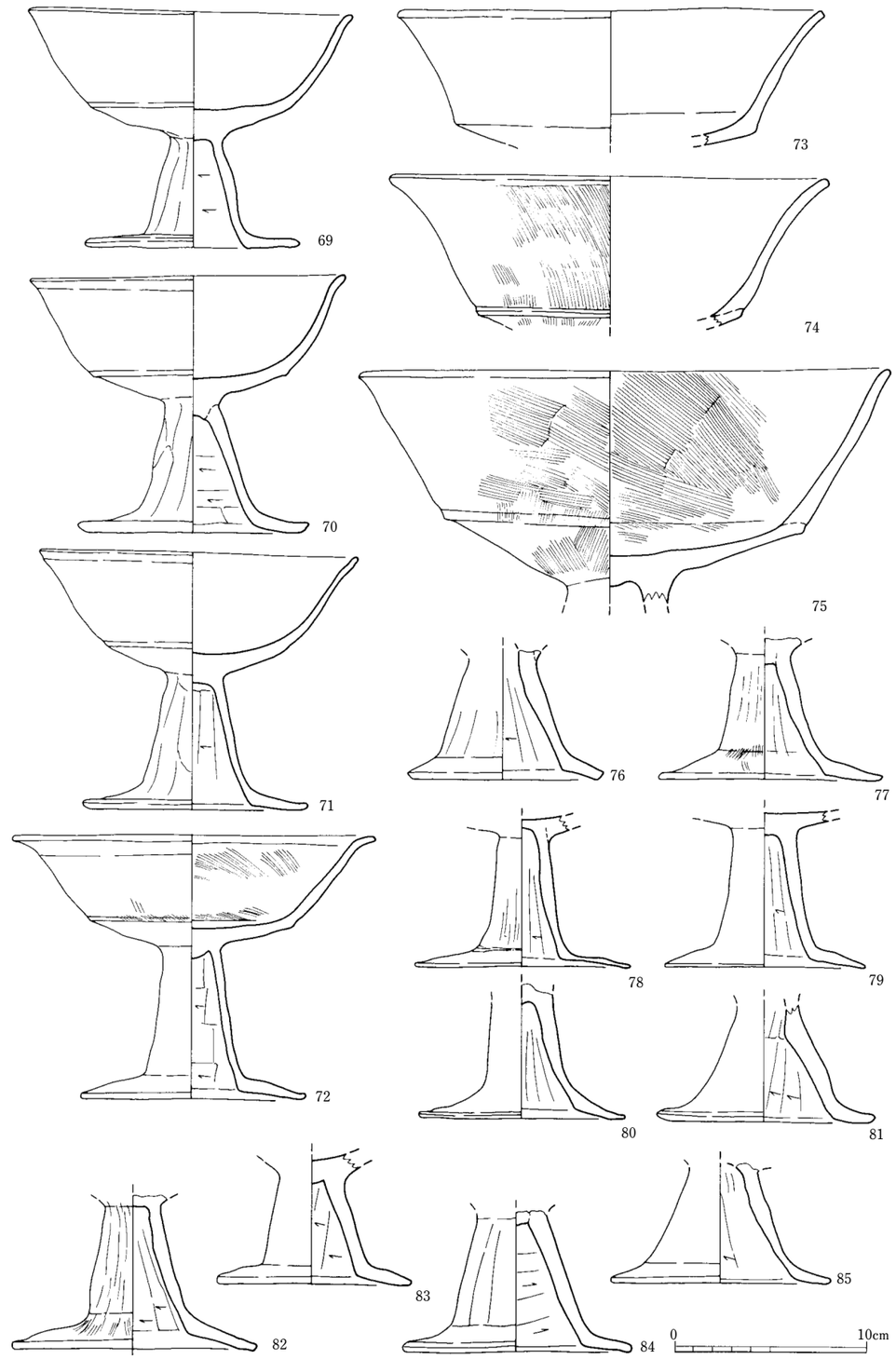
第149図　大谷中層出土土器実測図②（1/３）



第150図　大谷中層出土土器実測図③（1/３）

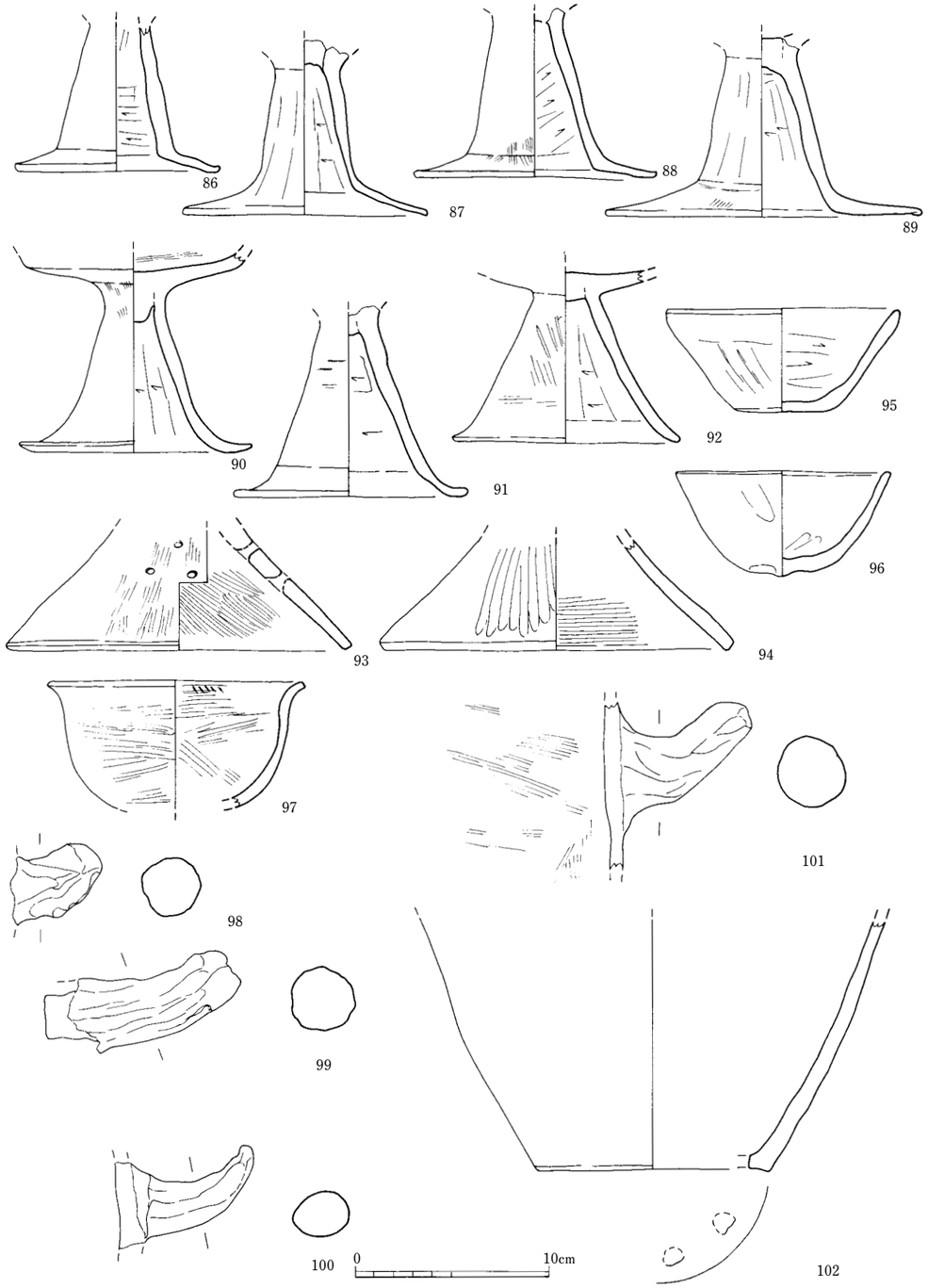


第151図　大谷中層出土土器実測図④（1/ 3）



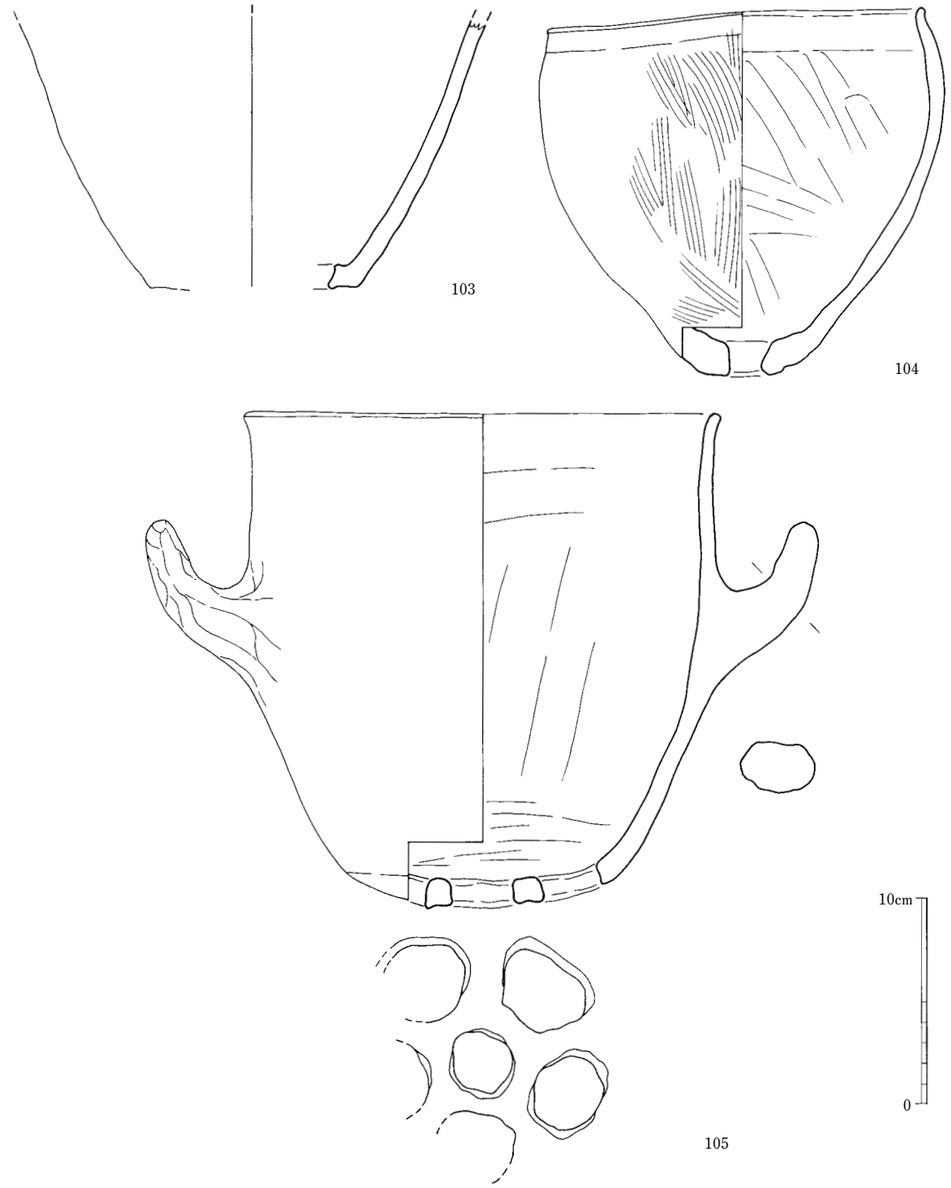
第152図　大谷中層出土土器実測図⑤（1/ 3）

かに開くもので、いずれも充填法の痕跡が見られる。９３・９４は混入品である。共に弥生時代終末～古墳時代初頭の高杯脚部で、９３は３つの孔が穿たれ三角形を呈する。共に外面ミガキ、内面刷毛目を施し、脚端部に黒斑が見られる。９５・９６は椀である。９５は平底を呈し、口縁部横ナデ、体部外面ナデ、内面ケズリを施す。９６は内外面ともナデを施し、外面に黒斑が見られる。９７は鉢である。内外面共にミガキを施す。９８～１０７は甑である。９８～１０１は把手のみが

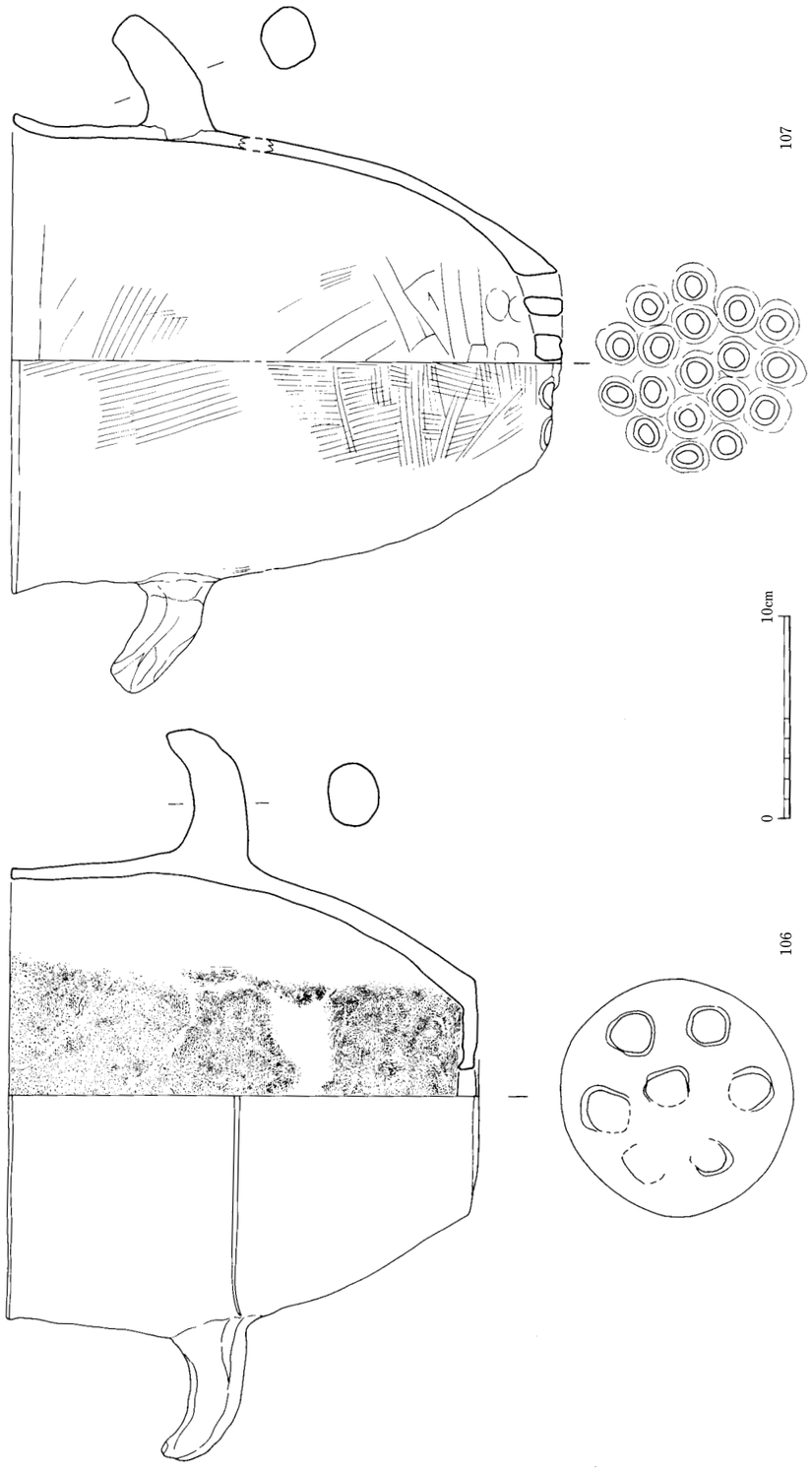


第153図　大谷中層出土土器実測図⑥（1/３）

遺存しており、９８はやや小さい。１０２は底部が大きく欠損するが多孔式の２孔のみ残存する。内外面共にナデを施す。外面に黒斑が見られる。１０３は１孔部分のみが遺存し、多孔式と考えられる。内外面共にナデを施す。１０４は中央に１孔のみが穿たれており、鉢形を呈する。外面刷毛目、内面指ナデを施す。１０５は底部が丸みを帯び、計６個の孔が穿たれる。内外面共にナデを施し、口縁部外面に黒斑が見られる。１０６は把手が水平気味に伸び、胴部に１条の沈線が付く。底部は平底で、７個の孔が穿たれる。内外面共にナデを施す。外面の把手より下位には、甕と接地していた跡が残る。１０７は把手がやや上方に伸びる。底部は平底気味で１８個の孔が穿たれる。内面下位ケズリ、他は刷毛目を施す。外面下位に黒斑が見られる。１０８は鍋である。底部が厚く、わずかに平底気味になる。口縁の一部が片口状に凹む。外面刷毛目、内面ケズリを施す。１０９～



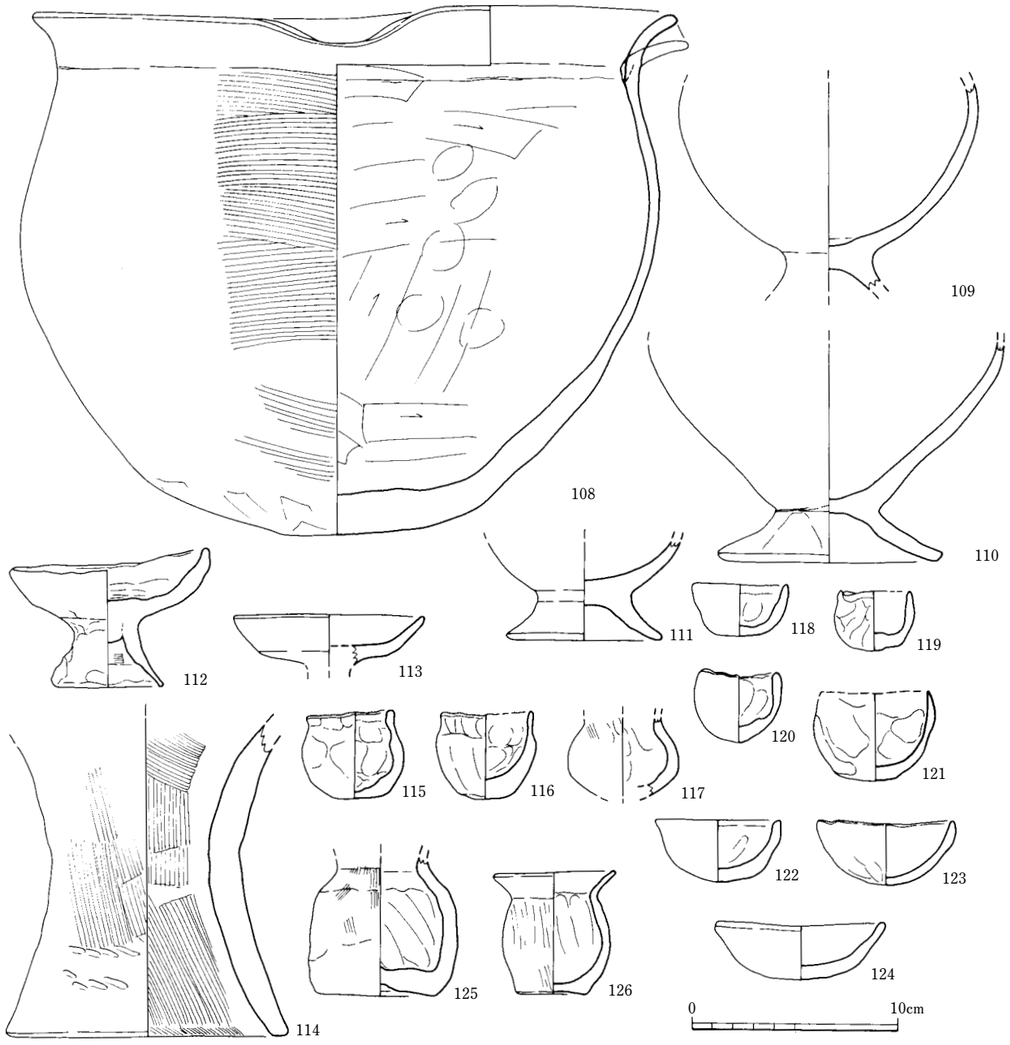
第154図　大谷中層出土土器実測図⑦（1/３）



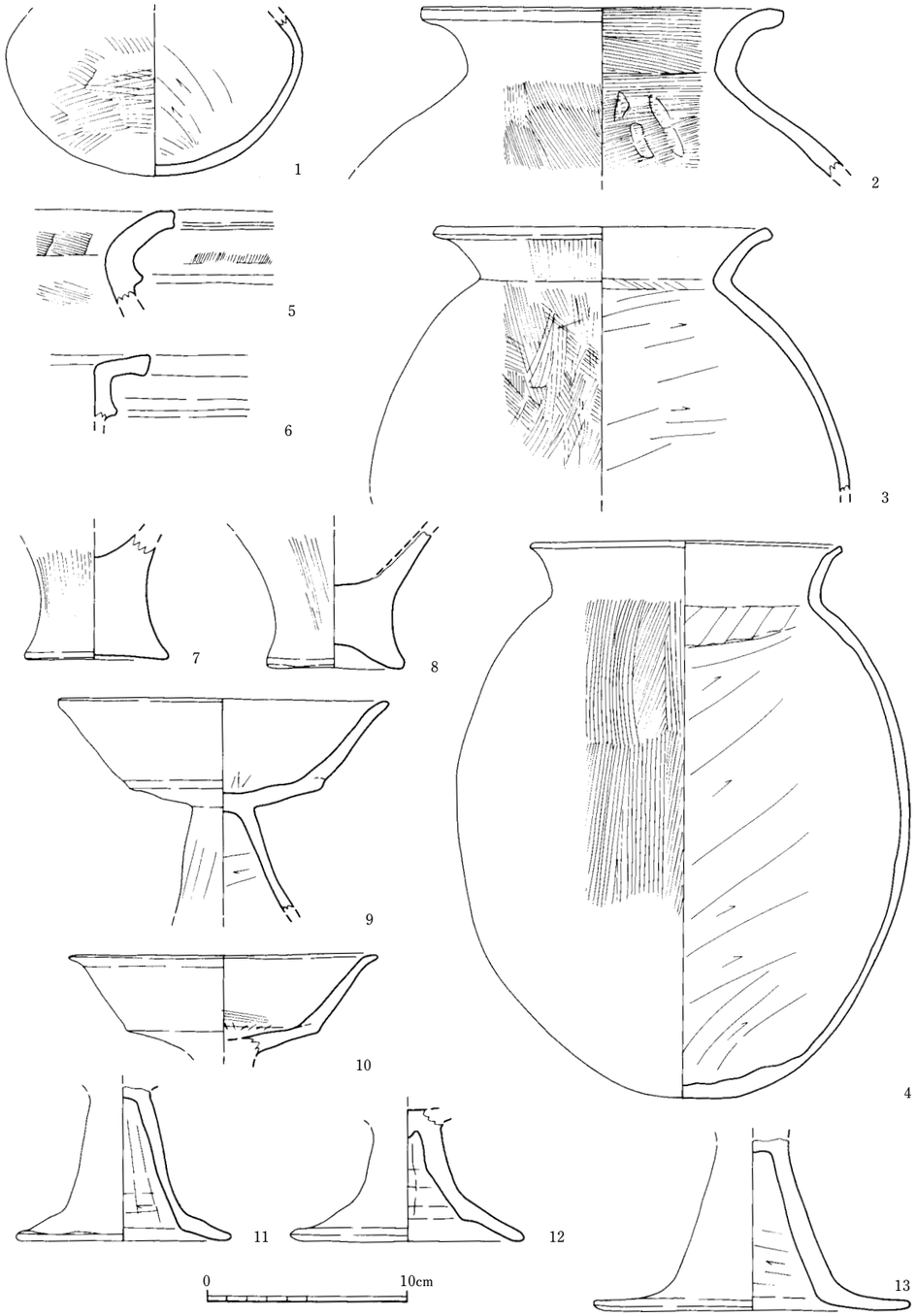
第155図　大谷中層出土土器実測図⑧（1/３）

１１１は脚付鉢である。いずれも内外面共にナデを施す。１１２・１１３は器台か。１１２はナデで成形し、手づくね状を呈する。１１３は剥離のため調整不明である。１１４は器台である。外面下位タタキ、他は刷毛目を施す。１１５～１２１は手づくね土器である。１１６は口縁部が薄くなるが､外面側に肥厚させていたものが剥がれたものと考えられる。１１９は外面に黒斑が見られる。１２２～１２４は小型の椀で、ミニチュア土器になるか。いずれもナデを施し、１２３・１２４は外面に黒斑が見られる。１２５･１２６はミニチュア土器である。１２５は平底で薬瓶形を呈する。外面刷毛目、内面ナデを施す。１２６は平底の甕形を呈し、口縁部横ナデ、体部外面刷毛目、内面ナデを施す。

土層と出土土器から、古墳時代中期を中心とした時期に形成された層と考えられる。上下の層の土器が多量に混入しており、特に下層の土器が多い傾向にある。また、弥生時代中期の土器は下層にないことから、古墳時代中期に弥生時代中期の遺構を壊した可能性がある。しかしながら、弥生時代中期の遺構・遺物共に希薄であり、上流側の遺物が流れてきている可能性もある。



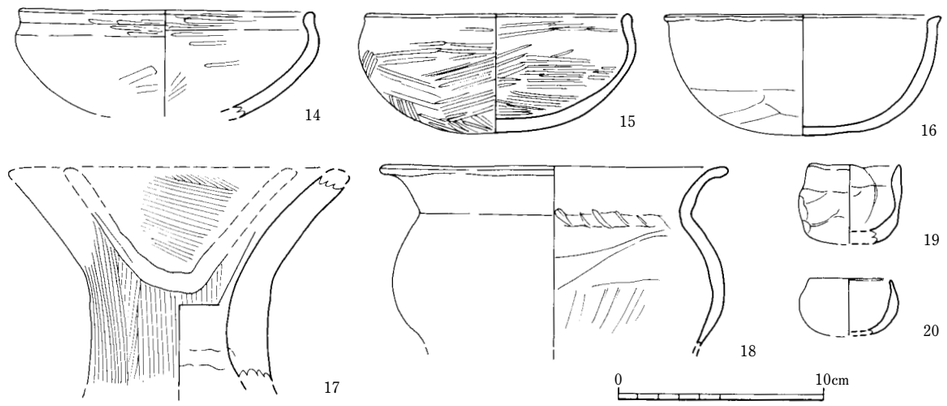
第156図　大谷中層出土土器実測図⑨（1/３）



第157図　大谷上層出土土器実測図①（1/３）

上層（１～６、２７～３１層）出土土器（図版５２、第１５７・１５８図）

１は小型壺である。外面刷毛目、内面工具によるナデを施す。２は壺である。口縁が大きく屈曲し、口縁部外面横ナデ、他は刷毛目を施す。３・４は甕である。３は口縁部外面刷毛目後ナデ、内面ナデ、体部外面刷毛目、内面ケズリを施す。４は長胴気味の甕で口縁部横ナデ、胴部外面刷毛目、内



第158図　大谷上層出土土器実測図②（1/３）

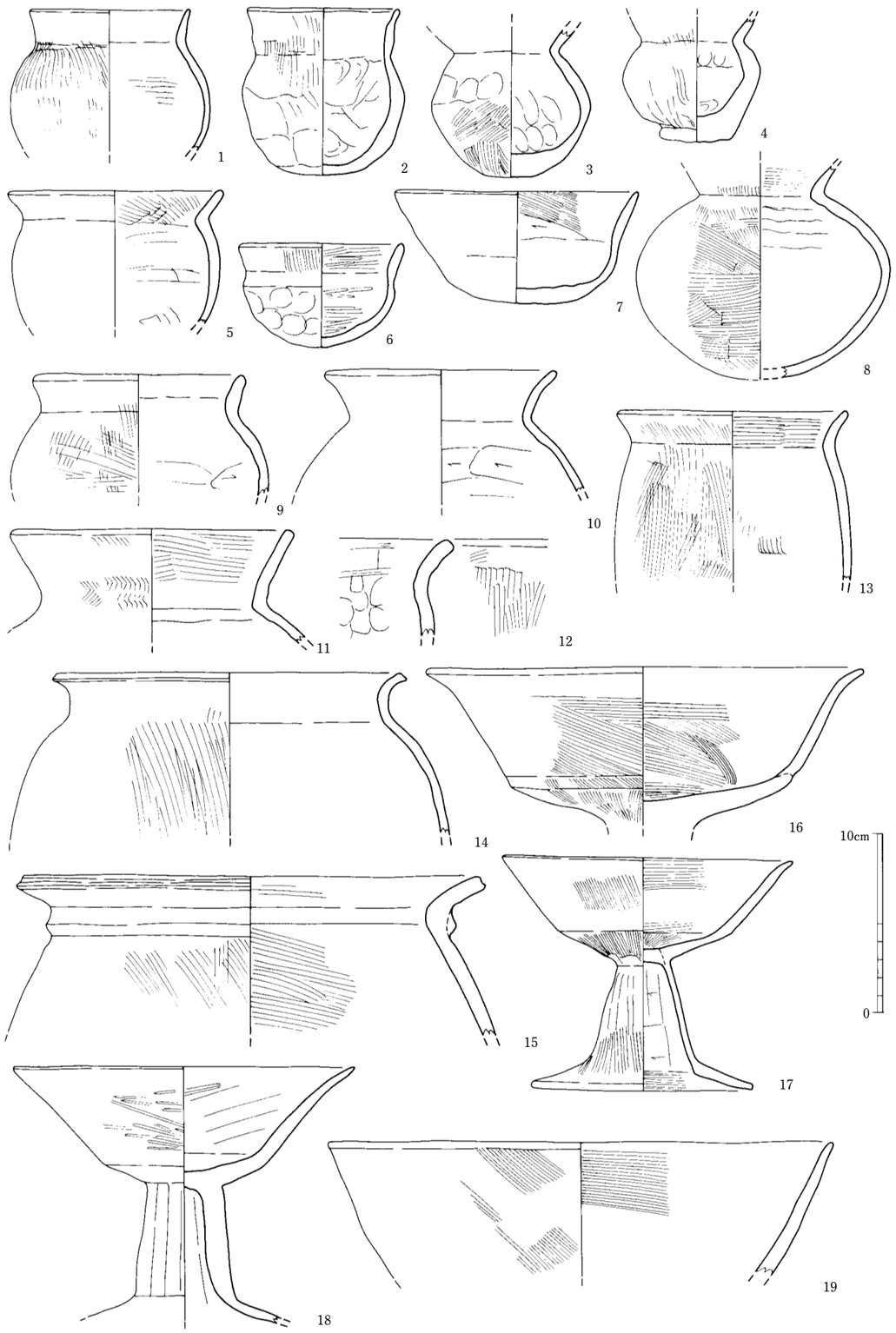
面ケズリを施す。５～８は弥生土器の甕で、弥生時代中期の混入品と考えられる。５・６は口縁下に断面三角形の突帯を付し、５の外面に煤が付着する。７・８は底部で、上げ底気味となる。９～１３は高杯である。９・１０は口縁部が外湾し、屈曲部に明確に段を持つ。共に内外面共にナデを施すが、１０の内面に刷毛目状の工具痕が見られる。１１～１３は下位で強く屈曲する脚部で、外面ナデ、内面ケズリを施す。１４～１６は椀である。１４・１５は口縁が内湾し、内外面共にミガキを施す。１６は口縁端部がわずかに外方に突出し、外面下位ケズリ、他はナデを施す。１７は器台で混入品か。上方が大きく抉れるタイプで内外面共に刷毛目を施す。１８は壺か。下端が外方に膨らんでおり、瓢形になる可能性もあるが、弥生時代の所産とは胎土・調整等が異なる印象を受ける。口縁部横ナデ、体部外面ナデ、内面上位ナデ上げ、下位ケズリを施す。１９・２０は手づくね土器である。共に口縁部が内湾する。

土層と出土土器から、古墳時代後期を中心とした時期に形成された層と考えられる。ただし、中層と同じく下層の遺物が多く出土しており、弥生時代中期の土器も散見される。

大谷出土土器（図版５２、第１５９・１６０図）

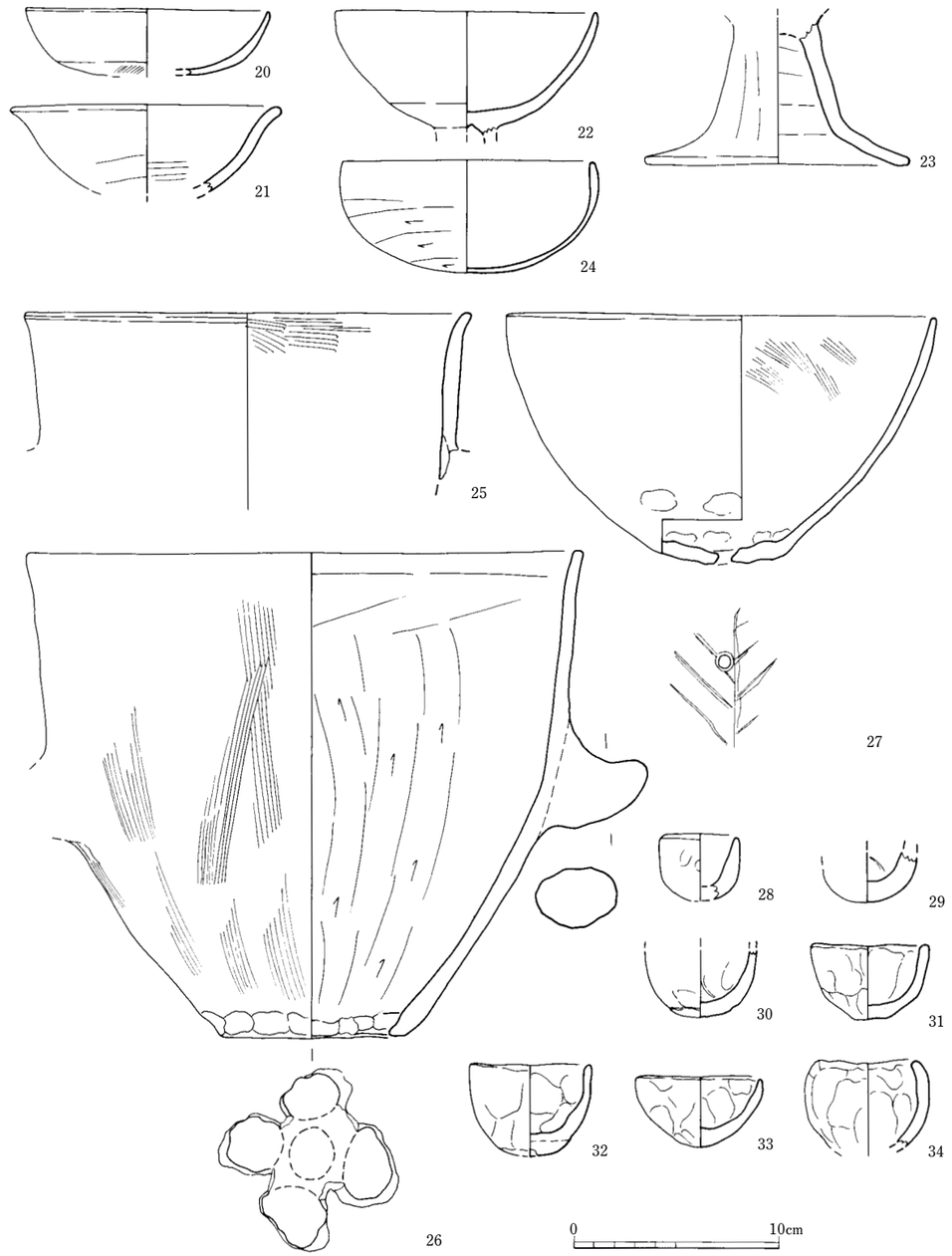
以下に、どの層から出土したか不明な遺物について報告する。

１～７は小型壺である。概ね外面刷毛目かナデ、内面ナデを施す。４は底部が不定形を呈し、作りが粗い。６は鉢形を呈し、外面に指頭圧痕、内面にミガキを施す。７はややつぶれた鉢形を呈する。焼成前に変形したものと考えられる。４～６の外面に黒斑が見られる。８～１１は壺である。いずれも中型で、概ね外面刷毛目、内面ナデおよびケズリを施す。８は外面に黒斑が見られる。１０は摩滅が著しく、内面にケズリの痕跡が残るのみである。１２～１５は甕である。１２・１３は小型品である。１２は口縁部刷毛目後ナデ、胴部外面刷毛目、内面に指頭圧痕を施す。１３は内外面共に刷毛目を施す。１４は口縁部横ナデ、胴部外面刷毛目、内面ナデを施す。口縁部外面に煤が付着する。古墳時代後期の長胴甕となるか。１５は弥生土器で、口縁下に１条の突帯が付される。口縁部横ナデ、体部内外面刷毛目を施す。１６～２３は高杯である。１６・１７は口縁端部が外湾するもので、脚部内面ケズリ、他は刷毛目を施す。１８は口縁が直線的に伸び、杯部ナデ一部ミガキ、脚部外面ケズリ後ナデ、内面シボリを施す。１９は古墳時代中期の大型高杯か。内外面共に刷毛目を施す。２０は杯部のみが遺存し、屈曲部付近に刷毛目、他はナデを施す。器台の可能性もある。



第159図　大谷出土土器実測図①（1/３）

２１は内面の一部に刷毛目、他はナデを施す。外面に黒斑および被熱痕跡が見られることから高杯とした。２４は椀である。口縁がやや内湾し、外面下位ケズリ、他はナデを施す。２５・２６は甑である。２５は口縁部付近のみが遺存し、把手の剥離痕が見られる。２６は平底で、５孔を穿つ。外面刷毛目､内面ケズリを施す。外面に黒斑が見られる。２７は底部に１孔を穿つ鉢ないしは甑か。外面工具によるナデ、内面刷毛目後ナデを施す。底部に線刻で木ノ葉文が描かれる。２８～３４は手づくね土器である。３４は大きく歪む。



第160図　大谷出土土器実測図②（1/３）

以上の土層や出土土器から、大谷の時期および形成過程は以下のようにまとめられる。

弥生時代後期においては、谷落ち際から厚く堆積し、土器を廃棄していたものと考えられる（２３～２５′層）。その後に弥生時代終末～古墳時代前期の１５～１７・２１・２２層が広く厚く堆積し、浅い窪地状となったものの、谷底部は流路状を呈していたと考えられる。

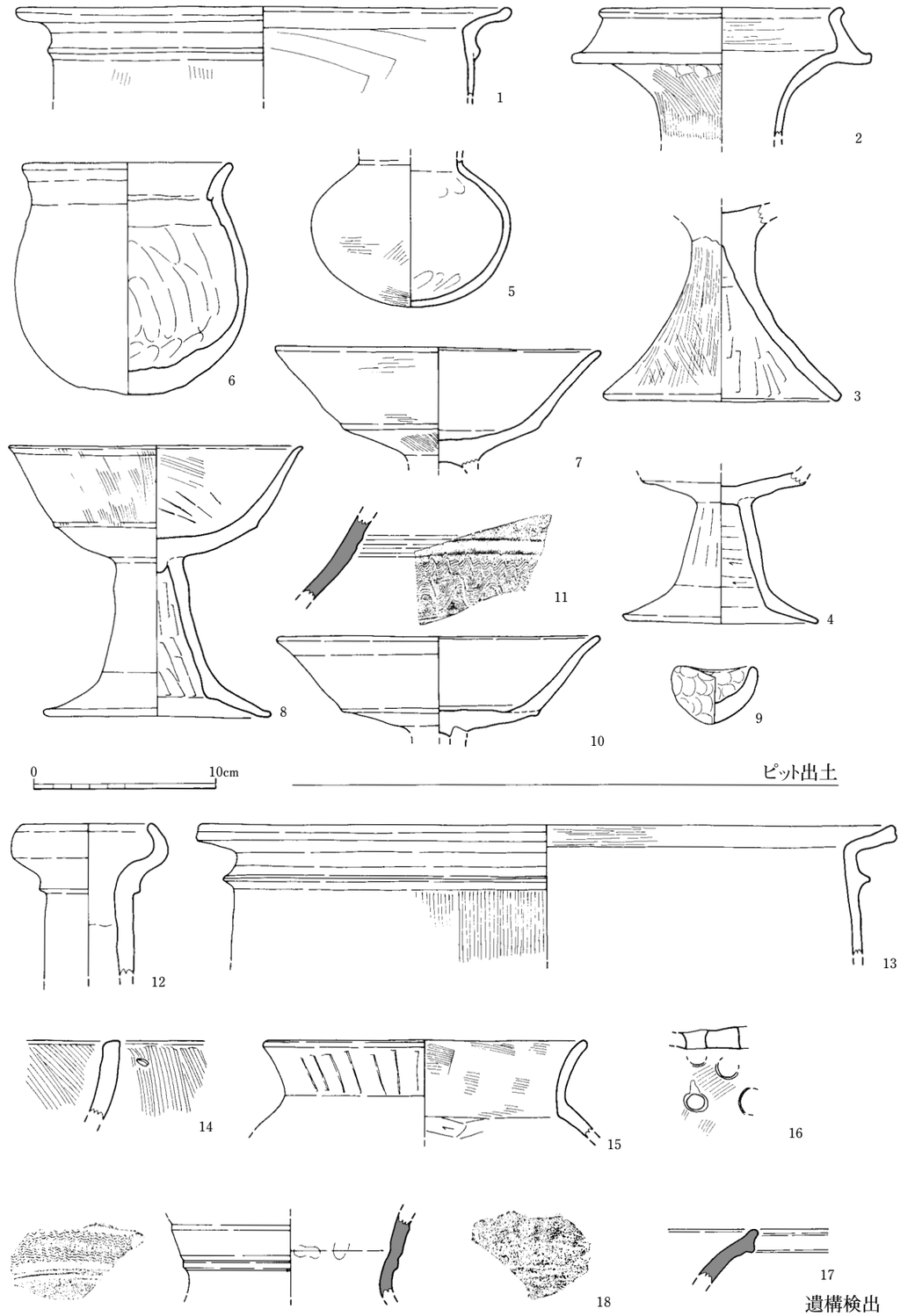
古墳時代中期になると谷落ち際の埋没部分に住居を建て、谷東側を再掘削して溝として利用している。しかしながら西岸は谷の堆積地形をそのまま利用したようで、緩やかな傾斜となる。この溝は窪地に手を加えることで溝状を呈するなど同時期の３６号溝と同様であることから、集落の東端の区画として機能していた可能性がある。溝の落ち際および底面では、初期須恵器の甕や器台が一帯に破砕され散布されているような状況が見られる。さらに、居屋敷窯製の初期須恵器瑳と高杯が設置されたような状況も確認され、谷の中で祭祀を行った状況が想定される。

古墳時代中期以降には、谷最上層の灰白色砂土（１～６、２７～３１層）を基調とする河川堆積物が分厚く堆積しており、須恵器と溝状遺構が検出される。それ以後大規模な河川氾濫が起こったと考えられ、大谷は完全に埋没している。

８　その他出土土器

１～１１はピット出土土器であるが、住居内のピット出土も含んでいる。１はＰ１７５出土の弥生土器甕の口縁部片である。頸部には三角形の突帯が付く。２と３はＰ１８９出土である。２は二重口縁壺の口縁部片である。口縁端部は外へはねて延びる。外面は刷毛目である。３は弥生土器高杯の脚部片である。杯部との接合部は厚いが、それより下は外へ徐々に広がっている。外面はミガキである。４は１９号住居内Ｐ１９９出土の土師器高杯である。角張った印象を受ける。これも杯部の屈曲部より上の口縁を欠損する。５はＰ２２６出土の土師器丸底壺である。頸部より上を欠損するが、全体的に薄く均一に作られる。６と７は２０号住居内Ｐ２３３出土の土師器である。６は甕である。口縁を欠損するが８割残存する。内面頸部は接合痕が明瞭にある。外面は砂粒がへばり付いて不鮮明だが、内面はナデが明瞭である。復元口径 11.8cm、器高 13.0cmを測る。７は土師器高杯の杯部である。復元口径 18.2cmを測る。８はＰ２４２出土の土師器高杯である。屈曲部は明瞭であるが、口縁端部は外へ大きく広がらない。復元口径 16.4cmを測る。９は４２号住居内Ｐ２８０出土の手づくねのミニチュア土器で、底部は尖る。１０は４３号住居内Ｐ２８７出土の土師器高杯の杯部である。杯部は浅く、復元口径 18.0cmを測る。１１は２０号住居内Ｐ２３８出土の須恵器器台片か。外面には２条の波状文がある。内面には深緑色の自然釉が付く。

１２～１７は遺構検出出土である。１２は弥生土器の袋状口縁壺片である。外面は丹塗りであるが、内面には丹が垂れている。１３は弥生土器甕である。断面三角形の突帯が付く。破片のため径に不安があるが、復元口径で 29cmを測る。１４は弥生土器鉢などの口縁部片か。内外面は刷毛目である。１５は土師器壺の口縁部片か。外面には工具痕が明瞭に付き、内面頸部には僅かにケズリが見える。１６は土師器甑の底部片である。現存で３ヶ所の穿孔を確認できる。１７と１８は須恵器である。１７は甕などの口縁部片か。焼成不良で灰白色を呈す。１８は器台などの脚部片で、外面の突帯を挟んで波状文が２条ある。



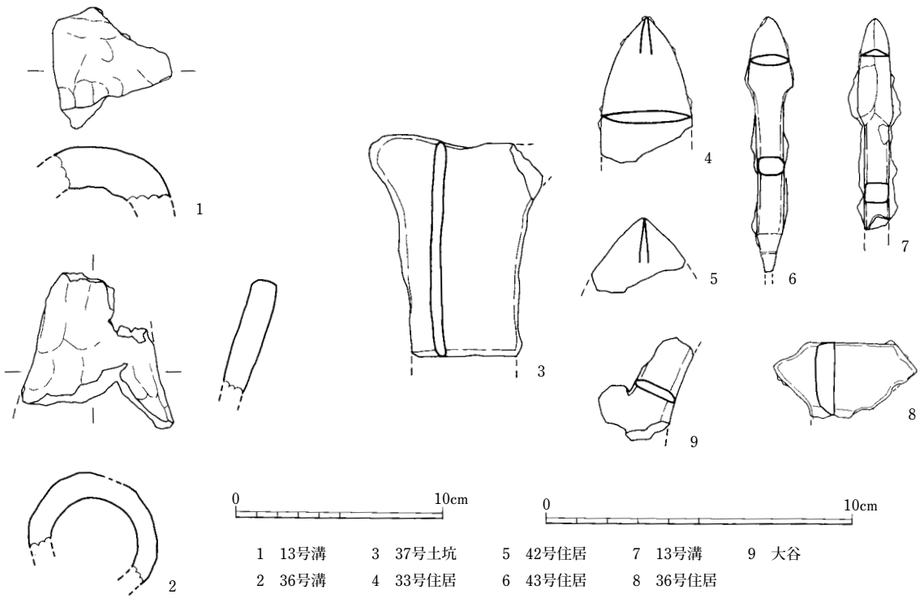
第161図　その他出土土器実測図（1/３）

９　特殊遺物（図版５２～５４、第１６２～１６６図）

１６２図の１と２は鞴の羽口片である。２の端部は焼けているため表面が荒れ、鉄滓も少し付着する。

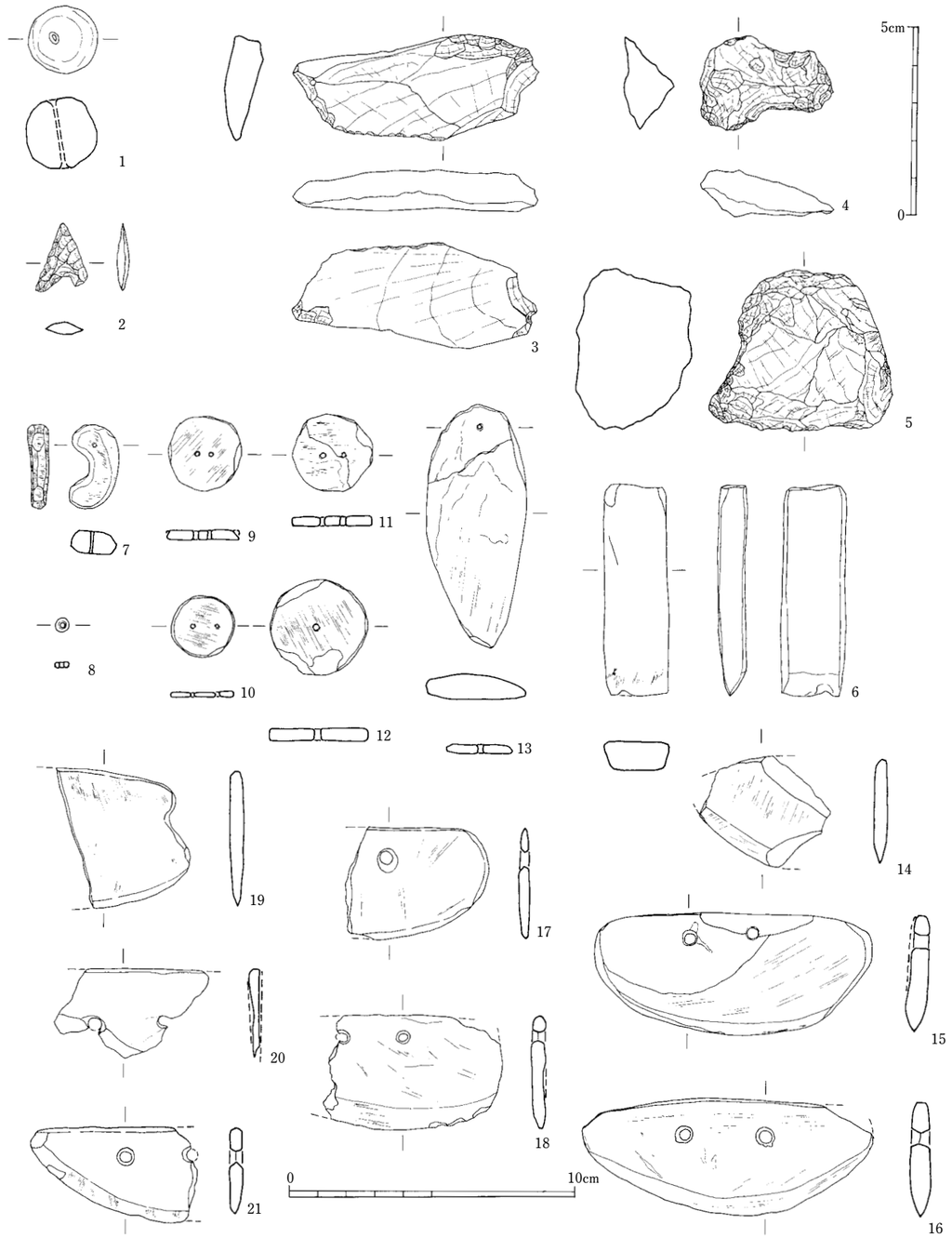
３～９は鉄製品である。３は先端部が撥状になる鉄鋌である。残存長 7.2cm、幅 5.6cm、厚さ５㎜以下、重さ 33.7g を測る。先端部を一部欠くが、下半部は古い断面であり切断した可能性がある。４は平根系の長三角形鏃片である。先端部のみ残存する。５も三角形鏃片か。これも先端部のみ残存する。６柳葉形の鉄鏃である。両丸造で、頸部断面は隅丸長方形である。茎部は先端部を欠き、木質はほとんど見られない。７は鉈であり、刃部は断面三角形を呈す。刃部先端部はやや反っている。８は不明鉄製品である。残存する部分には刃部は見当たらない。９は右側面のみ刃部が生きる。残りは欠損する不明鉄製品である。

１６３図の１は径 2.4cm、重さ 15.1g のややくずれた円形の土製丸玉である。中心には径 2㎜以下の穿孔を施し、その部分は平坦になる。２は姫島産黒曜石の石鏃である。基部の一部を欠損する。３はサヌカイト製のスクレイパーである。片側の側辺部の半分に刃部を形成する。４は黒曜石製の掻器である。片側の側辺部に刃部を作る。５は珪質岩製の石核である。６は頁岩製の柱状片刃石斧で、片側には約１cmの刃部を形成する。７は滑石製勾玉で、頭部には径１～2㎜の穿孔を施す。頭部は尾部よりやや厚く大きく作られている。側面は細かくミガキ削られ、腹部は半円形状に形成する。８は滑石製臼玉で、径 5㎜の円形で、2㎜の孔を穿つ。９～１２は有孔円盤である。９～１１は双孔で滑石製、１２は単孔で絹雲母片岩製で他よりも一回り大きい。いずれも丁寧に磨かれている。１３は滑石製の剣形模造品で、上部に 2㎜の孔を穿ち、左右側縁部を刃部状に形成する。１４～２１は石庖丁である。ほとんど破片のみであるが、１５と１６はほぼ完形品である。石材は粘板岩、輝緑凝灰岩などである。２２は砂岩製の叩き石である。上部は折れているが、握り手部分より下部は一回り大きい。２３は磨石である。端部のみ残存する。２４は凹み石か。長さ 37.9 × 31.7

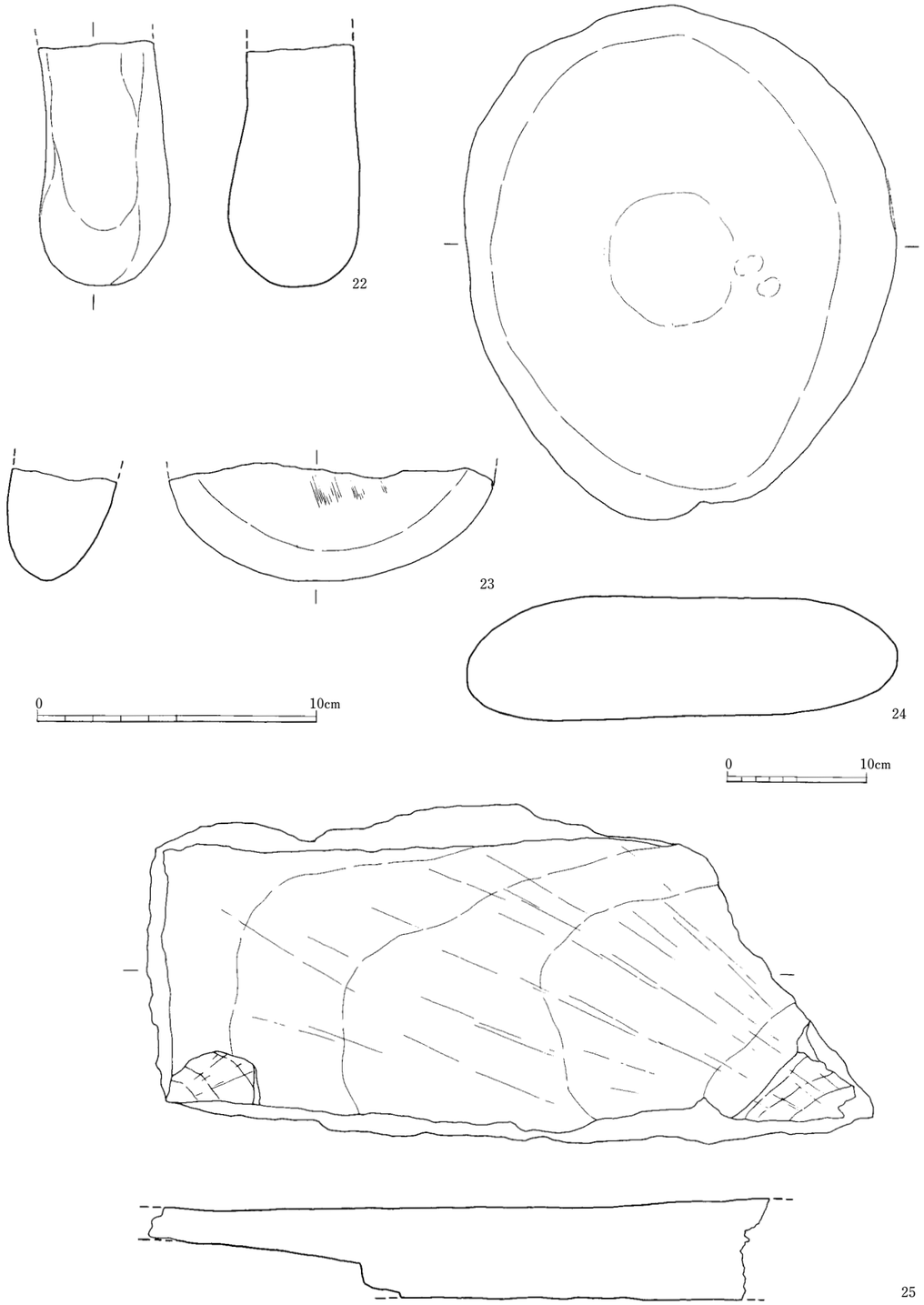


第162図　鋳造関係製品および鉄製品実測図（1/２、1・2は1/３）

cmと大きい。２５は台石か。上部の平坦面を使用したものか。２６～３７は砥石である。２６・２９・３２は良く使用されたため、側面は擦り減る。２７・２８・３０は薄い板状の砥石で、両面を使用する。３１・３３・３４・３６・３７は上面のみ使用する。３５のみ上部に 4㎜の穴を通す。裏面は剥離しているため不明であるが、表面、両側面、下面の４面を使用する。他に軽石があるが、写真のみで図化はしていない。

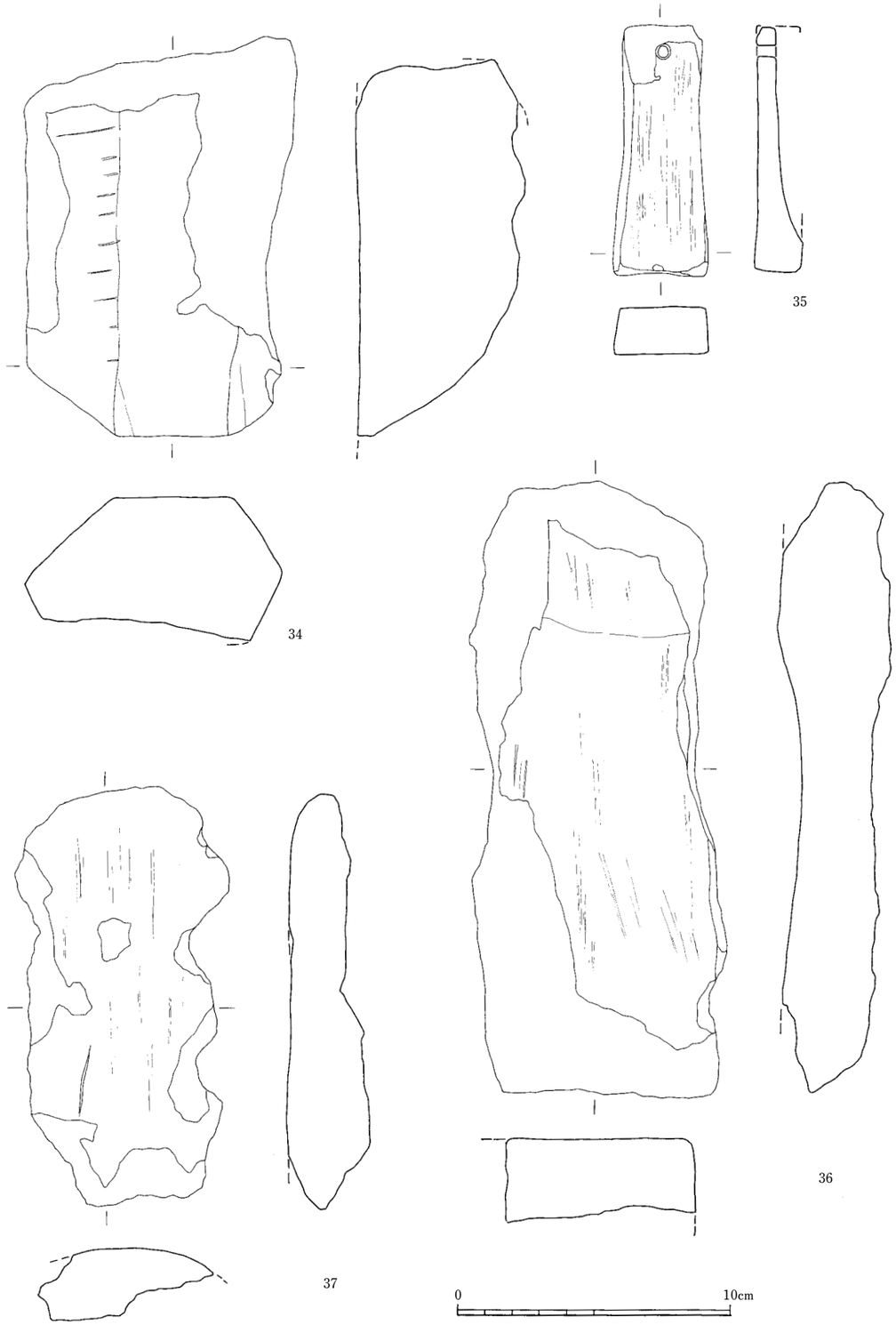


第163図　石器実測図1（5は2/３、他は1/２）



第164図　石器実測図2（24は1/ 4、他は1/ 2）

第165図　石器実測図3（1／2）



第166図　石器実測図4（1/２）

表2　特殊遺物計測表

挿図	番号	図版番号	出土遺構	器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	石材
163	2	53	撹乱土	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.0	姫島産黒曜石
163	3	53	遺構検出面	スクレイパー	3.7	8.6	1.4	48.0	安山岩
163	4	53	36 号溝②灰黄色粘質土	掻器	3.5	2.5	1.3	10	黒曜石
163	5	53	大谷⑤ 9・13・19・20 層	石核	5.6	6.4	4.0	186	珪質岩
163	6	53	大谷⑧	片刃石斧	7.4	2.3	1.0	35.6	頁岩
163	7	53	36 号溝①	勾玉	3.0	1.7	0.8	5.4	滑石
163	8	53	27 号住居	臼玉	0.5	0.5	0.2	0.1	滑石
163	9	53	43 号住居⑩	有孔円盤	2.6	2.6	0.4	4.9	滑石
163	10	53	13 号溝⑭祭祀２	有孔円盤	2.1	2.1	0.2	1.9	滑石
163	11	53	13 号溝⑭祭祀３	有孔円盤	2.8	2.8	0.4	4.8	滑石
163	12	53	大谷	有孔円盤	3.4	3.4	0.4	10.0	絹雲母片岩
163	13	53	13 号溝⑨	剣形	8.5	3.5	0.9	32.0	滑石
163	14	53	12 号住居埋土中	石庖丁	4.6	3.9	0.4	10.8	輝緑凝灰岩
163	15	53	16 号住居	石庖丁	9.7	4.3	0.7	50.3	粘版岩
163	16	53	31 号住居	石庖丁	10.2	4.1	0.7	42.1	輝緑凝灰岩
163	17	53	13 号溝⑬下層	石庖丁	5.1	3.9	0.4	11.5	輝緑凝灰岩
163	18	53	36 号溝②黒灰砂質土	石庖丁	6.2	4.0	0.5	19.3	輝緑凝灰岩
163	19	53	42 号住居内Ｐ 281	石庖丁	4.7	4.9	0.5	18.9	凝灰岩
163	20	53	大谷⑤	石庖丁	5.4	3.2	0.4	6.9	粘版岩
163	21	53	遺構検出面	石庖丁	5.8	3.4	0.5	14.9	輝緑凝灰岩
164	22	54	大谷⑦ 9・19・20 層	叩き石	8.7	4.7	4.7	334.1	砂岩
164	23	54	32 号土坑	磨石	11.6	4.2	3.9	246.0	安山岩
164	24	54	28 号住居	凹み石	37.9	31.7	9.0	約 15000	安山岩
164	25	54	13 号溝⑬上層	台石	12.0	26.1	3.7	1493.7	安山岩
165	26	54	19 号住居	砥石	9.5	5.0	4.3	173.7	凝灰岩
165	27	54	31 号住居	砥石	13.2	6.2	1.1	148.0	粘板岩
165	28	54	33 号住居	砥石	8.7	4.8	0.8	51.6	粘板岩
165	29	54	34 号住居	砥石	9.7	4.6	3.9	114.3	細粒凝灰岩
165	30	54	36 号住居	砥石	7.7	3.0	1.1	47.9	粘板岩
165	31	54	40 号住居	砥石	6.7	3.0	1.5	48.0	粘板岩
165	32	54	1 号方形周溝状遺構	砥石	18.4	8.1	9.2	1800.0	凝灰岩
165	33	54	13 号溝⑬上層	砥石	9.8	9.1	5.9	500.0	凝灰岩
166	34	54	36 号溝②	砥石	14.7	10.0	6.2	773.2	細粒凝灰岩
166	35	54	大谷⑤ 17・20 層	砥石	9.2	3.5	1.7	57.2	細粒凝灰岩
166	36	54	大谷⑦	砥石	22.7	9.4	3.5	1240.0	粘板岩
166	37	54	大谷⑨	砥石	14.4	7.9	3.0	369.5	凝灰岩
	38	54	38・40 号住居出土		5.6	5.4	2.2	11.8	軽石
	39	54	42 号住居出土		4.5	4.0	3.3	10.7	軽石
	40	54	42 号住居出土		6.0	5.0	4.7	19.6	軽石

１０　まとめ

京ヶ辻遺跡２区の調査では、竪穴住居跡３７軒、掘立柱建物跡５棟、土坑１６基、溝状遺構１２条、１号方形周溝状遺構などを検出した。主な時期は弥生時代後期、古墳時代前・中期である。

なお、京ヶ辻遺跡１・３区では縄文時代と平安時代の遺構を報告しているので、そちらを参照して頂きたい。以下、時期ごとに報告する。

弥生時代後～終末期

この時期については１区でも報告済であるが、１区北側に集落域が広がると考えられる。１区北側では９ 軒の住居跡を検出する。その中には、中央炉以外に付設炉６基を伴う９号住居跡などもある。また断面Ｖ字状で「濠」の機能を有していた３０号溝、１号円形周溝状遺構、１５号建物などを検出する。

２区ではこの時期の住居跡は少ないが、１６・１７・１８・31～３３号住居跡がある。１区でも述べたが、小規模な集落が点在している状況である。３３号住居跡のみ円形住居で、３２号住居跡などと切り合いやや古い時期のものか。その他に関連する遺構としては後期でも終末に近い時期と思われる小児甕棺を出土した３１号土坑がある。

弥生時代終末～古墳時代前期

この時期になると大谷の内側に竪穴住居跡が営まれている。１３・１４・２２・２４・３１・３４・４０・４６～４８号住居跡がある。西新町遺跡（福岡市）のようなカマドを設置する可能性を踏まえて調査を行っていたが、そのような住居ではなく中央炉を挟み二本又は四本柱を基本とし、ベッド状遺構を設置する京築地域でも普遍的な竪穴住居跡である。遺物も在地系の土器以外に畿内・瀬戸内・山陰系の土器が散見されるが、同時期の集落の様相とさほど変わらない。

住居跡以外にも１区南東で３２・３４号溝が南北方向、２区の南側の３６号溝は谷へ向けて掘削されている。特に３６号溝は最大幅６ｍと規模も大きく溝というより濠に近く、また、その外側にはこの時期の住居跡は検出しておらず、集落の南限として考えられる。

古墳時代中期

この時期の住居跡が比較的多く検出されており、集落が賑やかな時期だったと思われる。中央炉からカマドへと移行した時期であり、京ヶ辻遺跡でも多くの住居跡で検出されている。カマドを付設する住居跡は１２・１９・２０・２１・２３・２８・３０・３６・３７・４１～４５号住居跡がある。特に１９・２３号住居跡からは「L」字型カマドが検出されており、注目される。それ以外にも特異なものとして４１・４２号住居跡の隅カマドがある。また住居跡にカマドは無く、須恵器を出土した２７・３９号住居跡もあり、カマドへの移り変わる時期を表している。溝内から須恵器瓹片や土師器甑片などが出土した１号方形周溝状遺構や１号竪穴遺構なども挙げられる。周辺に点在する２２～２４・２７・２９・３０・３３・３７号土坑や１３・３６号溝もこの時期に該当する。

この中期の集落は１３号溝（１区）、３６号溝（２区）、大谷（２区）の幅約 100 ｍ×長さ約 90 ｍの範囲に営まれている。３軒の並列した１９・２０・２３号住居跡は、集落の中で比較的大きな住居跡であり、これら中心に他の住居跡がある。古墳時代前期と中期は近くに流れる祓川の氾濫などの影響を受けていたと思われたが、住居位置・東西南北の外郭がほぼ踏襲されていることを考えると継続性がある。恐らくは、４世紀から続く旧来の集落に、５世紀前半代に住居構造・カマド・須恵器窯構築技術などをもった「工人」が移入した集落となったのではないだろうか。京ヶ辻遺跡から居屋敷窯まで直線で１㎞、京ヶ辻遺跡から柱松古墳群（長養）まで直線で 1.2㎞の距離であり、居屋敷窯は燃料や粘土採掘などの条件を加味してあの場所が選ばれたのであろう。須恵器工房は当然、窯周囲にも存在している可能性が高く今後の調査に待たれる。

古墳時代後期

１３号溝上層と大谷上層は６世紀中～後半頃の時期の須恵器片が出土する。住居跡はほとんどなく、集落は次第に衰退している状況である。

京ヶ辻遺跡では縄文時代の遺構も一部あるが、集落は弥生時代後期～古墳時代中期頃までが継続的に営まれている。古墳時代中期以降は集落は断絶し、平安時代後期に再度周辺は集落となり、現在まで続いていくと思われる。（海出・坂本）

井泉遺構について

大谷部分において、井泉遺構が検出された。位置は東側から流れてきた水が北側に曲がるコーナー部分に当たる。コーナー部分がやや膨らむような形で井泉遺構が作られており、その下流側に初期須恵器の破片が多く検出されている。構造は本文中にも述べたように、中央 1.15m 程の窪み部分の周囲に川原石が積み重ねられており、北側の下流側 20㎝程が開口部となる。そのさらに下流側には板が検出されており、堰などの構造物があったものと考えられる。内部は調査中に湧水が確認されており、当時より湧水点として機能していた可能性が高い。

井泉遺構は三重県城之越遺跡や南紀寺遺跡などで大規模な遺構が検出されており、儀礼空間の分析が行われている（穂積 1992・2004）。分析の中で、井泉の形態分類ならびに井泉祭儀の認定条件として奉祭品や祭儀に使った遺物の出土、実用目的では説明しづらい仕様の付加、遺構群全体における井泉遺構の存在形態などが挙げられており、本遺跡でそれらの要素がどの程度認められるか考えた上で、位置づけを行う。

本遺跡の井泉遺構の形態は流路付設型と考えられるが、調査区端に位置しており源流型である可能性も残す。また、遺物の出土は井泉内では土師器の高杯１点のみが出土しており、その他にわずかに下流側で初期須恵器大甕の破片、土師器のミニチュア土器・小壺が出土している。井泉内で遺物の出土が少ないことは、内部を「清浄」に保つという意味で他の遺跡でも認められる。祭祀遺物としては、ミニチュア土器は祭祀性が高く、初期須恵器についても六大Ａ遺跡などで出土しており、谷内部から他にも初期須恵器の瓹、高杯、器台が出土していることから、これらも井泉祭儀の一端を担って廃棄されたものと捉えられるだろう。本遺跡では大形建物や、祭祀空間と捉えうる広場などは確認されておらず、集落全体の中で、井泉遺構がどのような性格を担っていたのかに関しては不明である。ただ、井泉遺構の南側にも須恵器片が認められ、テラスなどの段が存在することから、大谷自体がより東および南側に広がっていた可能性がある。

井泉遺構および大谷の位置づけは調査区外に広がる可能性があること、建物や祭祀空間の欠如から難しい。しかし、当遺跡は居屋敷窯において初期須恵器の生産に関わった渡来人の集落という可能性があることから、同様に渡来人の関わりが想定されている、六大Ａ遺跡や南郷遺跡群の導水施設などを考え合わせると、何らかの水に関わる祭祀的な空間として井泉遺構および大谷が機能していた可能性は高いものと考えられる。（城門）

京ヶ辻遺跡出土の初期須恵器

京ヶ辻遺跡で出土した初期須恵器は破片資料も含めると８０点以上になる。再度、出土した須恵器について述べると、住居跡や土坑などの個別の遺構に伴う出土もあるが、ほとんどの出土は１３・３６号溝および大谷・小谷の出土である。住居跡自体が削平を受けているため破片資料が多く完形品は少ないが、１２・２７・３６・３８・３９・４３号住居跡で杯蓋・高杯・瓹・壺などが出土する。また１３・３６号溝や大谷・小谷からは祭祀に用いられた瓹・壺・甕・器台などがあり、居屋敷窯製と考えられる瓹も出土する。

これら京ヶ辻遺跡出土の初期須恵器の主な器種構成は以下になる。個々の遺物については先述しているので詳細な説明は省略する。なお、一部の土器については焼成不良のためなのか軟質で須恵器に含めるのに問題があるのかもしれない。

蓋杯　杯蓋は２種類ある。一つは器高が低く、口縁部のやや上に三角形状の突帯がつく。突帯から天井部の撮み間には刺突文を２段施す。もう一つは焼成不良のためなのか軟質の杯蓋である。器高は高く丸みをもつもの。２点ともに外面の天井部にかけて丁寧なヘラケズリを施す。杯身は体部破片しか出土しておらず、全容は不明である。

高杯　有蓋と無蓋が出土する。有蓋高杯は口縁端部が僅かに受け部より高くなる。透かしはない。無蓋高杯は土師器を模倣した形状で、器形や色調などから２種類に分けられる。

ジョッキ形土器　１点のみ出土である。把手の形状は不明である。器高が高く、無文である。

瓲　居屋敷窯製と酷似し、体部が球形のタイプとそれ以外に分けられる。また土師器の小型丸底壺に酷似するものなどがある。

壺　壺は複数出土するが、器形が判別しやすいものを載せている。１３３図３は居屋敷窯出土の瓲と焼成、色調などが酷似するタイプである。７図１は残存状況から壺とするが、焼成は不良である。６６図３のような軟質の小型壺もある。なお、８８図２７９は陶邑産の直口壺である。

甕　複数出土するが、体部片が多く全体の器形は不明である。唯一口縁～肩部まで残存していた１３３図１３がある。頸部～口縁までの中間までは直立し、口縁端部に向かって大きく開く。調整はナデにより消されている。７５図１４９は体部下半のみ残存していたもので、須恵器の甕としては珍しく、底部中央に円盤が貼り付き平底になる。８８図２８２は焼成不良の甕体部片で、居屋敷窯製の甕と焼成具合が似る。

器台　高杯形器台が１点出土している。杯部の装飾文様は上から順に波状文、組紐文、刺突文を施す。脚部は端部片のみの出土であり、詳細は不明である。

甑　焼成不良で軟質の土器である。口縁端部に向かって直に開く。外面把手付近は歪んだ沈線が引かれている。把手の先端部は尖らず、切られている。

これら、京ヶ辻遺跡の初期須恵器はこれまで豊前地域で出土した初期須恵器と比べても、器種の豊富さや出土点数の多さから類を見ない。特に瓲は居屋敷窯特有の形状であり、現段階では京ヶ辻遺跡以外に出土例はない。

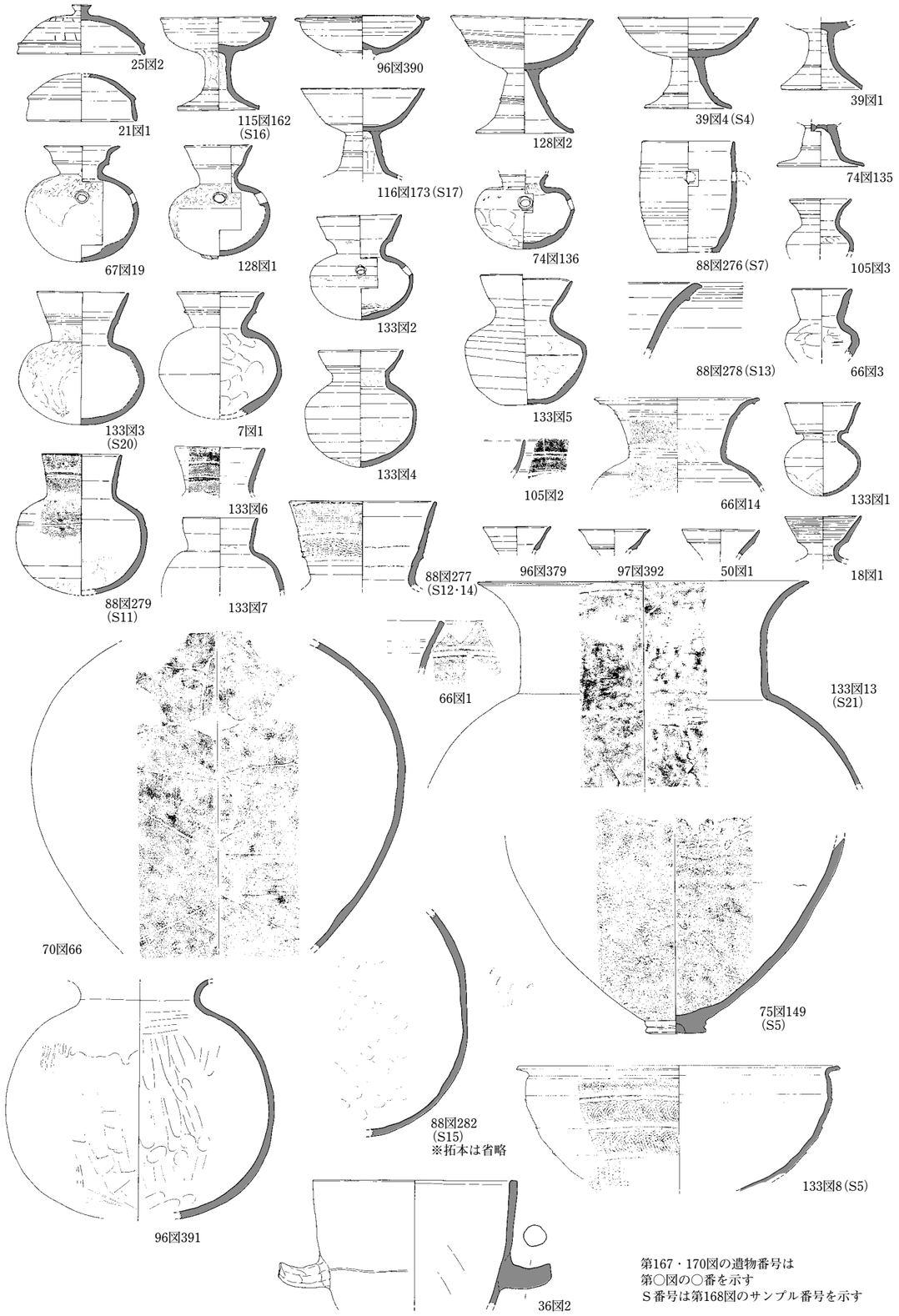
出土した初期須恵器については朝鮮半島の土器との関連性についても検討が必要であろうが、器形などから伽耶系ではないかという意見を頂いている。

次に初期須恵器の時期を検討する上で、これまでの須恵器編年や出土した土師器との検討も必要であるが、参考になる資料として１２号住居跡の放射性炭素年代測定が挙げられる。１２号住居跡は唯一検出した焼失住居跡である。炭化した木材片の分析結果からは３世紀中葉～４世紀中葉と４世紀中葉～５世紀前葉の２時期が示されている。住居跡からは複数の時期を示す遺物などは認められない。また１２号住居跡の出土土器を検討すると土師器の甑片や須恵器瓲から５世紀代と考えられる。１２号住居跡が分析結果から少なくとも５世紀前葉と考えられるのならば、その他の出土した初期須恵器もおそらくこの時期頃になるのではないかと考えられる。

居屋敷窯では熱磁気測定法により、AD440 ± 10 という値が出ている。この結果および今回の分析結果を合わせて考えても概ね近い時期を表していると思われる。

胎土分析について

今回、出土したすべての須恵器について胎土分析をしているわけではないが、胎土分析の結果か



第167図　京ヶ辻遺跡出土初期須恵器（1/ 6、1/ 8）

ら初期須恵器について述べたい。なお胎土分析の詳細ついてはＰ２０３を参照して頂きたい。

胎土分析で用いた試料は京ヶ辻遺跡出土須恵器２２点、土師器１２点と京築地域出土の須恵器２２点である。京築地域出土の須恵器は、居屋敷窯跡と京ヶ辻遺跡近郊で過去に県教育委員会が調査をした宝山桑ノ木遺跡、福富小畑Ｂ遺跡、築城五反田遺跡、少し東側へ離れた大分県との県境に近い池ノ口遺跡である。

胎土分析からはⅠ～Ⅳ類の複数の胎土があるという結果が出ている。その内訳はⅠ・Ⅳ類は居屋敷・陶邑のどちらの生産地に入らない、Ⅱ類の一部は居屋敷産、Ⅲ類が陶邑産である。（※第１６７図のサンプル試料には番号の前にＳと別頁の番号を付けている）

Ⅱ類の居屋敷産と判断されたものには、Ｓ５甕（７５図１４９）･Ｓ１５甕体部片（８８図２８２）･Ｓ１７高杯（１１６図１７３）などが挙げられる。Ｓ１５は焼成不良で軟質であり、胎土、色調などから観察しても、Ｓ３５～３７居屋敷窯出土との甕に近い。Ｓ５はＳ１５とは異なる硬質の須恵器で、底部に円盤を貼り付ける特異な甕である。新たに居屋敷産と判断された器種には、Ｓ１７高杯がある。この高杯は居屋敷窯で出土していない器種である。Ⅲ類の陶邑産と判断されたものは、Ｓ１１（８８図２７９）直口壺とＳ２１甕（１３３図１３）である。

居屋敷・陶邑のどちらにも属さないⅠ類とⅣ類についてだが、まずⅠ類と判断されたものにはＳ２０壺（１３３図３）がある。このＳ２０は穿孔していないので形状は瑤だが壺である。この壺は居屋敷窯で出土した瑤と形状、焼成、色調などから同一窯で作られた製品と判断できる。しかし居屋敷窯出土の瑤は完形品であり胎土分析を行っておらず、居屋敷窯出土の瑤との関係については不明である。

仮に居屋敷窯から出土したことから瑤を居屋敷産として判断できるのならば、Ｓ２０壺も居屋敷窯産の可能性がある。また科学的分析についての専門外だが、胎土分析の第１７１図からはⅡ類の居屋敷窯の領域に近く、部分的には重なってもいる。この２点から考えてⅠ類は居屋敷窯の可能性があると思われる。

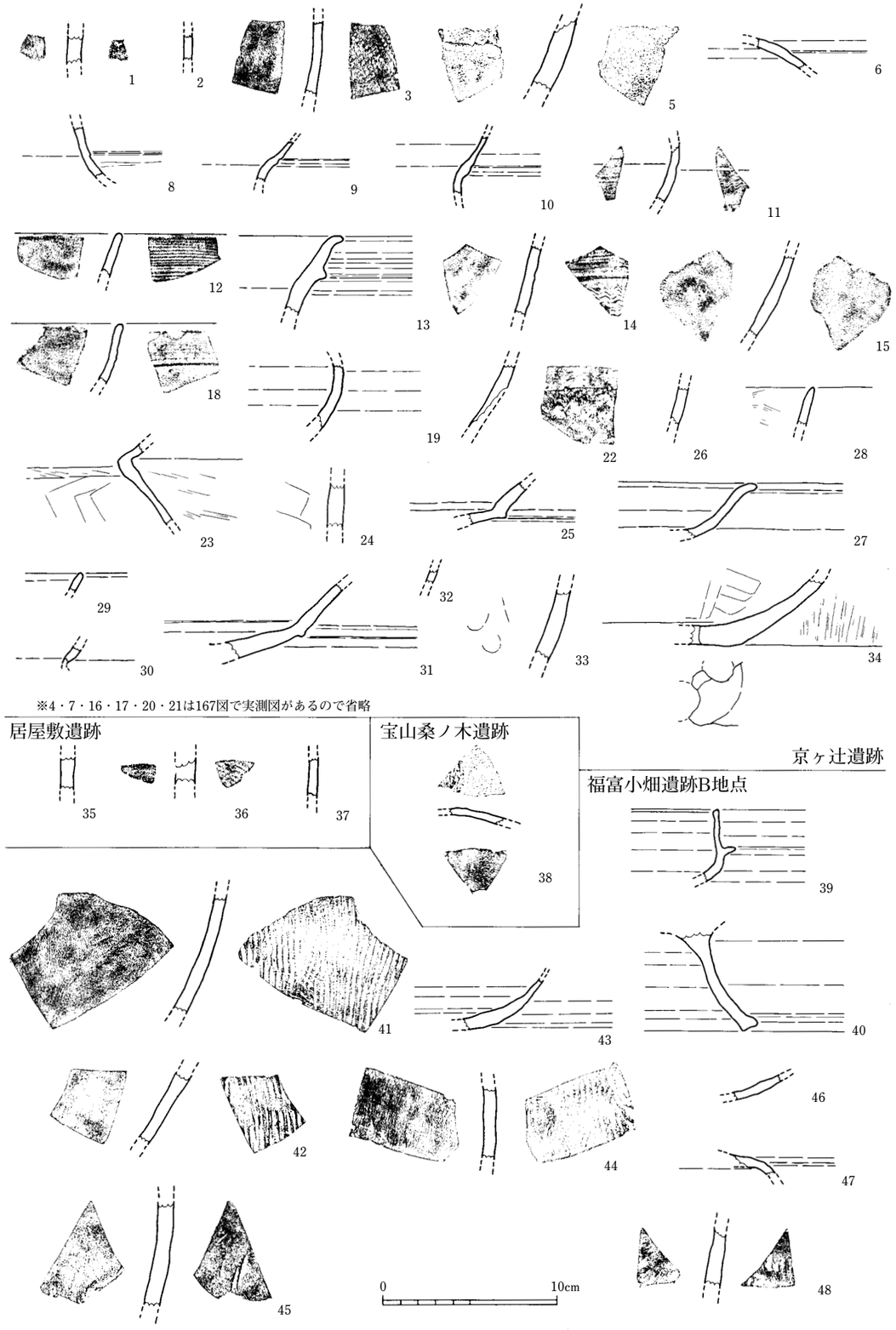
Ｓ２０を居屋敷窯と判断できるのならば、Ｓ２０以外にⅠ類と判断できたＳ７ジョッキ形土器（８８図２７６）、Ｓ９とＳ１０の瑤、Ｓ２・Ｓ３・Ｓ１２～１４壺（８８図２７７・２７８）なども居屋敷窯の可能性がある。

Ⅳ類についてはＳ４高杯（１２８図２）、Ｓ１６有蓋高杯（１１５図１６２）、Ｓ２２器台（１３３図８）である。これらについてはⅡ類とは一致しないことから、現段階では居屋敷産である可能性は低い。

従来、居屋敷窯は甕又は瑤のみ生産された特異な窯とされてきたが、今回の胎土分析の結果から高杯と居屋敷産の可能性のあるジョッキ形土器・壺など複数の器種も生産されていた可能性を示した。また、京ヶ辻遺跡は居屋敷遺跡の供給地であることを裏付ける結果となった。

次に京ヶ辻遺跡と京築地域出土須恵器との関係であるが、福富小畑Ｂ遺跡、築城五反田遺跡、池ノ口遺跡出土については陶邑産という結果であった。ただ福富小畑Ｂ遺跡のＳ４５の１点のみ居屋敷産との結果が出ている。

苅田町教育委員会による苅田町百合ヶ丘古墳群で行われた胎土分析では、百合ヶ丘古墳群・松山古墳群・稲童古墳群・下稗田遺跡・福富小畑Ａ遺跡・番塚古墳のいずれも居屋敷産とは出ず、陶邑産という結果であった。そのため今回の分析結果が、居屋敷窯で生産された須恵器は京都平野で



第168図　サンプル試料実測図1（1/ 3）

も小範囲にしか分布していないことを示す。現在まで１基の窯跡しか発見されていないことからも初期の須恵器窯が短期間で小規模にしかなく、活動範囲も狭かったことを示す結果であり、興味深い。

多孔式甑および朝鮮半島系関連遺構・遺物について

今回、初期須恵器以外にも京ヶ辻遺跡では１１点以上の土師器甑が出土している。杉井健氏の研究によれば５世紀の土師器の甑の特徴としては大きく三つ挙げられる。

①底部の蒸気孔用に複数の穿孔を施す　②把手の形態　③体部外面に残る調整痕や凹線

これらを京ヶ辻遺跡出土に当てはめると以下になる。（第１７０図を参照）

①底部の蒸気孔としての複数の穿孔は大きく２種類に分けられる。①－１類は中央に設けた孔の周りにさらに穿孔を４～７ヶ所巡らす。４～１２は穿孔の形態は円形ないし長円形状である。①－２類は円形ないし楕円形状の小孔を多数巡らす。１３と１４で見られ、１３は１８ヶ所穿孔する。杉井氏によれば①－１類では大庭寺、①－２類は陶邑で多く見られる傾向であると述べられている。

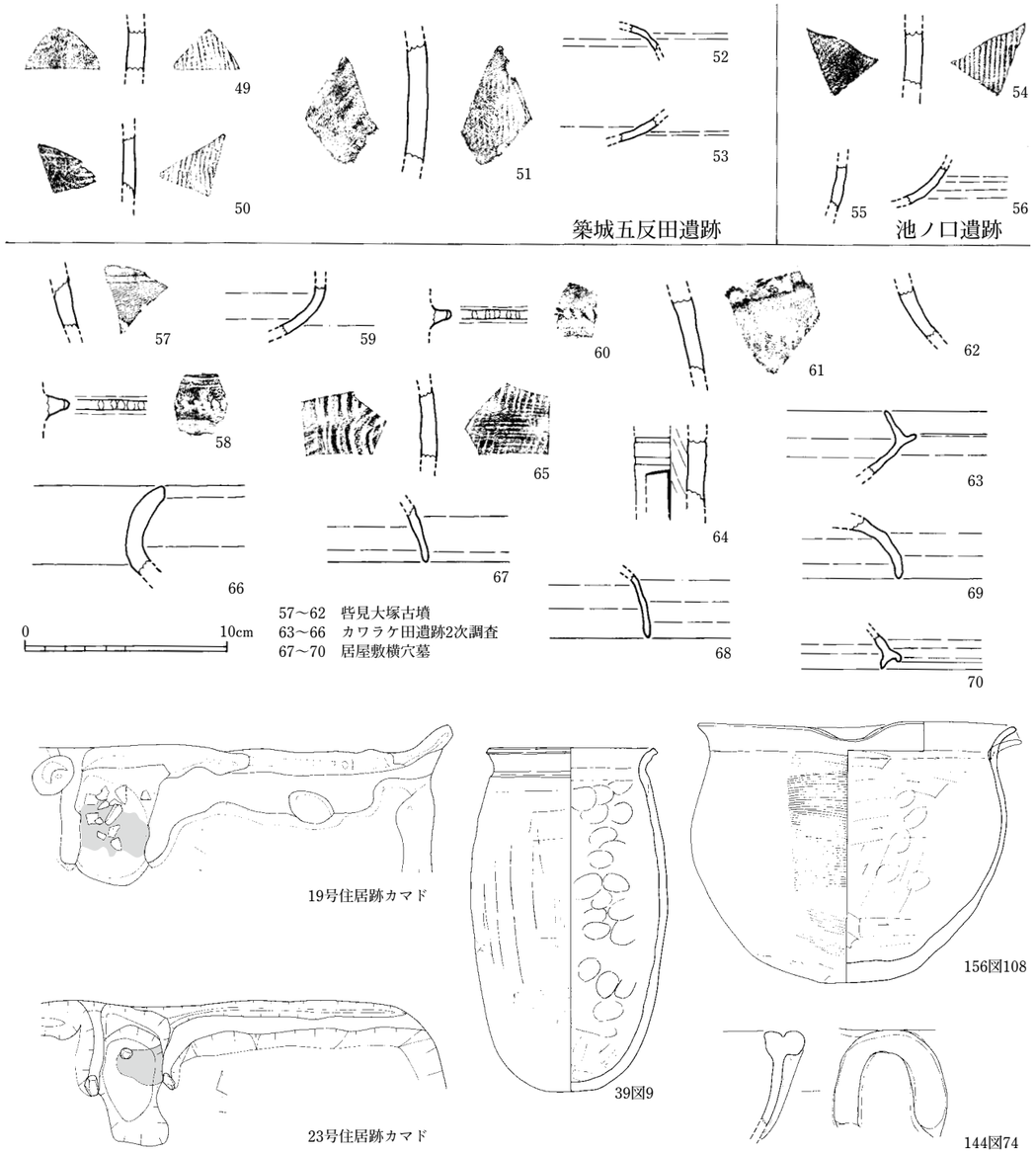
②把手の形態については、さらに２種類に分けられる。②－１類は１のみで把手部分の出土のため、器形については不明である。②－２類は把手の先端部を切り落として平坦面にしたものである。３、１３と３６図２で、他にも把手部分のみで４１図５もある。

③体部外面に残る調整痕は、基本的に内外面には刷毛目、ケズリ、ナデを施す。２のみ外面に叩きを施す。凹線は４と５の２点と２７図１１、３６図２もある。

その他の甑の特徴としては、いずれも平底が主体であり、丸底はほとんどない。器形は把手を境に内側に窄まるタイプや直立するタイプ、または口縁部で内湾するタイプなどもある。掲載した甑は多少の時期の新古関係はあると思われるが、大部分の甑が大谷・溝出土であるため時期の検討は難しい。唯一、２は叩きが残ることからやや古い特徴を示しているかもしれない。

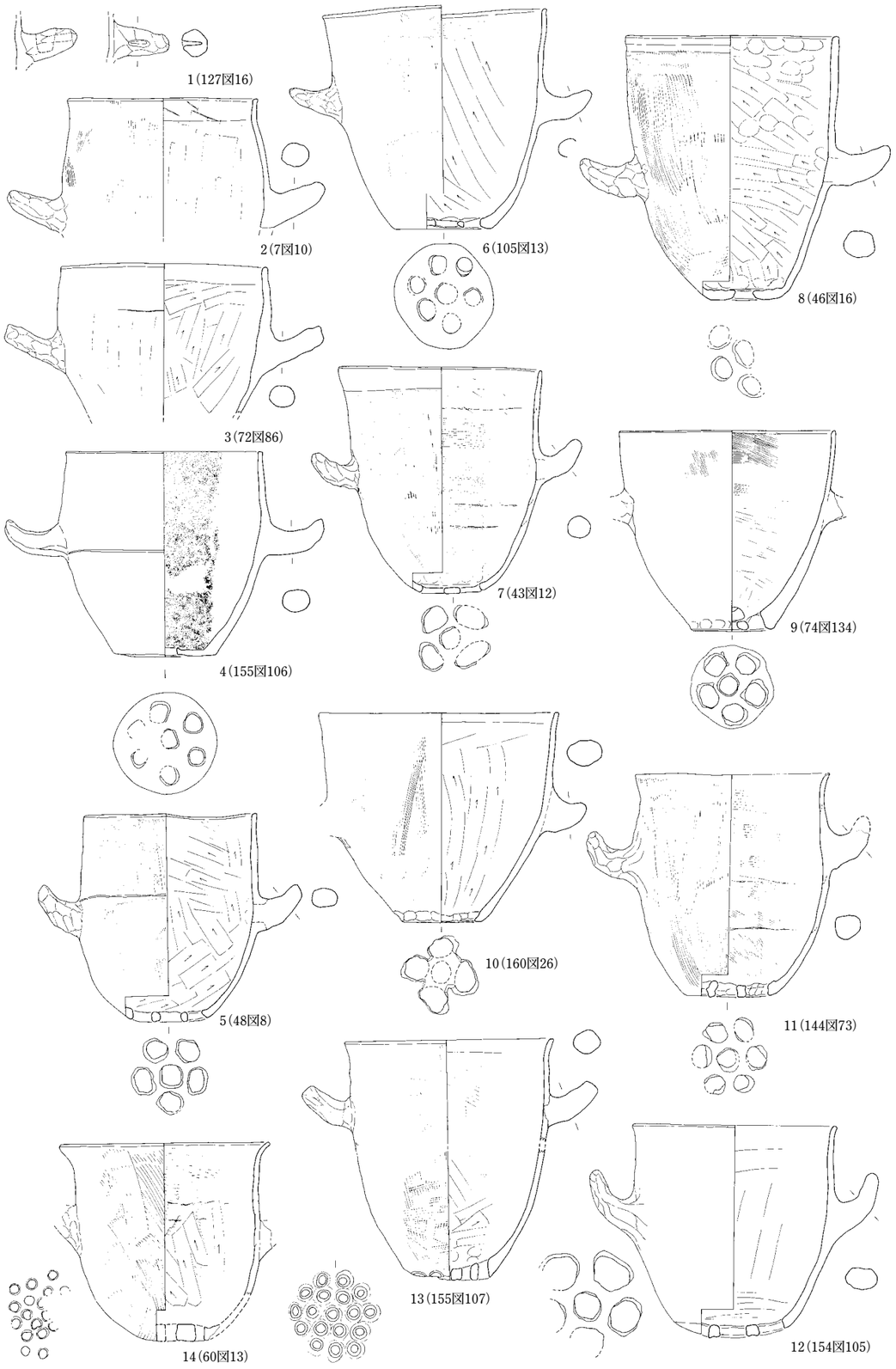
甑以外にも朝鮮半島系と係りのある遺構としてはカマド住居跡がある。その中でも特に「L」字型カマド＝オンドル住居がある。京築地域では、５世紀代に築上郡上毛町池ノ口遺跡と豊前市塔田琵琶田遺跡、６世紀にも豊前市小石原泉遺跡などでも確認されている。京都平野での「L」字型カマドの検出は京ヶ辻遺跡の１９・２３号住居跡で初めて確認されたことになる。また朝鮮半島系関連土器としては３点紹介する。１点は３８号住居跡出土した長胴甕（３９図９）と大谷では、鍋（１５８図１０８）や鍑を模倣した土器片（１４４図７４）も出土する。鍋と思われる土器は、塔田琵琶田遺跡１次（１２号土坑）、２次（１１号住居）でも出土している。鍑を模倣した土器については、鳥取県八頭郡八頭町の上野遺跡３区のSK0430で出土例がある。（※亀田修一氏ご教示による）以上、紹介した遺構・遺物は初期須恵器以外にも朝鮮半島と関係を示すものと思われ、今後注視する必要がある。

今回の報告書作成にあたっては、小田富士雄、植野浩三、亀田修一、中村浩、冨加見泰彦、白石純先生に貴重なご意見を頂きました。記して感謝申し上げます。貴重なご意見を頂きましたが、十分に活かしきれませんでしたので、さらに検討して何かで報告していきたい。（坂本）



第169図　サンプル試料実測図2（1/３）および朝鮮半島関連遺構・遺物（1/６０、1/６）

【参考文献】各担当者の参考文献はここでまとめている。
小田富士雄 1991 「須恵器文化の形成と日韓交渉・総説編」『古文化談叢』24 集　九州古文化研究会
穂積裕昌 1992 『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 99-3　三重県埋蔵文化財センター
冨加見泰彦 1993 「陶質土器と初期須恵器の系譜」『季刊考古学』雄山閣
穂積裕昌 1994 「古墳時代の湧水点祭祀について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅥ（森浩一編）
杉井　健 1994 「甑形土器の基礎的研究」『待兼山論叢』第２８号　大阪大学文学部
伊藤　昌広 2001 『柳井田早崎遺跡・柳井田藤ヶ塚畑遺跡』行橋市文化財調査報告書 第 29 集
亀田修一 2003 「渡来人の考古学」『七隈史学』第４号　七隈史学会
穂積裕昌 2004 「水に関わる祭儀―井泉と導水施設―」『考古資料大観 10』（寺沢薫編）小学館
坂梨祐子 2011 『塔田琵琶田遺跡』豊前市文化財調査報告書第 29 集　豊前市教育委員会
東貴之ほか 2011 『上野遺跡Ⅰ　奈免羅・西の前遺跡Ⅲ』八頭町教育委員会 安西工業株式会社
穂積裕昌 2012 『古墳時代の喪葬と祭祀』雄山閣出版
大阪府立近つ飛鳥博物館 2012 『王と首長の神まつり―古墳時代の祭祀と信仰―』大阪府立近つ飛鳥博物館平成年度春季特別展
大西智和・三辻利一 2013 「第３節」『百合ヶ丘古墳群』苅田町文化財調査報告書第 45 集　苅田町教育委員会
小澤佳憲 2015 『塔田琵琶田遺跡』東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－２２－



第170図　京ヶ辻遺跡出土多孔式甑（1/６）

１１　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器の胎土分析

岡山理科大学　白石　純

１．はじめに

京ヶ辻遺跡ほかより出土した須恵器の自然科学的手法による胎土分析を実施した。分析目的は以下の事柄である。

⑴京ヶ辻遺跡出土の初期須恵器がどの遺跡（窯跡を含む）の須恵器胎土と類似しているか。

⑵京ヶ辻遺跡出土初期須恵器と土師器の胎土比較。

⑶宝山桑の木・福富小畑Ｂ・築城五反田・池ノ口の各遺跡出土須恵器と居屋敷および陶邑などの窯跡との比較

⑷呰見大塚古墳出土の装飾付須恵器の産地推定。

２．分析方法と試料

分析は蛍光Ｘ線分析法で行い、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から胎土の差異について調べた。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zr の 13 成分である。

なお測定装置・条件・試料は以下の通りである。

測定装置：SEA5120A（ｴｽｱｲｱｲ・ﾅﾉﾃｸﾉﾛｼﾞｰ社製）を使用した。

測定条件：Ｘ線照射径 2.5mm、電流 50 ～ 200mA、電圧 50kV/15kV、測定時間 300 秒、測定室は真空の条件で測定した。

測定元素：13 成分の定量値は地質調査所の標準試料 JA-1（安山岩）、JG-1a（花崗岩）、JR-1（流紋岩）、JB-1a（玄武岩）、JF-1（長石）の５個の試料を用いて検量線を作成し、定量値を算出した。

測定試料：分析試料は、須恵器表面の汚れを除去後（研磨機）、乾燥した試料を乳鉢（タングステンカーバイト製）で粉末（100 ～ 200 ﾒｯｼｭ）にしたものを加圧成形機で約 15ﾄﾝの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。分析試料および結果は第１表に示している。

分析結果の比較（差異）は、有意な差がみられる成分を横軸と縦軸にとり、散布図を描き、各遺跡（窯跡）の差異を検討した。

３．分析結果について

測定した 13 成分のうち、分析試料に顕著な差がみられたのは、Ca、K、Ti の３成分であった。したがって、Ca、K、Ti の成分で散布図を作成し、胎土の違いを検討した。

⑴　京ヶ辻遺跡出土の初期須恵器がどの遺跡（窯跡を含む）の須恵器胎土と類似しているかでは、第１･２･３図より京ヶ辻の初期須恵器が大きく４つの胎土に分類できる。第１図ではＫ量の違いで、試料番号2･3･7･9･10･12･13･14･20（Ⅰ類）と5･6･15･17･18･19（Ⅱ類）と11･21（Ⅲ類）と4･16･22（Ⅳ類）に分類が可能である。なお１と８はそれぞれ単独で分布している。第３図ではⅠとⅡ類が一つになり、Ⅲ類、Ⅳ類の３つに分類できる。なお、試料番号１はⅠ類・Ⅱ類に、８は単独で分布している。第２図では、第１図と同じでⅠからⅣ類に分類できる。なお１は単独で、８はⅡ類に入っている。

次に第４～６図は京ヶ辻の須恵器、窯跡出土の居屋敷、陶邑と比較したものである。この散布図よⅡ類（5･6･15･17･18･19）の一部は居屋敷に、Ⅲ類（11･21）は陶邑の分布領域に分布した。その他のものはどの窯とも一致しなかった。

⑵　京ヶ辻遺跡出土初期須恵器と土師器の胎土比較では、第7･8図より須恵器と土師器は胎土が異なっていた。それはCa量が多いところに土師器が、また少ないところに須恵器が分布している。そして土師器は31･32･34と23･24･25･26･27･28･29･30･33の２つの胎土に分類が可能であった。また、１の須恵器は、土師器の胎土と類似していた。

⑶　宝山桑の木・福富小畑Ｂ・築城五反田・池ノ口の各遺跡出土須恵器と居屋敷および陶邑などの窯跡との比較では、第9・10図より福富小畑Ｂの45・47と池ノ口の56以外は、すべて陶邑の分布領域と一致した。なお福富小畑Ｂの45は第10図で居屋敷と胎土がほぼ一致している。

⑷　呰見大塚古墳出土装飾付須恵器と他地域の比較では、第11・12図ように呰見大塚とカワラケ田と居屋敷の須恵器が一部の須恵器を除いてほぼ一つにまとまり類似していた。なお、このまとまりから外れたものは、カワラケ田の66（土師器）と居屋敷の68・70の３点である。

４．まとめ

以上の分析結果より推定されることをまとめると

⑴　京ヶ辻出土の初期須恵器が、どの生産地と類似しているかでは、まず京ヶ辻の須恵器が大きく４つに分類（Ⅰ～Ⅳ類）でき、明らかに複数の胎土（生産地？）があることが推定された。そして、窯跡の比較では、Ⅱ類の一部が居屋敷に、Ⅲ類の２点が陶邑に推定された。なお、居屋敷の試料点数が少なく、窯試料の分布領域がどれくらい広がるのか分析試料を増やし再検討する必要がある。また、Ⅰ類とⅣ類の須恵器に関しては、今回比較した窯跡とは異なっていた。

⑵　京ヶ辻出土の初期須恵器と土師器の比較では、須恵器と土師器で明確に胎土が異なっていた。また初期須恵器で１点のみ土師器の胎土に類似しているもの（試料番号１の甕体部）があった。また土師器も２つに胎土に分類できそうである。

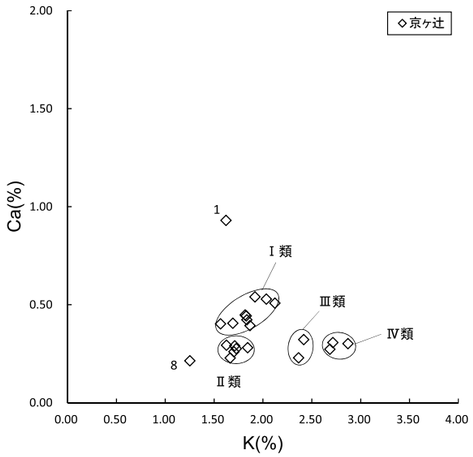
⑶　宝山桑の木・福富小畑Ｂ・築城五反田・池ノ口の各遺跡出土須恵器と窯跡の比較では、ほとんどの須恵器が陶邑の領域に入った。また福富小畑Ｂの45(甕体部)は居屋敷の胎土に類似していた。

⑷　呰見大塚古墳出土装飾付須恵器と他地域の比較では、呰見大塚の須恵器胎土は一つにまとまり、カワラケ田とも胎土がほぼ一致した。したがって今回の分析では、呰見大塚の装飾付須恵器と高杯は同じ胎土であることが推定され、カワラケ田とも胎土がほぼ同じであることが推定された。なお、同じ時期の比較する窯試料がなくどこで生産されたか推定することはできなかった。

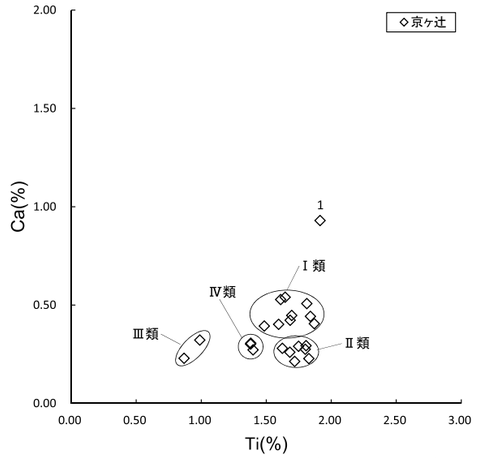
この胎土分析を実施するにあたり、坂本氏にはいろいろお世話になりました。記して感謝いたします。

表３　京ヶ辻遺跡ほか出土遺物の胎土分析一覧

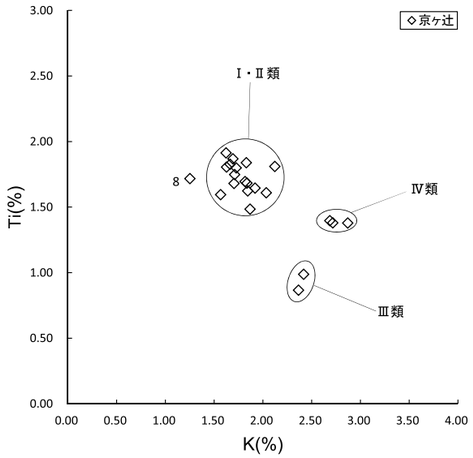
番号	遺跡名	遺構名	種類	器種	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	時期
1	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１９号住居	須恵器	甕　体部片	73.18	1.91	16.53	4.98	0.00	0.43	0.93	0.24	1.62	0.06	0.001	0.021	0.035	５世紀前～中頃
2	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	２３号住居	須恵器	壺　体部片	64.57	1.48	20.56	10.16	0.04	0.80	0.39	0.00	1.87	0.05	0.003	0.007	0.037	５世紀前～中頃
3	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	２７号住居	須恵器	甕　体部片	74.11	1.84	15.99	4.48	0.00	0.66	0.44	0.48	1.83	0.05	0.004	0.008	0.044	５世紀前～中頃
4	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３８号住居	須恵器	高杯　口縁部片	71.13	1.38	19.42	4.29	0.00	0.58	0.31	0.01	2.72	0.04	0.003	0.007	0.032	５世紀前～中頃
5	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	２８号土坑	須恵器	甕　体部片	69.27	1.68	16.14	10.41	0.07	0.28	0.26	0.00	1.70	0.03	0.002	0.002	0.042	５世紀前～中頃
6	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	杯　底部片	74.65	1.62	15.35	5.53	0.02	0.30	0.28	0.26	1.84	0.03	0.002	0.006	0.043	５世紀前～中頃
7	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	ジョッキ形土器	73.70	1.60	16.31	6.06	0.01	0.22	0.40	0.00	1.57	0.03	0.002	0.005	0.043	５世紀前～中頃
8	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	高杯　脚部片	60.90	1.72	20.29	14.98	0.05	0.48	0.21	0.00	1.25	0.03	0.002	0.002	0.045	５世紀前～中頃
9	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	鼎　頸部片	73.82	1.65	16.32	5.30	0.00	0.31	0.54	0.02	1.92	0.03	0.004	0.012	0.038	５世紀前～中頃
10	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	鼎　頸部片	73.11	1.61	16.48	5.80	0.02	0.25	0.53	0.01	2.03	0.03	0.004	0.011	0.046	５世紀前～中頃
11	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	鼎　体部片	72.88	0.87	15.90	6.34	0.00	0.52	0.23	0.72	2.36	0.03	0.004	0.005	0.029	５世紀前～中頃
12	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝(廃土中)	須恵器	壺　口縁部片	73.89	1.68	15.98	5.60	0.00	0.43	0.42	0.00	1.83	0.05	0.004	0.005	0.045	５世紀前～中頃
13	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	壺　口縁部片	68.99	1.87	17.98	8.55	0.04	0.33	0.41	0.00	1.69	0.03	0.003	0.007	0.043	５世紀前～中頃
14	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	壺　頸部片	74.15	1.70	15.80	5.59	0.02	0.31	0.45	0.00	1.82	0.04	0.004	0.009	0.044	５世紀前～中頃
15	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１３号溝	須恵器	甕　体部片	64.60	1.83	18.86	12.03	0.04	0.59	0.23	0.00	1.66	0.04	0.003	0.006	0.041	５世紀前～中頃
16	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	須恵器	高杯　口縁部片	70.04	1.38	19.23	4.33	0.02	1.67	0.30	0.00	2.87	0.06	0.005	0.009	0.033	５世紀前～中頃
17	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	須恵器	高杯　体部片	70.85	1.80	17.18	7.24	0.03	0.75	0.28	0.00	1.73	0.05	0.003	0.006	0.038	５世紀前～中頃
18	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	須恵器	鼎　口縁部片	69.06	1.75	17.98	8.13	0.01	0.93	0.29	0.00	1.71	0.06	0.003	0.003	0.042	５世紀前～中頃
19	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	須恵器	壺　体部片	68.28	1.81	18.33	8.75	0.01	0.73	0.29	0.00	1.63	0.06	0.005	0.004	0.046	５世紀前～中頃
20	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	須恵器	鼎　頸部片	74.53	1.81	15.83	4.55	0.01	0.27	0.51	0.23	2.12	0.04	0.002	0.008	0.045	５世紀前～中頃
21	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	須恵器	大甕　口縁部片	74.66	0.99	15.28	5.45	0.01	0.33	0.32	0.39	2.42	0.03	0.007	0.006	0.026	５世紀前～中頃
22	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	須恵器	器台　体部片	70.27	1.40	19.65	4.45	0.01	1.00	0.27	0.00	2.69	0.04	0.005	0.003	0.033	５世紀前～中頃
23	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	１２号住居	土師器	甕　頸部片	75.37	1.68	16.34	3.33	0.07	0.20	0.77	0.24	1.74	0.16	0.001	0.007	0.037	５世紀前～中頃
24	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３８号住居	土師器	甕　体部片	61.92	1.40	22.60	10.93	0.14	0.53	0.66	0.00	1.68	0.04	0.004	0.005	0.038	５世紀前～中頃
25	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３９号住居	土師器	高杯　体部片	66.44	1.54	20.97	6.93	0.07	0.91	0.64	0.29	2.05	0.06	0.004	0.007	0.036	５世紀前～中頃
26	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	４２号住居	土師器	甑　体部片	73.89	1.71	15.30	5.91	0.02	0.21	0.87	0.19	1.73	0.03	0.002	0.013	0.028	５世紀前～中頃
27	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	４３号住居	土師器	高杯　口縁部片	66.02	1.38	20.53	9.14	0.15	0.11	0.86	0.00	1.66	0.04	0.003	0.011	0.029	５世紀前～中頃
28	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	４４号住居	土師器	小型丸底壺　口縁部片	68.04	1.49	19.72	7.54	0.01	0.20	0.65	0.01	1.99	0.25	0.004	0.004	0.038	５世紀前～中頃
29	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	土師器	小型丸底壺　口縁部片	72.43	1.56	18.60	3.94	0.06	0.11	0.69	0.02	2.14	0.29	0.002	0.011	0.032	５世紀前～中頃
30	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	３６号溝	土師器	小型丸底壺　頸部片	70.60	1.51	18.45	6.48	0.03	0.14	0.76	0.00	1.91	0.03	0.002	0.007	0.038	５世紀前～中頃
31	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	土師器	高杯　体部片	71.56	1.51	16.64	5.10	0.00	0.38	1.25	0.98	2.35	0.07	0.002	0.030	0.028	５世紀前～中頃
32	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	土師器	小型丸底壺　体部片	73.82	1.47	15.36	4.18	0.00	0.15	1.46	1.00	2.19	0.21	0.003	0.033	0.032	５世紀前～中頃
33	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	土師器	甑　体部片	74.81	1.59	17.02	3.50	0.04	0.09	0.77	0.01	1.88	0.14	0.002	0.009	0.041	５世紀前～中頃
34	京ヶ辻遺跡Ⅱ区	大谷	土師器	甑　底部片	66.32	1.46	21.05	6.60	0.03	0.47	1.05	0.24	2.30	0.34	0.003	0.015	0.035	５世紀前～中頃
35	居屋敷遺跡	床	須恵器	甕　体部片	76.10	1.75	15.20	4.36	0.00	0.30	0.19	0.00	1.94	0.05	0.005	0.005	0.040	５世紀前～中頃
36	居屋敷遺跡	床	須恵器	甕　体部片	71.53	2.12	18.71	4.94	0.00	0.25	0.30	0.02	1.94	0.04	0.002	0.010	0.048	５世紀前～中頃
37	居屋敷遺跡	床	須恵器	甕　体部片	72.44	2.09	17.82	5.13	0.00	0.32	0.23	0.00	1.76	0.05	0.003	0.006	0.050	５世紀前～中頃
38	宝山桑の木遺跡Ⅲ区	Ｐ２６５	須恵器	樽形瓶　体部片	75.73	1.00	15.11	5.89	0.00	0.26	0.06	0.00	1.82	0.05	0.004	0.001	0.033	５世紀前～中頃
39	福富小畑Ｂ遺跡	５号住居	須恵器	杯　口縁～受け部	70.25	1.12	18.12	8.11	0.00	0.57	0.05	0.00	1.60	0.05	0.004	0.002	0.036	５世紀中～後半頃
40	福富小畑Ｂ遺跡	５号住居	須恵器	高杯　脚部	72.97	0.87	16.24	6.58	0.00	0.55	0.08	0.02	2.55	0.06	0.007	0.005	0.027	５世紀中～後半頃
41	福富小畑Ｂ遺跡	５号住居	須恵器	甕　体部片	72.20	0.95	16.23	5.17	0.00	1.31	0.41	1.10	2.44	0.06	0.005	0.009	0.027	５世紀中～後半頃
42	福富小畑Ｂ遺跡	５号住居	須恵器	甕　体部片	72.25	0.92	16.32	5.12	0.02	1.15	0.49	1.01	2.52	0.06	0.003	0.009	0.023	５世紀中～後半頃
43	福富小畑Ｂ遺跡	８号住居	須恵器	杯　底部片	71.96	0.97	17.08	7.00	0.00	0.24	0.22	0.00	2.38	0.05	0.002	0.008	0.038	５世紀中～後半頃
44	福富小畑Ｂ遺跡	８号住居	須恵器	甕　体部片	72.24	0.93	16.26	5.04	0.03	0.93	0.44	1.47	2.50	0.04	0.005	0.011	0.028	５世紀中～後半頃
45	福富小畑Ｂ遺跡	８号住居	須恵器	甕　体部片	75.04	1.77	15.71	4.55	0.02	0.23	0.44	0.28	1.79	0.04	0.003	0.010	0.042	５世紀中～後半頃
46	福富小畑Ｂ遺跡	１７号住居	須恵器	杯　体部片	73.86	1.16	16.55	5.73	0.00	0.33	0.12	0.22	1.89	0.05	0.004	0.002	0.035	５世紀中～後半頃
47	福富小畑Ｂ遺跡	１７号住居	須恵器	杯蓋　底部片	72.16	1.12	17.58	4.22	0.00	0.81	0.30	0.40	3.19	0.05	0.007	0.005	0.030	５世紀中～後半頃
48	福富小畑Ｂ遺跡	１７号住居	須恵器	甕　体部片	72.52	0.92	16.33	5.18	0.02	0.67	0.44	1.24	2.51	0.04	0.004	0.014	0.026	５世紀中～後半頃
49	築城五反田遺跡	２号住居	須恵器	甕　体部片	72.47	0.99	18.28	5.51	0.00	0.25	0.10	0.00	2.26	0.04	0.006	0.003	0.045	６世紀前半頃
50	築城五反田遺跡	２号住居	須恵器	甕　体部片	72.81	1.02	18.09	5.26	0.01	0.27	0.11	0.00	2.29	0.04	0.004	0.003	0.043	６世紀前半頃
51	築城五反田遺跡	２号住居	須恵器	甕　体部片	70.98	0.97	18.83	6.44	0.04	0.35	0.09	0.00	2.14	0.05	0.002	0.003	0.042	６世紀前半頃
52	築城五反田遺跡	３号住居	須恵器	杯蓋　体部片	69.46	1.12	18.58	8.39	0.02	0.67	0.03	0.00	1.63	0.04	0.005	0.002	0.027	６世紀前半頃
53	築城五反田遺跡	３号住居	須恵器	杯　底部片	74.92	1.01	14.86	6.55	0.01	0.20	0.22	0.30	1.80	0.04	0.003	0.003	0.043	６世紀前半頃
54	池ノ口遺跡	９号住居	須恵器	甕　体部片	75.02	0.96	15.73	5.46	0.00	0.27	0.22	0.00	2.20	0.04	0.004	0.007	0.037	５世紀中頃
55	池ノ口遺跡	２６号住居	須恵器	壺　体部片	72.30	0.99	16.69	6.06	0.00	1.06	0.21	0.41	2.15	0.05	0.005	0.005	0.028	５世紀中頃
56	池ノ口遺跡	３０号住居　ピット２	須恵器	杯　底部片	69.90	1.43	19.96	6.26	0.06	0.56	0.54	0.00	1.15	0.05	0.001	0.011	0.036	５世紀中頃
57	呰見大塚古墳	北側周溝	須恵器	装飾付須恵器　脚部片	70.67	1.65	18.17	6.77	0.02	0.71	0.21	0.01	1.65	0.04	0.002	0.004	0.039	６世紀後半
58	呰見大塚古墳	南東周溝	須恵器	装飾付須恵器　脚部片	73.86	1.88	16.19	5.76	0.01	0.54	0.21	0.00	1.41	0.04	0.003	0.004	0.053	６世紀後半
59	呰見大塚古墳	墳丘	須恵器	装飾付須恵器　子壺片	76.04	1.74	14.59	5.09	0.00	0.22	0.29	0.01	1.89	0.03	0.002	0.007	0.044	６世紀後半
60	呰見大塚古墳	墳丘	須恵器	装飾付須恵器　脚部片	72.88	1.68	17.51	5.02	0.00	0.53	0.34	0.00	1.89	0.04	0.004	0.005	0.038	６世紀後半
61	呰見大塚古墳	墓道	須恵器	装飾付須恵器　脚部片	72.18	1.68	18.04	5.13	0.00	0.57	0.37	0.00	1.86	0.04	0.003	0.006	0.050	６世紀後半
62	呰見大塚古墳	墳丘	須恵器	高杯片	77.14	1.71	13.50	4.97	0.00	0.25	0.37	0.17	1.74	0.03	0.004	0.010	0.044	６世紀後半
63	カワラケ田遺跡２次調査	１号住居	須恵器	杯　口縁～受け部	67.10	1.57	21.10	7.48	0.00	0.87	0.28	0.13	1.32	0.03	0.002	0.005	0.036	６世紀末
64	カワラケ田遺跡２次調査	１号住居	須恵器	高杯　脚部片	74.15	1.79	16.59	5.00	0.01	0.30	0.27	0.01	1.72	0.03	0.004	0.010	0.051	６世紀末
65	カワラケ田遺跡２次調査	１号住居	須恵器	甕　体部片	68.46	1.45	18.93	8.19	0.01	0.40	0.45	0.00	1.95	0.02	0.006	0.006	0.033	６世紀末
66	カワラケ田遺跡２次調査	１号住居	土師器	甕　口縁～頸	66.52	1.41	21.02	5.81	0.01	0.31	1.42	0.56	2.56	0.25	0.005	0.013	0.036	６世紀末
67	居屋敷遺跡	５号横穴墓　墓道	須恵器	杯蓋　口縁部片	75.78	1.97	14.52	5.87	0.01	0.19	0.27	0.00	1.25	0.04	0.001	0.003	0.046	７世紀前半
68	居屋敷遺跡	５号横穴墓　墓道	須恵器	杯蓋　口縁部片	75.48	0.91	15.52	5.33	0.00	0.16	0.14	0.01	2.33	0.05	0.004	0.005	0.028	７世紀前半
69	居屋敷遺跡	６号横穴墓　墓道	須恵器	杯蓋　口縁部片	73.81	1.91	16.30	6.07	0.00	0.38	0.24	0.00	1.14	0.04	0.001	0.004	0.052	７世紀中頃
70	居屋敷遺跡	６号横穴墓　墓道	須恵器	杯蓋　口縁部片	71.87	1.68	17.27	5.50	0.00	0.47	0.70	0.62	1.73	0.04	0.002	0.020	0.038	７世紀中頃



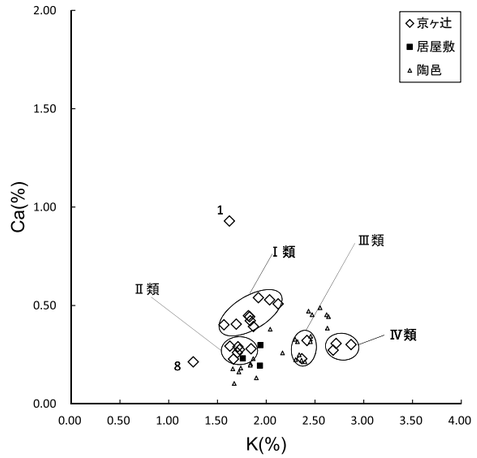
第1図　京ヶ辻出土須恵器の比較(K-Ca散布図)



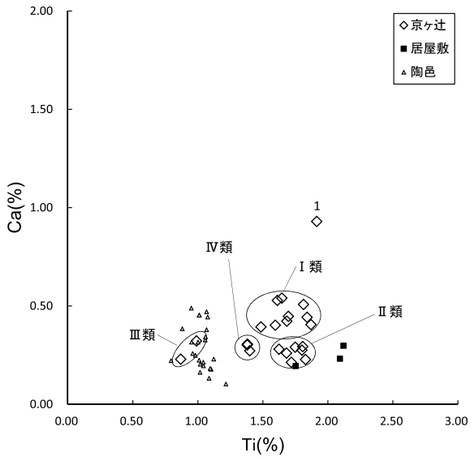
第2図　京ヶ辻出土須恵器の比較(Ti-Ca散布図)



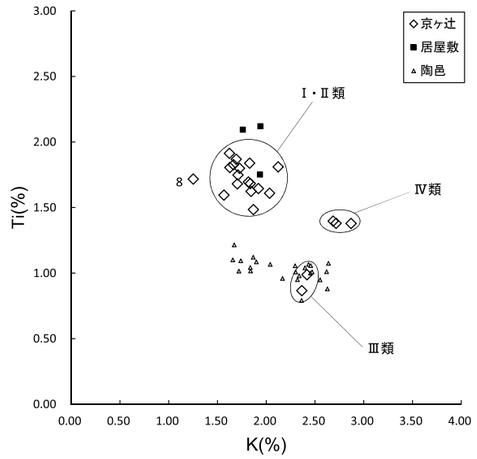
第3図　京ヶ辻出土須恵器の比較(K-Ti散布図)



第4図　京ヶ辻出土須恵器と窯の比較(K-Ca散布図)

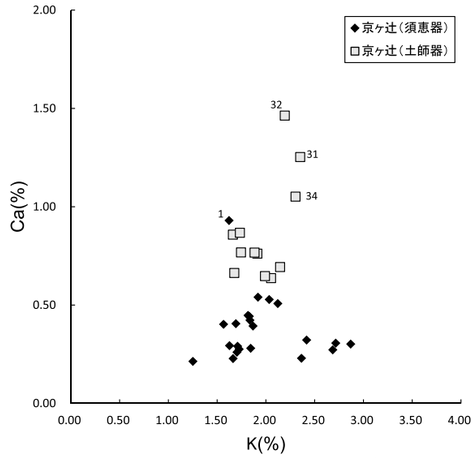


第5図　京ヶ辻出土須恵器と窯の比較(Ti-Ca散布図)

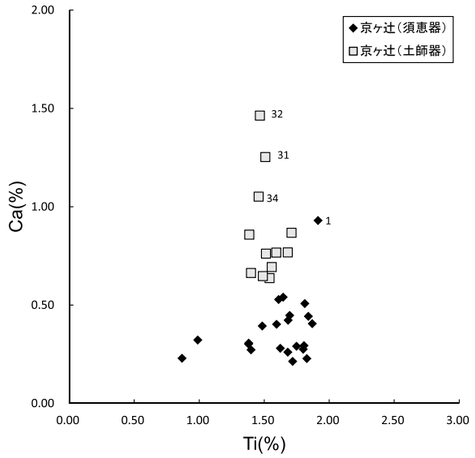


第6図　京ヶ辻出土須恵器と窯の比較(K-Ti散布図)

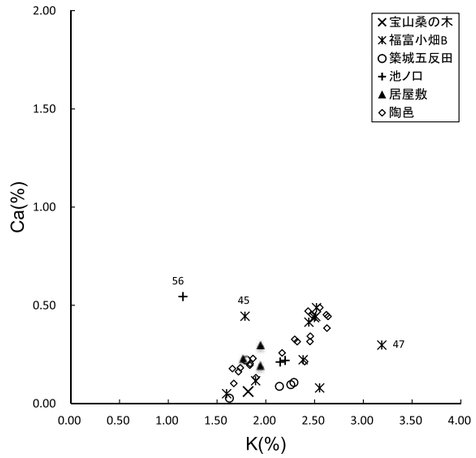
第171図　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器の胎土分析1



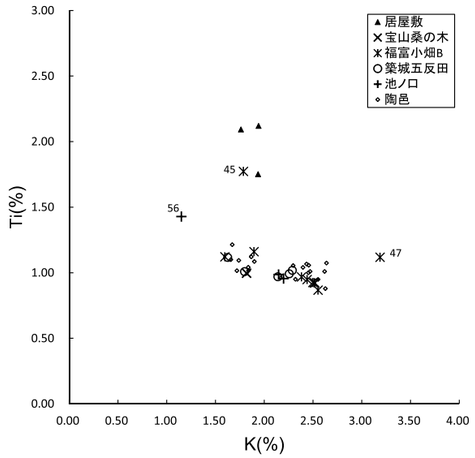
第7図　京ヶ辻の須恵器と土師器の比較(K-Ca散布図)



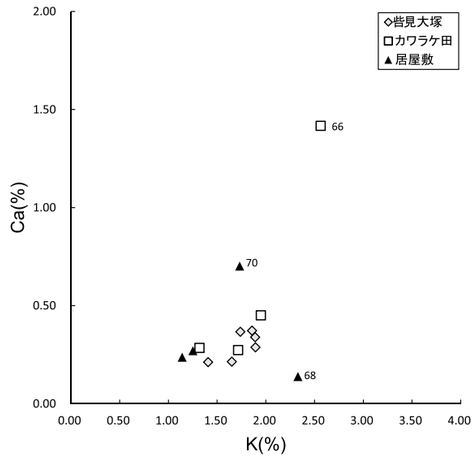
第8図　京ヶ辻の須恵器と土師器の比較(Ti-Ca散布図)



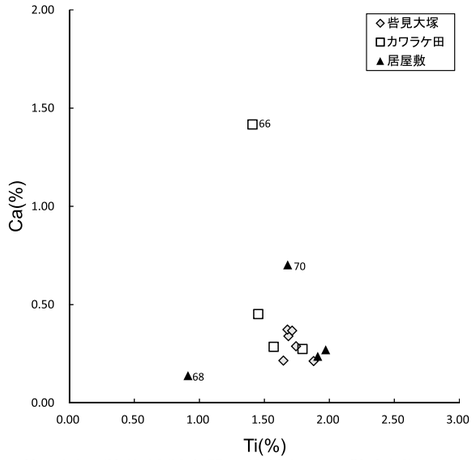
第9図　各遺跡出土須恵器の産地推定(K-Ca散布図)



第10図　各遺跡出土須恵器の産地推定(K-Ca散布図)



第11図　装飾付須恵器の比較(K-Ca散布図)



第12図　装飾付須恵器の比較(Ti-Ca散布図)

第172図　京ヶ辻遺跡ほか出土須恵器の胎土分析2

１２　京ヶ辻遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　はじめに

京ヶ辻遺跡（福岡県みやこ町有久に所在）は、祓川左岸の沖積地に位置し、古墳時代前期～中期の遺構が検出されたほか、初期須恵器が多数出土している。今回の分析調査では、12 号住居跡の構築年代に関する情報を得るために、出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施する。

２　試料

試料は、12 号住居跡から出土した炭化材 3 点（№2，3，23）である。

№2 は、土壌塊に板目板状に薄く張り付いた状態で、樹皮は認められない。このほかに、微細な炭化材片が認められるが、いずれも板目板状の炭化材と組織の特徴が一致することから、同炭化材から剥離したものと考えられる。残存する中での最外年輪を含む 4 ～ 5 年分を採取した。

№3 は、残存半径 3cmのミカン割状を呈する炭化材で、樹皮は認められない。側面（柾目面）には別材が直交するように付着しているが、薄い小片であることから、ミカン割状の炭化材を対象とする。残存する中での最外部を含む 2 ～ 3 年分を採取した。

№23 は、土壌塊に半分埋まった状態の炭化材で、残存半径約 2cmのミカン割状を呈し、樹皮は認められない。土壌塊表面には、この他に別材の可能性がある炭化材が付着するが、薄く、保存状態が悪いため、ミカン割状の炭化材を対象とする。炭化材の残存する中での最外部を含む 5 ～ 8 年分を採取した。

３　分析方法

炭化材に土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後 HCl による炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOH による腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。試料をバイコール管に入れ、1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し、真空ラインにて CO2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に 13C/12C の測定も行うため、この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0（Copyright 1986-2013 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来 10 年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1 年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 σ、2 σ（σ は統計的に真の値が 68%、2 σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲）双方の値を示す。また、表中の相対比とは、σ、2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

４　結果

放射性炭素年代測定結果および暦年較正結果を表４、第１７３図に示す。同位体効果の補正を行った測定結果（補正年代）は、№2 が 1,670 ± 20BP、№3 が 1,750 ± 20BP、№23 が 1,670 ± 20BP を示す。また、測定誤差を 2 σ で計算した暦年較正結果（確率 1 位）は、№2 が cal AD 332-419、№3 が cal AD 229-349、№23 が cal AD 334-422 である。

なお、測定に用いた炭化材は、一部を分割して樹種同定を実施した。その結果、№2 は、保存が悪く、種類不明の広葉樹、№3 は常緑広葉樹のスダジイ、№23 は常緑広葉樹のアカガシ亜属に同定された。スダジイとアカガシ亜属の解剖学的特徴等を以下に記す。

・アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科コナラ属

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 15 細胞高のものと複合放射組織とがある。

・スダジイ（Castanopsis cuspidata var. sieboldii（Makino）Nakai）　ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に 1 ～ 2 個幅で放射方向に配列する。孔圏部は 3 ～ 4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1 ～ 20 細胞高。

５　考察

12 号住居跡から出土した炭化材 3 点の補正年代値は、№2 の広葉樹と№23 のアカガシ亜属が 1,670 ± 20BP と一致する値を示したが、№3 のスダジイは、それよりもやや古く、1,750 ± 20BP を示した。暦年較正結果では、№2・No.23 の 2 点が 4 世紀中葉～ 5 世紀前葉、№3 は 3 世紀中葉頃～ 4 世紀中葉を示しており、約 100 年程度の年代差が生じている。

このような同一住居跡から出土した炭化材の年代値の差異については、１）残存部位が伐採・利用年を示す最外年輪部分ではなく、より古い時期の年輪について年代測定を実施している可能性、２）測定した炭化材が古材や転用材などに由来する可能性、などが原因として考えられる。この点については炭化材の出土状況などを踏まえた評価が必要であるが、得られた年代値のうち、新しい方の年代値である 4 世紀中葉～ 5 世紀前葉が住居の構築年代に近い年代を示しているものと思われる。なお、No.3 の年代値は、那珂君休遺跡や比恵遺跡の布留Ⅰ式土器付着物の年代測定値（西本,2006）

に近似している。

炭化材の樹種は、№3が常緑広葉樹のスダジイ、№23が常緑広葉樹のアカガシ亜属であったが、これらは暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要な構成種である。ただし、スダジイは萌芽再生能力が高く、アカガシ亜属のアラカシなども同様の性質を有しており、常緑広葉樹の二次林にも普通な種類である。一方、木材の材質は、スダジイ・アカガシ亜属ともに比較的重硬で強度が高い材質を有している。今回の炭化材が住居構築材に由来するとすれば、強度の高い木材が選択・利用されていることが推定される。

引用文献

西本豊弘（編）,2006, 弥生時代の新年代 . 新弥生時代のはじまり第１巻 . 雄山閣 ,143p

表４　12号住居跡出土炭化材の放射性炭素年代測定および暦年較正結果

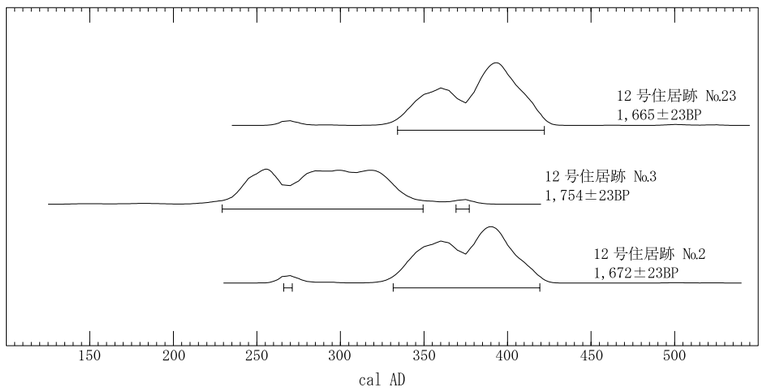
試料番号	種類	測定年代 BP	δ 13 C（‰）	補正年代（暦年較正用）BP	暦年較正結果					Code №.
					誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比		
№.2	炭化材（広葉樹）	1,660 ± 20	-24.32 ± 0.26	1,670 ± 20（1,672 ± 23）	σ	cal AD 347 - cal AD 370	cal BP 1,603 - 1,580	0.420		IAAA-132695
						cal AD 377 - cal AD 402	cal BP 1,573 - 1,548	0.580		
					2 σ	cal AD 266 - cal AD 271	cal BP 1,684 - 1,679	0.012		
						cal AD 332 - cal AD 419	cal BP 1,618 - 1,531	0.988		
№.3	炭化材（ｽﾀﾞｼﾞｲ）	1,750 ± 20	-24.95 ± 0.72	1,750 ± 20（1,754 ± 23）	σ	cal AD 246 - cal AD 262	cal BP 1,704 - 1,688	0.227		IAAA-132696
						cal AD 277 - cal AD 327	cal BP 1,673 - 1,623	0.773		
					2 σ	cal AD 229 - cal AD 349	cal BP 1,721 - 1,601	0.989		
						cal AD 369 - cal AD 377	cal BP 1,581 - 1,573	0.011		
№.23	炭化材（ｱｶｶﾞｼ亜属）	1,700 ± 20	-27.25 ± 0.32	1,670 ± 20（1,665 ± 23）	σ	cal AD 351 - cal AD 367	cal BP 1,599 - 1,583	0.278		IAAA-132697
						cal AD 379 - cal AD 410	cal BP 1,571 - 1,540	0.722		
					2 σ	cal AD 334 - cal AD 422	cal BP 1,616 - 1,528	1.000		

1）試料の前処理は、全て酸処理－アルカリ処理－酸処理（AAA 処理）である。

2）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68％が入る範囲）を年代値に換算した値。

3）暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用し、補正年代に（）で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用して計算する。

4）年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68.3%、2σは95.4%である。相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第173図　各試料の暦年較正結果の比較

図版1

1．２区より居屋敷遺跡を望む（上空南西から）

2．２区北側竪穴住居跡（上空から）

図版2

1．２区北側全景（上空から）

2．２区南側全景（上空から）

図版3

1．12号竪穴住居跡炭化材出土状況
（南西から）

2．12号竪穴住居跡完掘状況
（南西から）

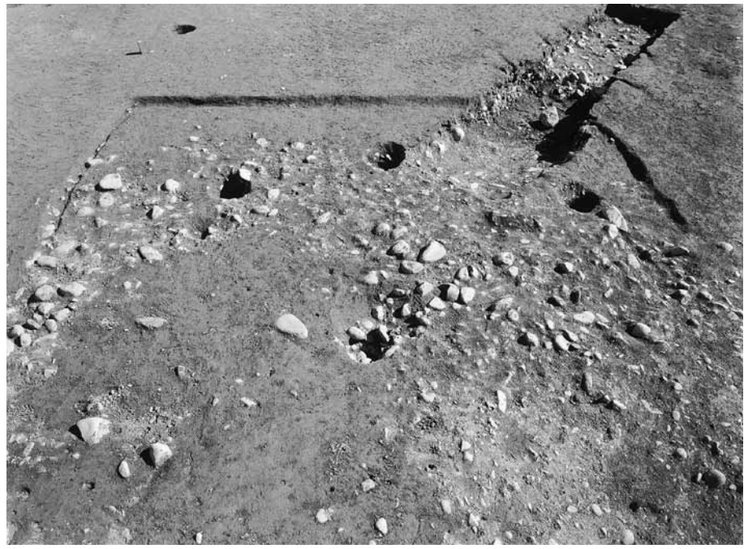
3．12号竪穴住居跡カマド（南西から）

1．13号竪穴住居跡（北から）

2．13号竪穴住居跡遺物出土状況（北東から）

3．14号竪穴住居跡（北から）

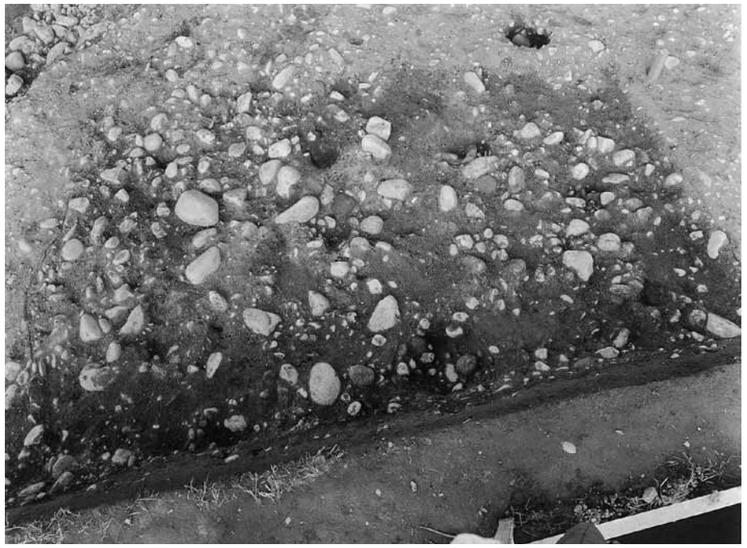
1．14号竪穴住居跡遺物出土状況（北から）



2．15号竪穴住居跡（北西から）

3．16・17号竪穴住居跡（南東から）

図版6



1．18号竪穴住居跡（南西から）

2．19号竪穴住居跡カマド（南から）

3．19号竪穴住居跡カマド（南西から）

図版7

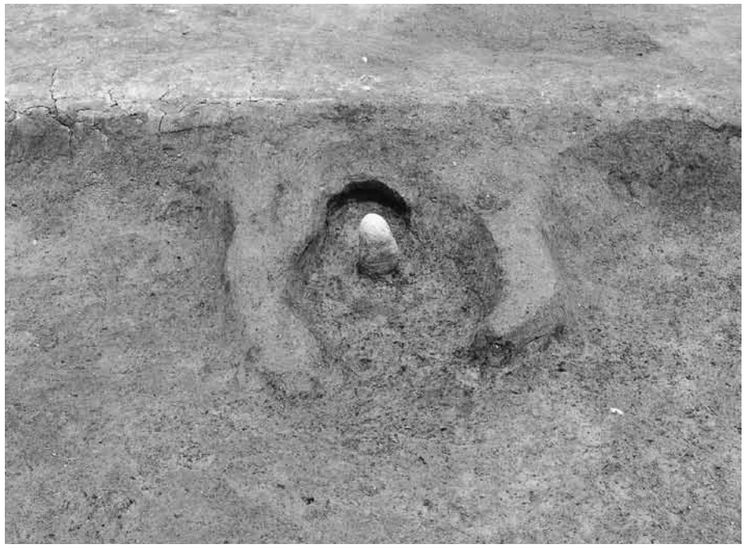
1．20号竪穴住居跡カマド（東から）

2．23号竪穴住居跡カマド（南から）

3．23号竪穴住居跡カマド（南から）

図版8

1．28号竪穴住居跡（南から）



2．28号竪穴住居跡カマド（南から）

3．30号竪穴住居跡（南西から）

図版9

1．30号竪穴住居跡カマド（南西から）

2．31号竪穴住居跡（南から）

3．33号竪穴住居跡（南東から）

1．34・37・46号竪穴住居跡（南から）

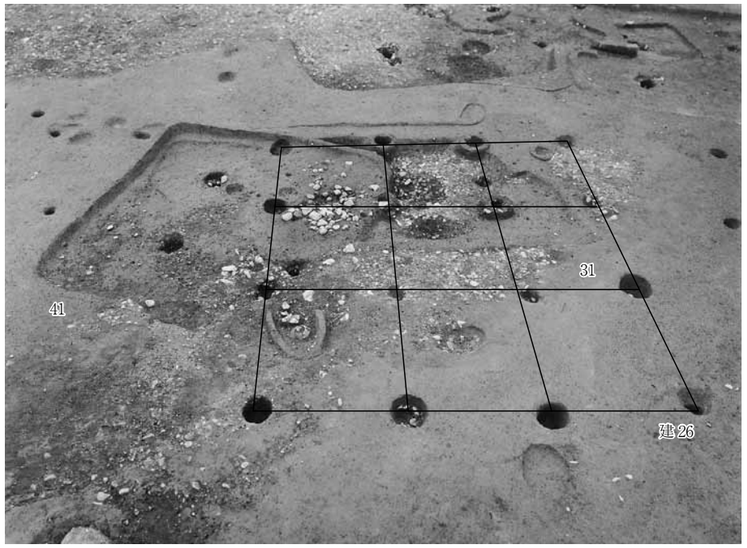
2．32・36号竪穴住居跡・36号土坑
（南西から）

3．36号竪穴住居跡カマド（南西から）

1．38・40号竪穴住居跡（南から）

2．38号竪穴住居跡遺物出土状況
（北東から）

3．39号竪穴住居跡（東から）



1．31・41号竪穴住居跡
　・26号掘立柱建物跡（南から）

2．41号竪穴住居跡（北から）

3．42号竪穴住居跡（北から）

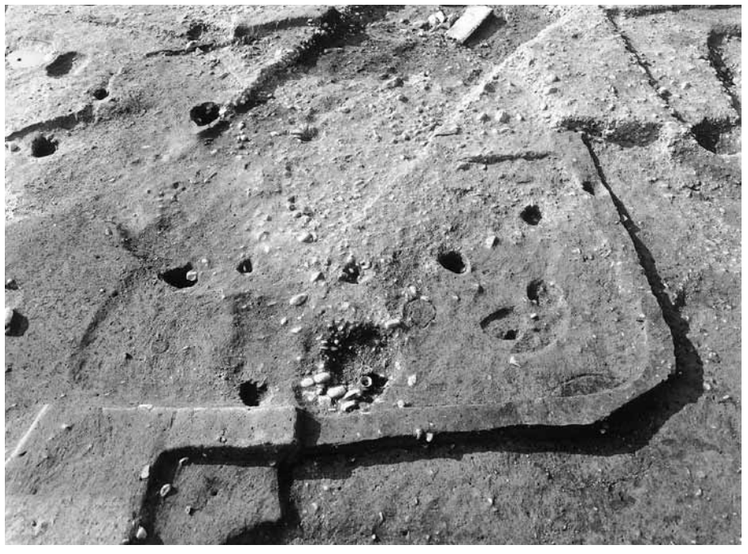
1．42号竪穴住居跡カマド（北西から）

2．43号竪穴住居跡（東から）

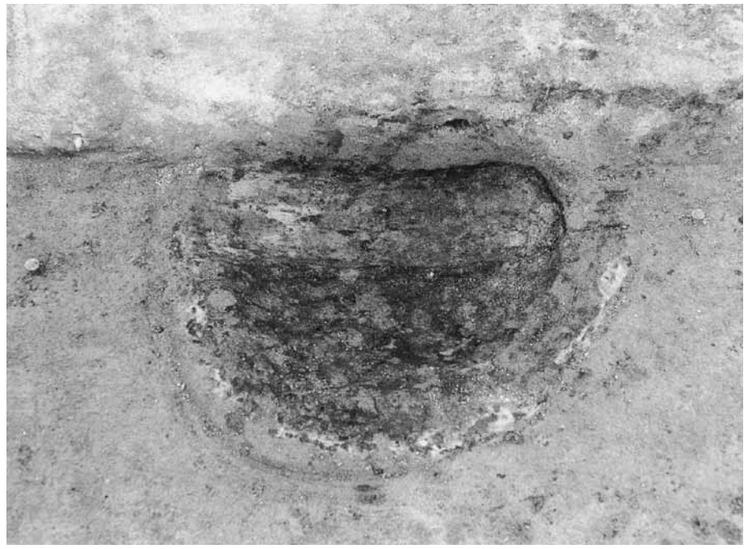
3．43号竪穴住居跡カマド（東から）

1．44号竪穴住居跡遺物出土状況（東から）

2．45号竪穴住居跡カマド（南から）

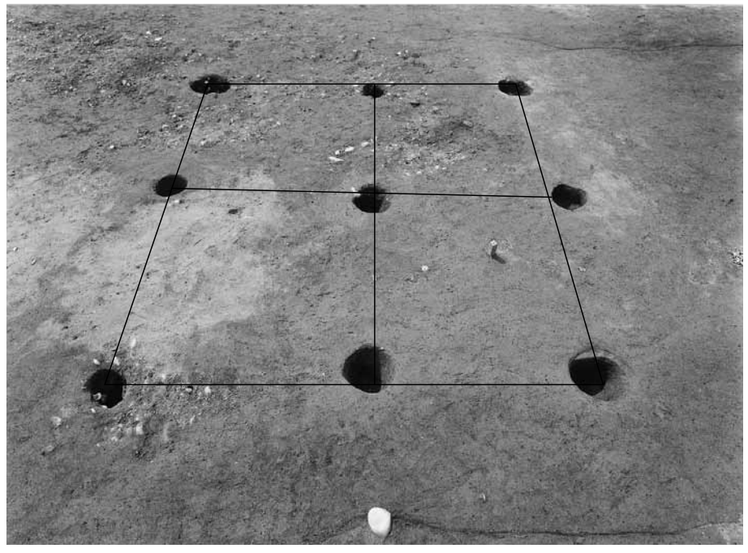


3．47号竪穴住居跡（東から）



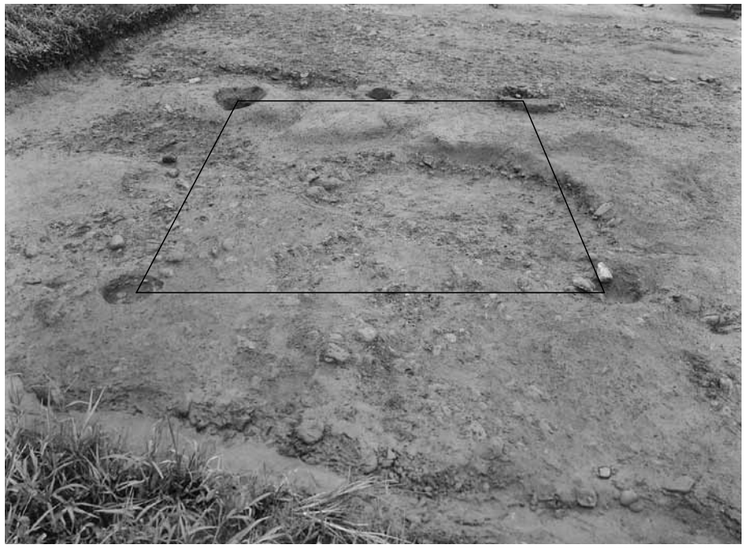
1．48号竪穴住居跡粘土貼り炉
（南西から）

2．１号竪穴状遺構（南から）

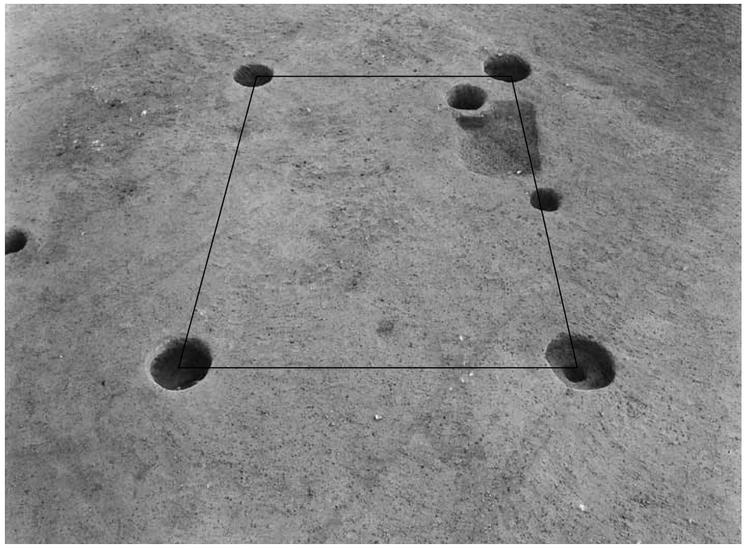


3．19号掘立柱建物跡（南東から）

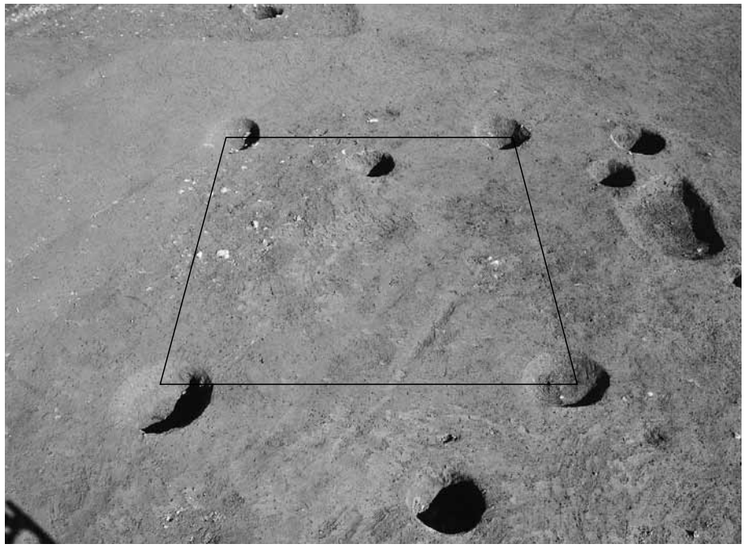
図版16



1．21号掘立柱建物跡（南東から）

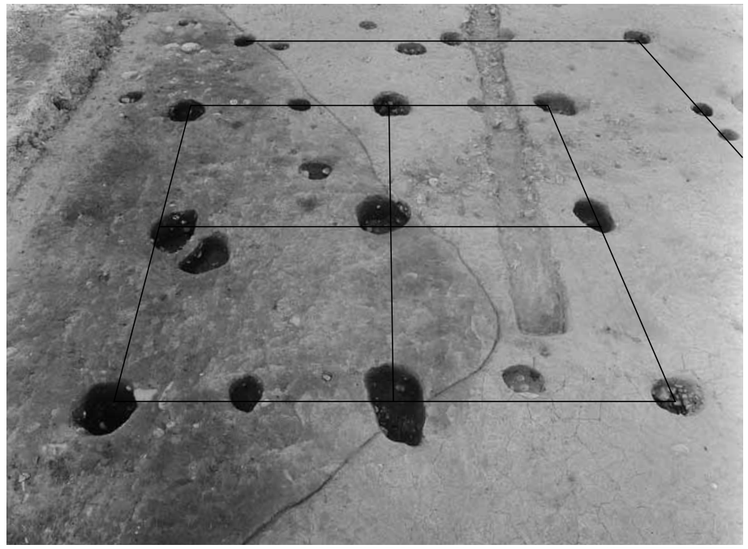


2．22号掘立柱建物跡（西から）



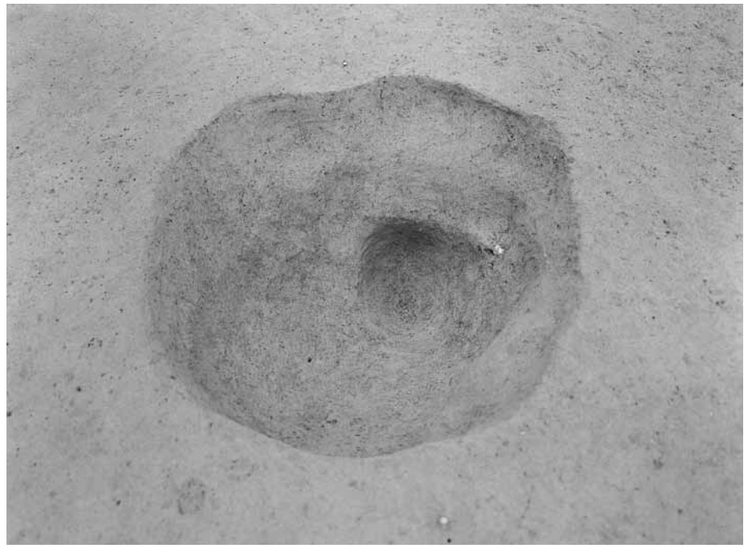
3．23号掘立柱建物跡（西から）

図版17

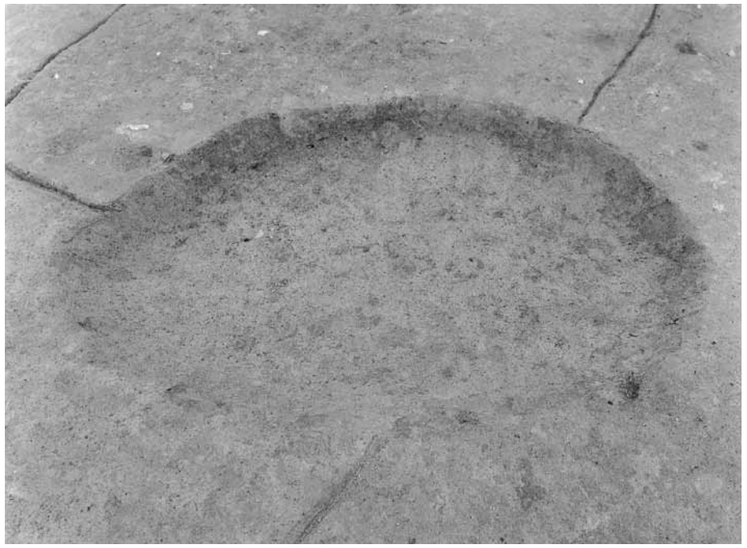


1．24号掘立柱建物跡（南東から）

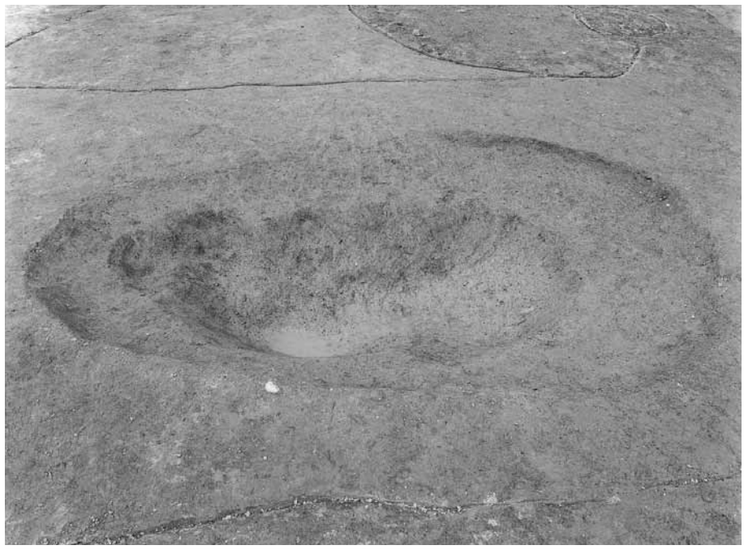
2．19・20号土坑（北から）



3．21号土坑（北から）



1．22号土坑（東から）



2．23号土坑（南西から）

3．24号土坑（南から）

1．25号土坑（南西から）

2．26号土坑（東から）

3．27号土坑（西から）

1．30号土坑（東から）

2．31号土坑小児棺出土状況（南から）

3．31号土坑完掘状況（南から）

1．32・33号土坑（東から）

2．34・35号土坑（南から）

3．37号土坑（北から）

１．１区13号溝Ａ－Ａ′土層断面（北東から）

２．１区13号溝Ｃ－Ｃ′土層断面（北から）

３．１区13号溝遺物出土状況１（北から）

１．１区13号溝遺物出土状況２（南東から）

２．１区13号溝遺物出土状況３（南から）

３．１区13号溝遺物出土状況３（北西から）

１．１区13号溝遺物出土状況４（南西から）

２．１区13号溝遺物出土状況５（北西から）

３．２区13号溝上層除去後（北から）

１．２区13号溝下層遺物出土状況（西から）

２．２区13号溝上層祭祀遺物出土状況（南から）

３．32号溝遺物出土状況（北東から）

1．36号溝上層除去後（東から）

2．36号溝テラス状部分（北から）

3．36号溝B－B′土層断面（東から）

1．36号溝上層勾玉出土状況（北西から）

2．36号溝遺物出土状況１（東から）

3．36号溝遺物出土状況２（北東から）

1．36号溝遺物出土状況４（南西から）

2．大谷北側全景（南西から）

3．大谷D－D′土層断面（南西から）

1．大谷E－E′土層断面（北西から）

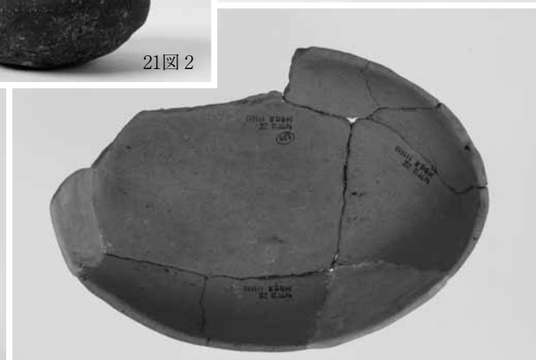
2．大谷遺物出土状況１（西から）

3．大谷遺物出土状況２（北西から）

1．井泉遺構全景１（西から）

2．井泉遺構全景２（北東から）

3．井泉遺構前、板木出土状況（北から）



竪穴住居跡出土土器1

36図 1

36図 2

37図 1
41図 1
45図 1
39図 1
50図 1

37図 7

43図 2

39図 4

39図 9

竪穴住居跡出土土器２

43図 12

46図 16

48図 1

48図 2

59図 1

48図 8

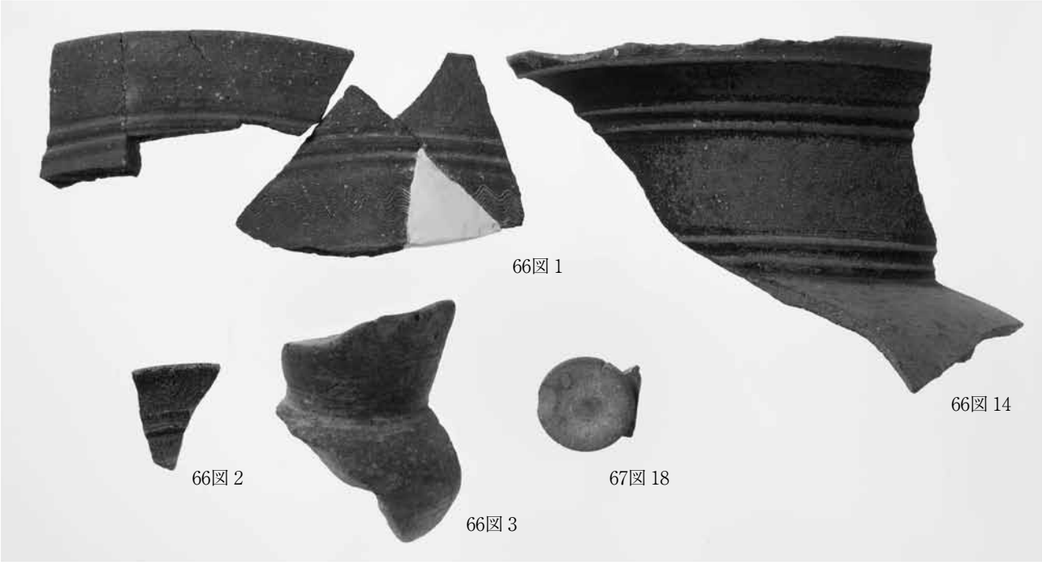
48図 8

60図 13

48図 8

60図 13

竪穴住居跡出土土器３・土坑出土土器１



60図 6

60図 12

66図 4

66図 15

67図 23

67図 19

67図 22

67図 24

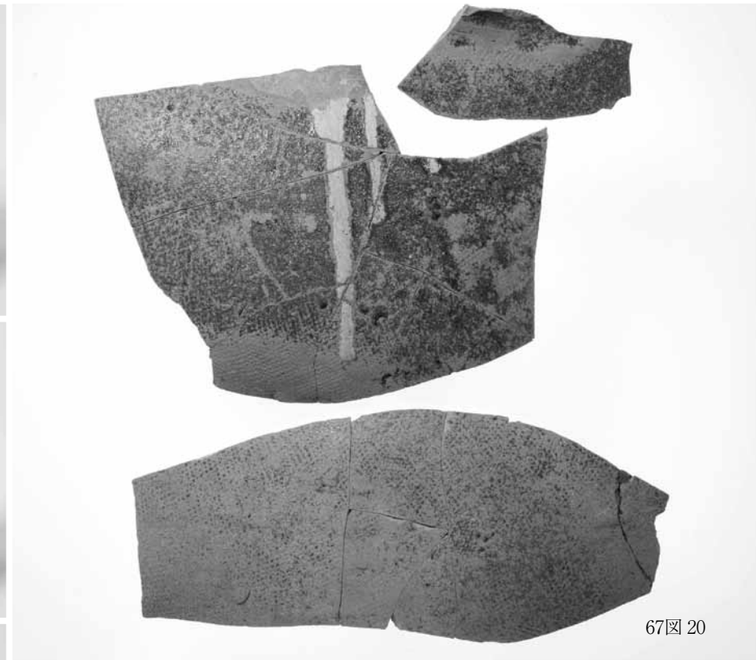
土坑出土土器２・13号溝状遺構出土土器1

67図 25

67図 26

68図 27

68図 29


67図 20

70図 66

72図 84

71図 69

70図 66

13号溝状遺構出土土器２

71図 75

74図 133

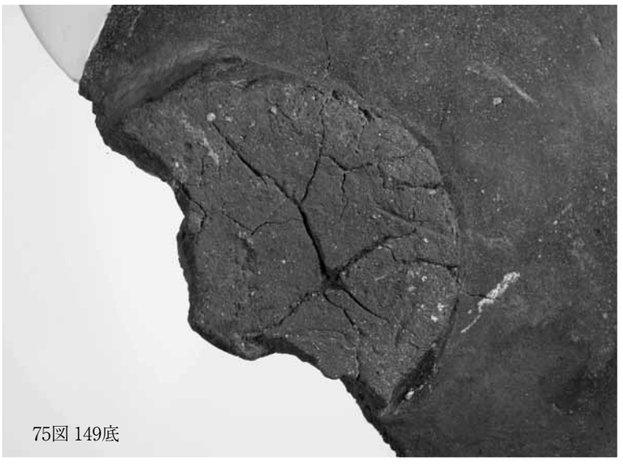
74図 135

75図 143

75 図 149

74図 136

75図 149


75図 149底

13号溝状遺構出土土器3

76図 152

77図 158

80図 170

80図 171

81図 179

83図 201

83図 202

84図 206

84図 210

84図 212

84図 213

84図 215

84図 216

87図 251

13号溝状遺構出土土器4

87図 253

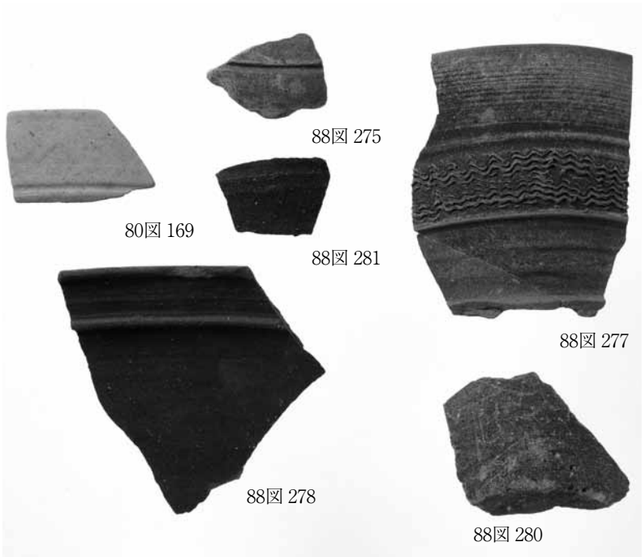
87図 254

87図 255

87図 258

87図 263

87図 265



88図 276

88図 282

88図 279

13号溝状遺構出土土器5

89図 285

91図 311

91図 313

91図 314

92図 317

92図 326

93図 330

93図 340

94図 349

93図 333

94図 343

13号溝状遺構出土土器6

95図 358

95図 360

95図 370

96図 377

96図 389

95図 374

96図 390

97図 398

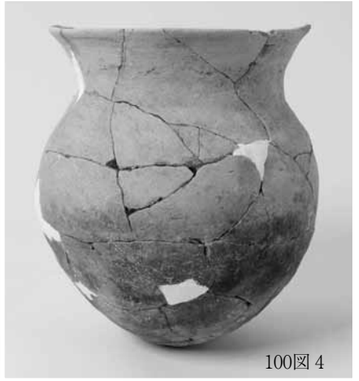
96図 391

97図 399

97図 408

98図 422

98図 424


100図 4

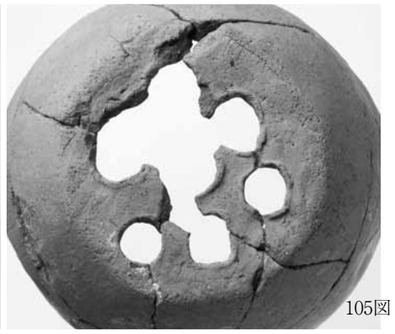
13号溝状遺構出土土器7・32 号溝状遺構出土土器

105図 8

105図 13

105図 12

106図 22


105図 13

106図 34

106図 25

106図 35

106図 36

36号溝状遺構出土土器1

107図 38

107図 39

107図 40

107図 43

108図 47

108図 55

108図 59

109図 65

109図 66

109図 67

109図 68

109図 70

36号溝状遺構出土土器2

110図 73

110図 74

110図 77

110図 78

110図 79

110図 81

110図 82

110図 83

110図 84

111図 87

111図 85

111図 88

36号溝状遺構出土土器3

111図 99

111図 100

111図 106

112図 113

112図 115

113図 129

113図 131

115図 148

115図 150

114図 134

115図 151

115図 159

115図 161

115図 163

115図 152

115図 156

115図 169

36号溝状遺構出土土器4

115図 162

116図 173

116図 174

116図 175

116図 177

116図 178

116図 179

116図 180

116図 181

116図 182

116図 187

116図 190

36号溝状遺構出土土器5

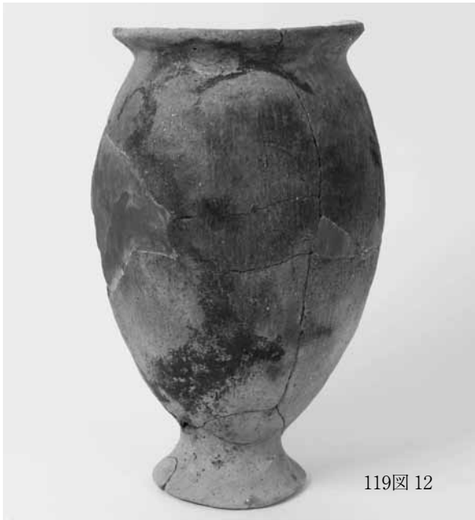
118図 2

118図 3

119図 9

119図 10

119図 11


119図 12

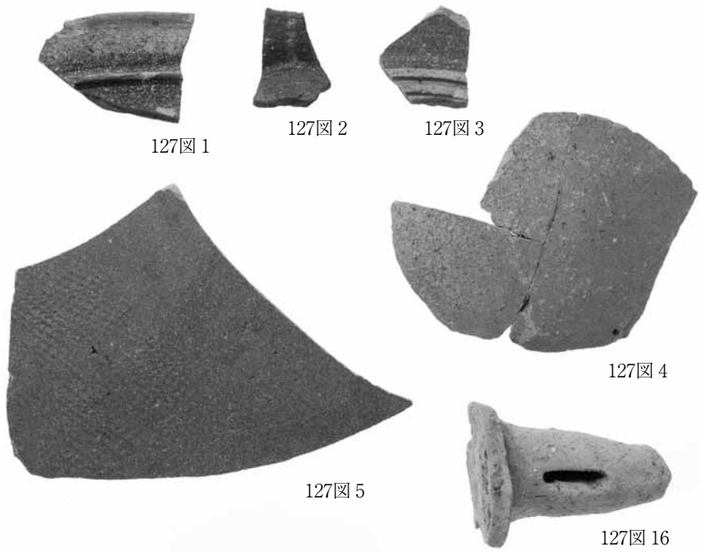
121図 36

121図 33

38号溝状遺構出土土器1

123図 48

127図 7



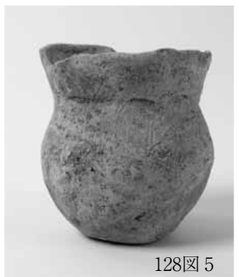
128図 3

128図 1

128図 4

128図 6

128図 2

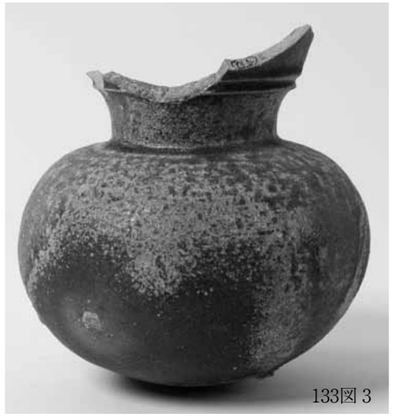

128図 5

128図 8

38号溝状遺構出土土器2・小谷・大谷出土土器1

133図 1

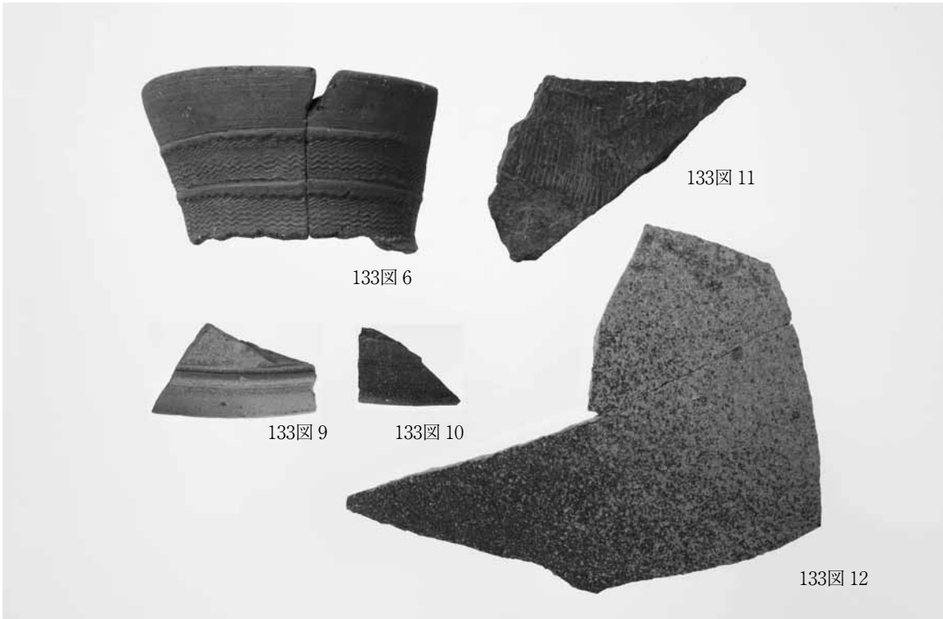
133図 2


133図 3

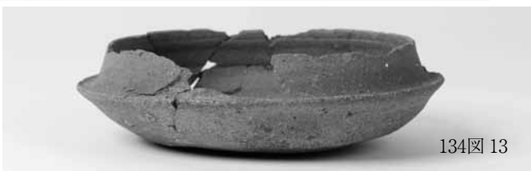
133図 4

133図 5

133図 7


133図 6
133図 11
133図 9
133図 10
133図 12

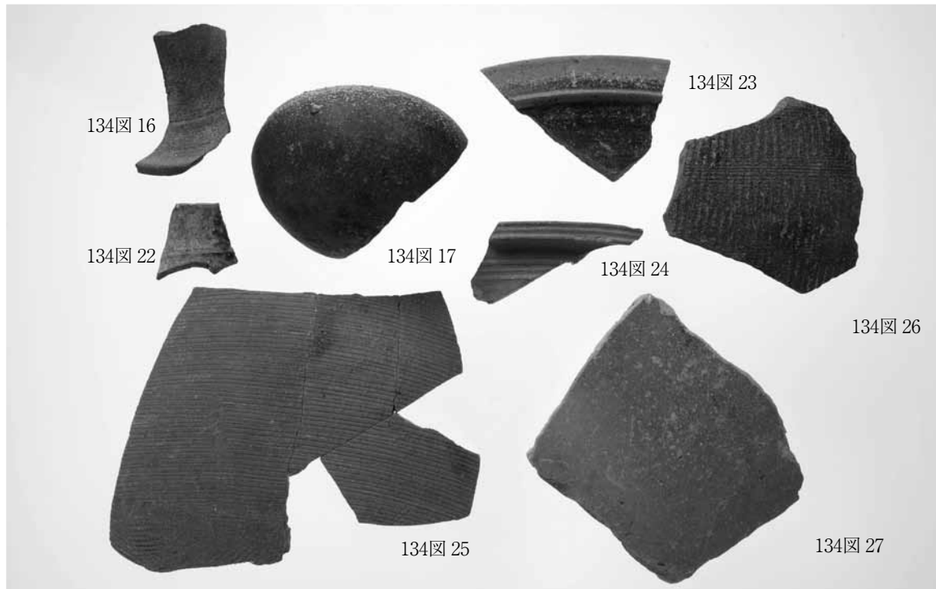
134図 10


134図 13

大谷出土土器2

133図 8

133図 13

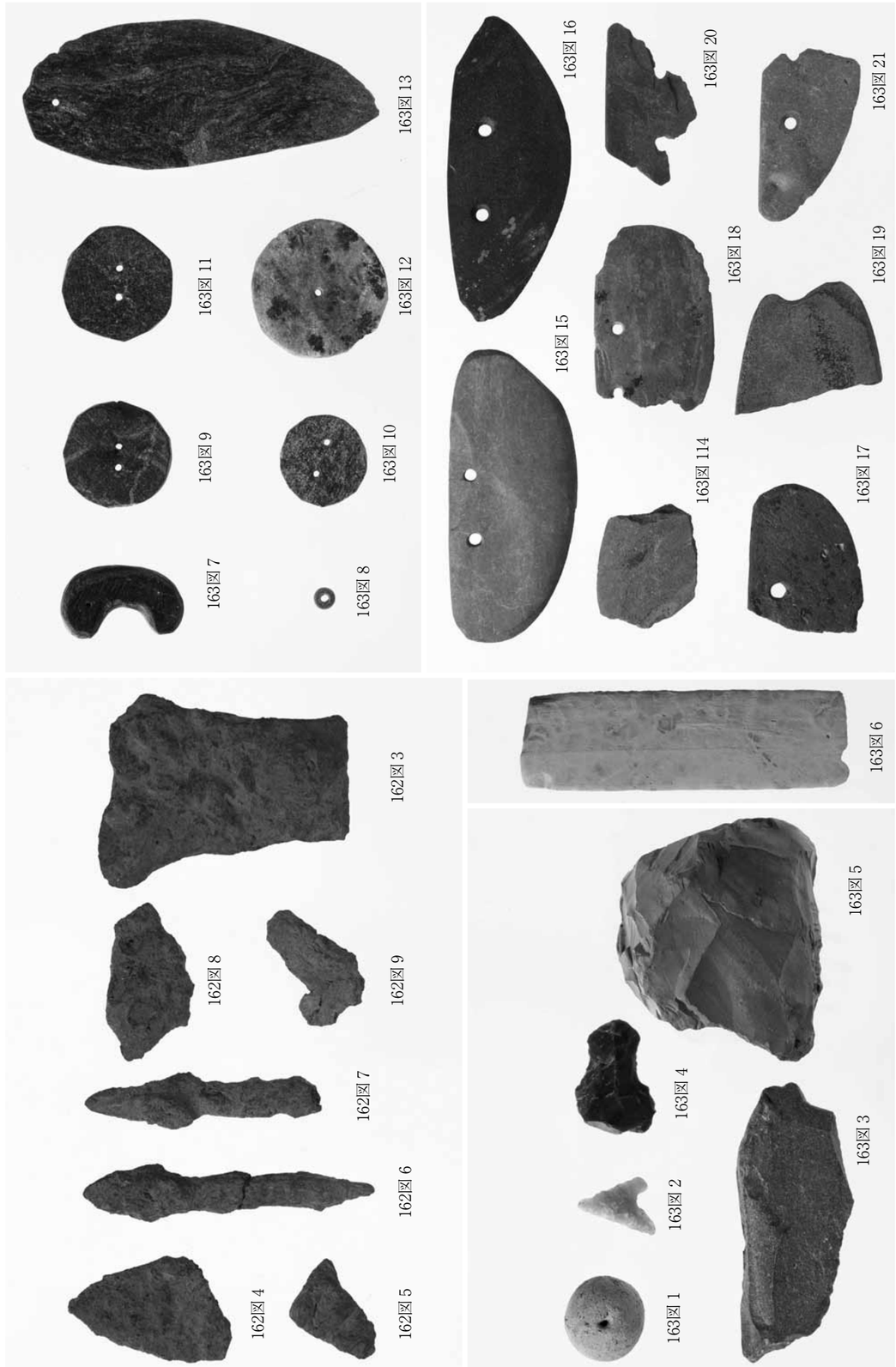

134図 16
134図 23
134図 22
134図 17
134図 24
134図 26
134図 25
134図 27

大谷出土土器3

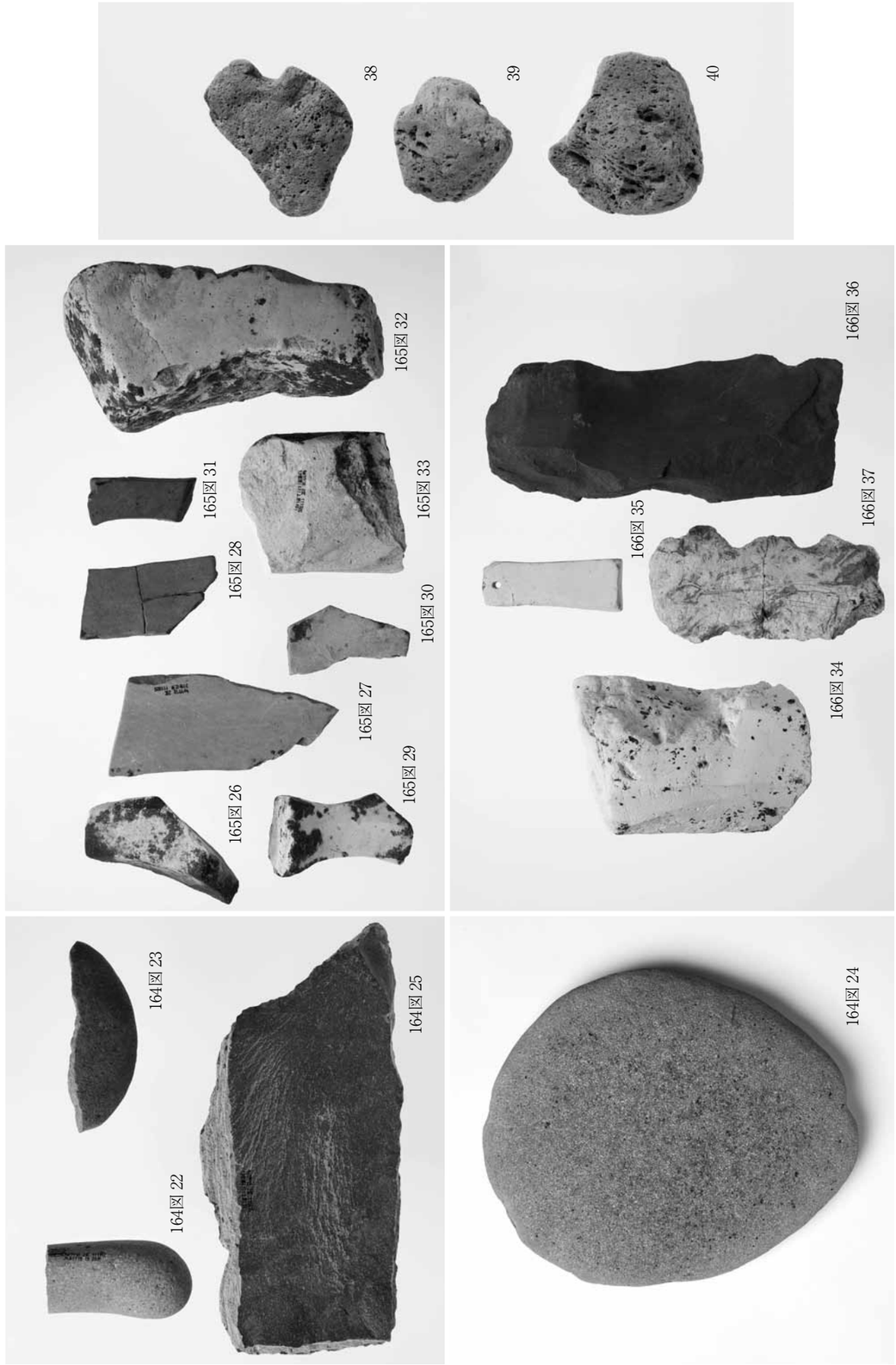
大谷出土土器4

大谷出土土器5

大谷出土土器6・鋳造関連製品



鉄製品・石器・石製品1



石製品2

安武・深田遺跡Ｂ遺跡２・Ｃ遺跡

Ⅳ　安武・深田遺跡Ｂ遺跡２

１　調査の概要

安武・深田遺跡は城井川北岸の河岸段丘の台地上に位置している。昭和６３年～平成元年に実施した椎田バイパス建設に伴う発掘調査により、台地の北西には後背湿地があることと、台地は城井川に併走する方向を主軸とする柳葉形を呈していることがわかっている。遺跡は縄文時代後期から江戸時代までの遺構・遺物が見られるが、主体となるのは弥生時代中期と６世紀から７世紀の集落であった。

東九州自動車道築城インターチェンジに伴う発掘調査のほとんどは築上町教育委員会がＢ１区を担当していたが、水路箇所の施工を先行して行う必要が生じ、築上町教育委員会では対応できなくなったためＢ２区を九州歴史資料館が担当した。Ｂ２区は築上郡築上町大字安武 1557 －１番地と 1178・1493 －１番地の一部で、計 710㎡である。北と南に大きく調査区が分かれており、Ｂ２区を北側調査区と南側調査区とに分けた。Ｂ１区はＢ遺跡１、Ｂ２区はＢ遺跡２として報告する。

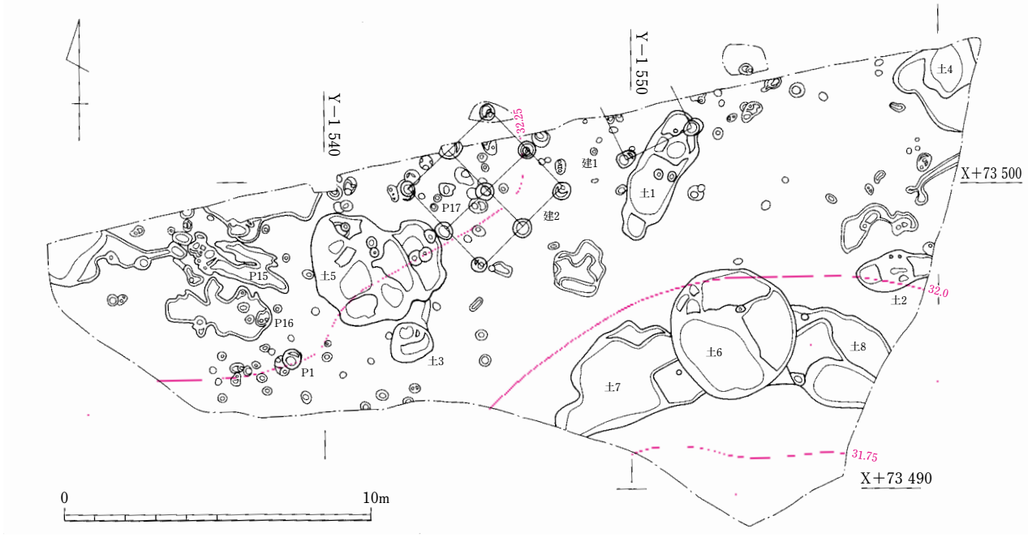
平成２３（２０１１）年１１月２８日に 0.7 バックホーによる表土剥ぎを開始し、埋設管を人力で除去する作業から行った。１２月１６日に空中写真をラジコンヘリコプターで撮影し、 Ｃ遺跡の撮影も同時に行う。１２月２１日築上町教育委員会の高尾氏に縄文前期の包含層の可能性を指摘され、縄文包含層を精査したところ、轟式土器片が出土する。１２月２６日に終了した。

２　遺構と遺物

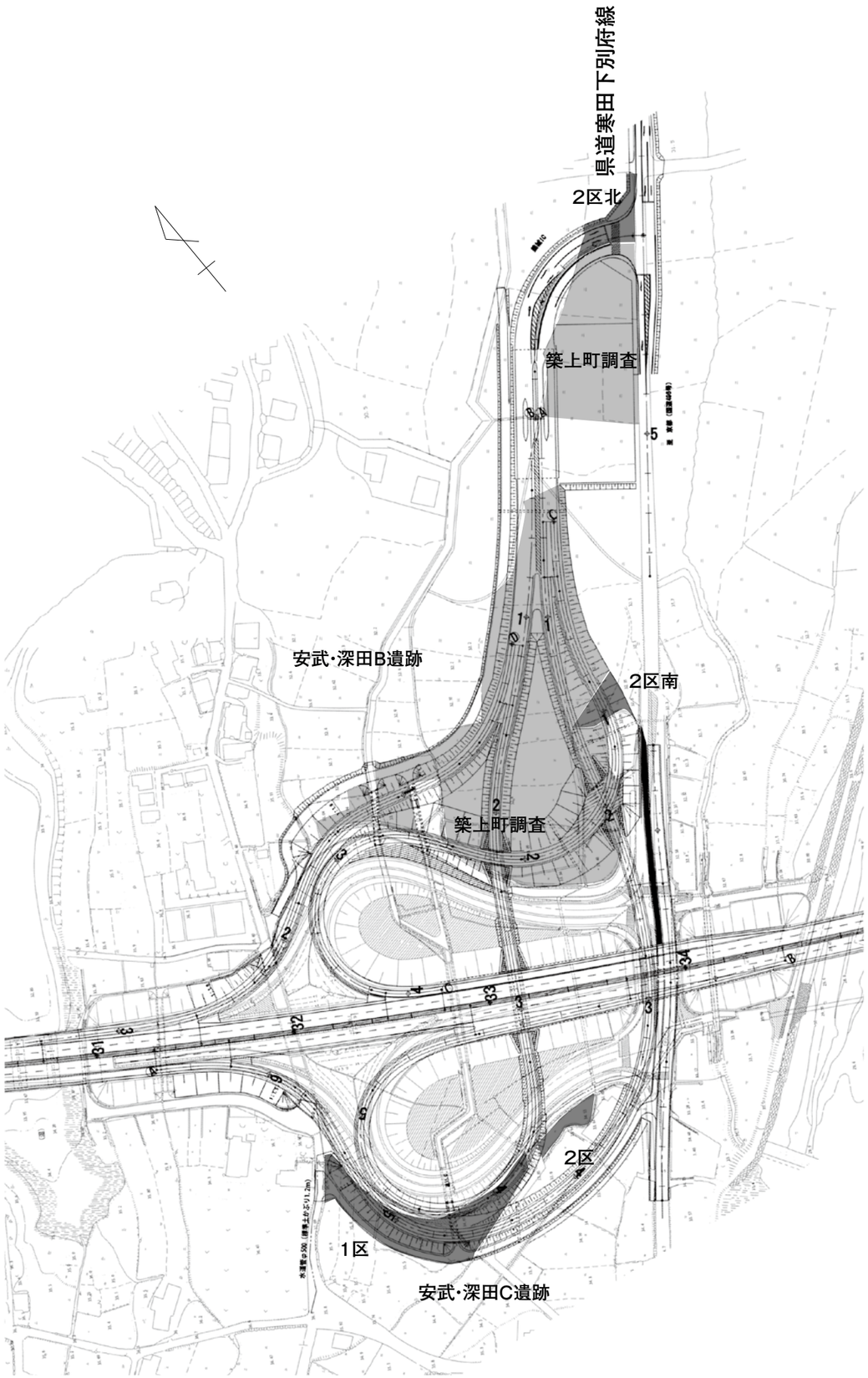
南側調査区

南側の調査区は遺跡の南部にあたり、南端は落ち地形になっていたことから台地の南端部とわかった。

調査区の北側には水田水路の塩化ビニール管が走っており、これを保護するため用地内ではある



第１７４図　安武・深田遺跡Ｂ遺跡２南側調査区遺構配置図（1/ ２００）



第175図　周辺地形と調査範囲図（1/ 3,000）

ものの、管の周囲は柱穴の有無を確認する程度に留めた。南側の落ち部分の埋土は遺物包含層でないことから用地端まで掘削しなかった。

遺構は掘立柱建物跡が２棟、土坑が８基である。掘立柱建物跡は２×２間の２号は確実だが、もう１棟については柱穴の有無を確認できなかったので不確実である。土坑は不整形で床面の凹凸が大きく小ピットが入るなど、木の根が抜けた痕跡と見られるものが多く、人為的に掘削したものでない可能性が高い。しかし、遺物が出土しているためその穴をゴミ穴として利用していた可能性があるので土坑として報告した。６～８号土坑は地形の落ちの変換点に位置しており、基盤層が軟弱なので木の根が抜けた後に遺物が流れ込んだ可能性が高い。このほか多くのピットが検出され、柱穴が弧状に並んでいたことと弥生時代中期の土器が散見されたこと及び、築上町教育委員会の調査範囲で円形竪穴住居跡が発見されていることから、円形竪穴住居跡の柱穴のみが残っている可能性を考えたが、確証に欠けるためここでは想定復元していない。西側は微細な凹凸が見られたが、明確な遺構ではなかった。

３　掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡（図版５５、第１７６図）

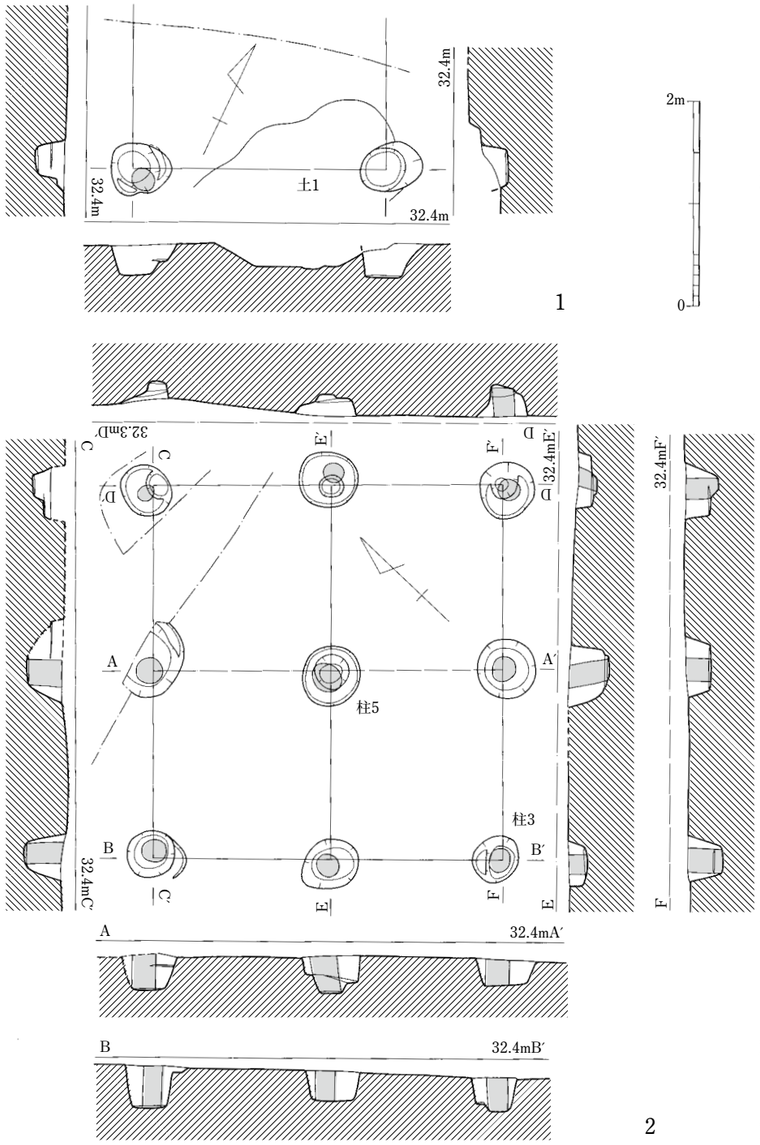
調査区北端に位置する１×１間の掘立柱建物跡で、調査区外に２本の柱穴があるものと想定した。柱穴の規模は２号掘立柱建物跡に近かったので掘立柱建物跡を構成する柱穴と考えたが、対応する柱穴が調査区北側の塩化ビニール管の下に位置するため確認することができなかった。掘立柱建物跡ではなく４本柱竪穴住居跡の柱しか残っていないものかもしれない。主軸方向はＮ－64°30′－Ｅで、柱穴は長軸60cm、深さ30cmほどあり、柱痕も見られた。柱穴には弥生時代中期の跳ね上げ口縁甕の口縁部片が出土していたが、本遺跡内の掘立柱建物跡の類例から弥生時代のものではないので、混入品であろう。

２号掘立柱建物跡（図版５５、第１７６図）

調査区の北端中央に位置し、２×２間の総柱掘立柱建物跡で、北端の柱穴は調査区境の縁化ビニール管の脇から検出された。主軸方向はＮ－46°20′－Ｅで、柱穴は長軸40～60cm、深さ30～35cmほどあり、柱痕も見られた。弥生土器は混入品で、他の遺物から６世紀後半の所産であろう。

出土遺物（第１８０図）

１は柱５出土の小型甕の口縁部で、口縁部は短く外傾する。小片のため反転復元できないが、口径は17cm程だろう。口縁部内外面は丁寧なナデ仕上げ、肩部は外面が粗いハケ、内面は粗いケズリ。内外面茶灰褐色で、内面は変色がなく、外面の変色は焼成時の黒斑と見られることから煮沸使用していないことがわかる。２は柱５出土の小型甕の口縁部で、口縁部は短く外反する。小片のため反転復元できないが、口径は20cm程だろう。口縁部内外面は丁寧なナデ仕上げ、内面肩部はケズリ。器面は失われているが、内外面黄灰白色で、変色がないことから煮沸使用していないことがわかる。３は柱３出土の平底の壺か甕の底部片で、外面は目の細かいタテハケで、工具端部が胴下位に集中している。内面はオサエをナデ消している。胎土は白雲母を多く含む。内外面黄橙白色で変色していないので、煮沸使用していない。



第176図　掘立柱建物跡実測図（1/６０）

４　土坑

土坑は８基検出された。６～８号土坑は地形の変換線上に切り合っており、一見すると１つの遺構のように見えるが、切り合いは明確で、床面の高さも異なり、遺物の入り方も違っていたので別の遺構で間違いない。

１号土坑（図版５６、第１７７図）

南側調査区の北部で、１号掘立柱建物跡に切られて検出された長楕円形プランの土坑である。長軸4.38m、短軸1.58mで、中央部が深くなっている。最深部は35cm程度で、床面の凹凸が大きいもののほぼ扁平であるため倒木痕とも断定しにくい。主軸方向はＮ－27°40′－Ｅで、遺物が出土していないため時期を特定できない。

２号土坑（図版５７、第１７７図）

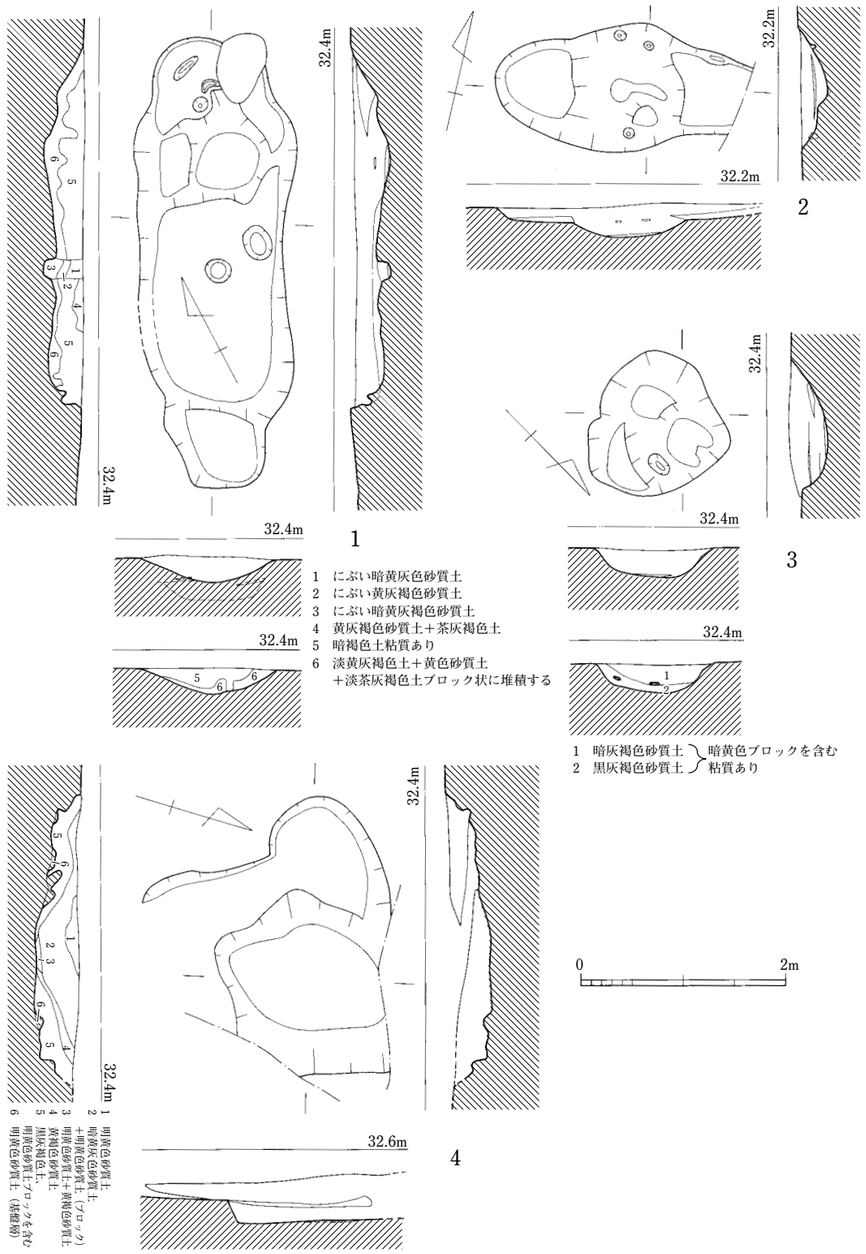
南側調査区の東部で検出された長楕円形プランの土坑である。東端が調査区外に延び長軸2.48m、短軸1.23mと小型で、中央部が深くなっている。最深部は32cm程度で、床面の断面形は弧状で、床面の凹凸が大きいので倒木痕と考えられる。主軸方向はＮ－78°－Ｅで、縄文土器片と弥生土器片は混入と見られ、５の丸底の底部から６世紀代の可能性が高い。

出土遺物（第１８０図）

４は平底の壺か甕の底部片で、外面は目の細かいタテハケ、内面オサエで胎土は白雲母を多く含む。外面は暗赤橙色、内面黄白色で変色がないので、煮沸使用していない。５は壺か甕の底部片で、内外ナデ。底部は胴部より薄く、上げ底状である。混入物少なく、器面は平滑。外面淡赤橙色、内面黄灰白色を呈する。６はミミズ腫れ突帯がつく鉢の胴部片で、轟Ｂ式土器片だろう。突帯は指でつまんだ痕跡があり、下位の突帯は湾曲しており、波状文をなす可能性がある。

３号土坑（図版５６、第１７７図）

南側調査区西部で検出された不整形プランの土坑である。長軸1.45m、短軸1.4mと小型で、北西部が深くなっている。最深部は35cm程度で、床面の断面形は弧状で、床面の凹凸が大きいので倒木痕と考えられる。出土遺物から弥生時代中期後葉の所産である。



第177図　1～4号土坑実測図（1/６０）

出土遺物（第１８０図）

７は跳ね上げ口縁甕で、口縁端部は肥厚でなくナデでつまみ上げている。肩部の断面三角形突帯も貼り付け後上下のナデにより先端を尖らせている。器面は内外ナデで、暗黄灰色を呈する。内面は使用のため器面摩滅が著しい。８は壺か甕の底部片で、外面にはわずかにタテハケが残る。混入物は少なく、堅緻。底部は厚いものと思われる。外面にぶい暗黄灰色だが、本来は暗茶灰褐色であろう。内面が黒灰色を呈するのは、口縁部が締まる器形とも考えられるが、甕を倒立させて焼成したもの。９は、断面方形突

帯が３条貼り付けられている。傾きから壺の肩部片であろう。外面は黄灰白色で、内面が淡黒灰色であることから､頸が締まる器形とわかる。反転復元できない小片だが中型品で､突帯は他にもあったと思われる。いずれも弥生時代中期後葉のものである。

４号土坑（図版５７、第１７７図）

南側調査区北東部で検出された不整形プランの土坑である。北・東・南部が調査区外に延びるため全体像は不明である。長軸 2.72m 以上、短軸 2.43m 以上で、北東部が深くなっている。最深部は 45cm 程度で、床面の断面形は弧状で、床面の凹凸が大きいので倒木痕と考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

５号土坑（図版５７、第１７８図）

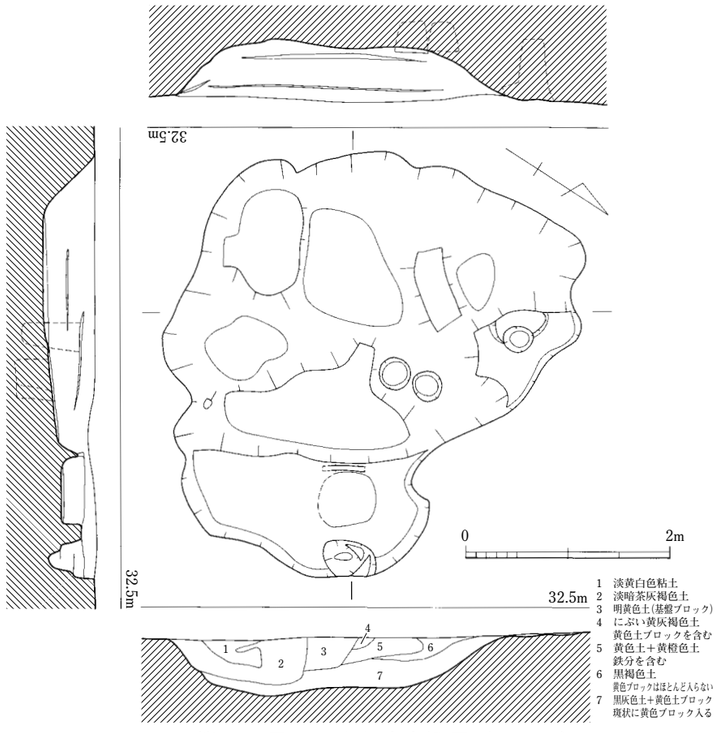
南側調査区西部で検出された不整形プランの土坑である。長軸 4.10m、短軸 4.06m と大型で、南西部が深くなっている。最深部は 45㎝程度で、床面の断面形は逆台形だが、土層に基盤層ブロックが混ざっていることと床面の凹凸が大きいので倒木痕と考えられる。出土遺物からは時期を特定できないが、弥生時代中期の所産の可能性が高い。

出土遺物（第１８０図）

１０は頁岩製の砥石で、板状の砥石が斜めに欠損したものを再利用したものだろう。先端が尖るのは欠損面を整形したためで、上面は薄く剥離した部分を再利用している。刃傷がないことから、鉄製品用ではないと考えられるので、弥生時代のものだろう。52.24g を測る。

６号土坑（図版５８、第１７９図）

南側調査区の南部で、落ち地形の変換線で７・８号土坑を切って検出された略円形プランの土坑である。長軸 4.12m、短軸 3.98m で、南西側が深くなっている。しかし、最深部でも 45㎝程度しかなく、全体に扁平であるため、倒木痕とも断定しにくい。床面は凹凸が多く、基盤層は小礫層を含む粘土層であった。遺物は今回の遺構の中で最も多いが、破片が小さく、廃棄したというよりは堆



第178図　5号土坑実測図（1/６０）

積したとみるべきだろう。埋土は上位と下位に大きく分かれており、下位の４～６層は弥生時代中期後半の堆積で、最終埋没は瓦質土器から室町時代であろう。

出土遺物（図版５９、第１８０図）

１１は２層出土の壺の口縁部で、内面端部を肥厚させて跳ね上げ状にしている。外面中位は肥厚部との接合後のナデ仕上げにより、突帯のように水平に突出している。全体に歪みがあり、図より肩部が張る部分もある。外面はナデのみ、内面は肩部以下の器面が剥離しており観察不能。器壁が厚く、長石・白雲母を多く含む。内外面橙褐色を呈す。

１２は４層出土の壺で、口縁部は内面端部を肥厚させて跳ね上げ状にしている。胴部は歪みのため断面楕円形になる。上半部は器面の摩滅が著しいが、下位は残りがよく、内外面ナデで、内面胴下位はタテナデの窪みが残る。内面の器面剥離はなく、器壁が厚い。外面は橙褐色、内面は淡黒灰色を呈す。内面の色調は頸部が締まった器形のため焼成不良になったものだろう。長石・白雲母を多く含む。１３は瓦質土器の湯釜で､胴部の中位からやや下がったところに突帯を貼り付けている。器面摩滅のため調整は観察不能。外面は黒灰色、内面は暗茶灰褐色を呈する。

７号土坑（図版５８、第１７９図）

南側調査区の南部で、落ち地形の変換線で検出された不整形プランの土坑で、東端を６号土坑に切られ、西端が調査区外に延びる。長軸は 4.4m 以上、短軸は 2.95m である。床面はほぼ平坦で、最深部でも 34㎝程度しかなく、倒木痕とも断定しにくい。遺物はわずかで、図化した縄文土器片は混入であろう。

出土遺物（図版５９、第１８０図）

１４は縄文粗製深鉢の胴部片で、傾きは不明確。内外面２枚貝貝殻条痕。器面の残りがよく、内外面淡黄橙灰白色で変色が見られない。胎土には白雲母と角閃石が多く含まれる。

８号土坑（図版５８、第１７９図）

南側調査区の南部で、落ち地形の変換線で検出された不整形プランの土坑で、西端を６号土坑に切られ、東端が調査区外に延びる。長軸は 3.6m 以上、短軸は 3.05m である。床面はほぼ平坦で、最深部でも 30㎝程度しかなく、倒木痕とも断定しにくい。遺物はわずかで、小片が多く堆積したものであろう。出土遺物から弥生時代中期後葉のものだろう。

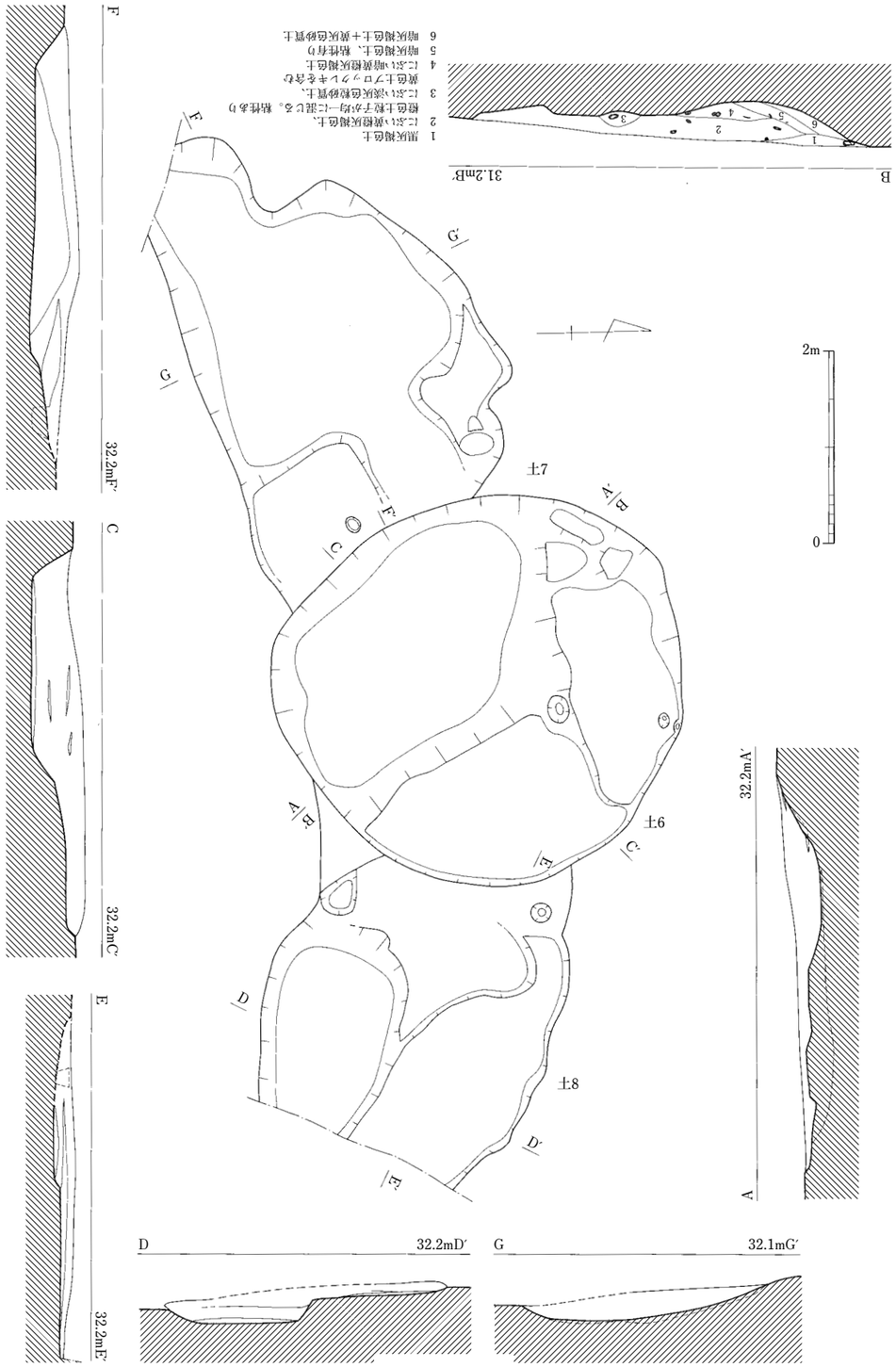
出土遺物（第１８０図）

１５は跳ね上げ口縁甕の口縁部片で、小片のため傾きは不明瞭。色調は内外灰白色だが、口縁外面下部は暗褐色に変色しているので、煮沸使用したものである。１６は壺の蓋で、器面丁寧なナデで平滑にされており、外面のみ赤色顔料が塗布されている。器面が摩滅しているのでミガキは残っていない。裾部に穿孔がある。小片のため径を復元できない。混入物少ない。口縁部の形態から弥生時代中期後葉のもの。

ピット出土遺物（図版５９、第１８１図）

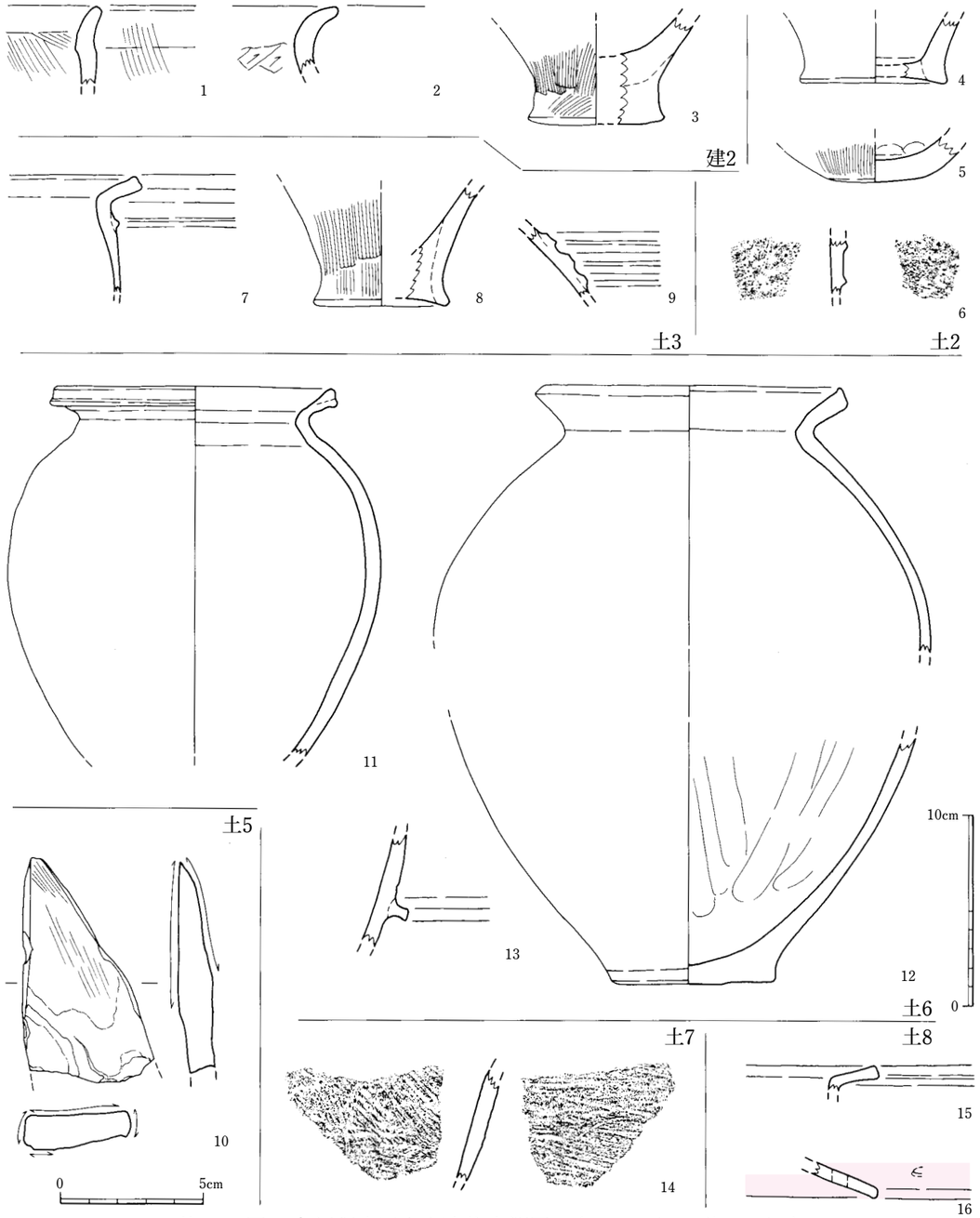
１はピット１出土で、小壺が胴部で３つ融合したものの２個体分である。胴部の接合部には穿孔があり、３個体で１つの容器となっている。しかし、２個体のうち、Ａは穿孔が１つしかない。口

縁部はナデ、肩部はタテハケ、胴部はヨコハケで、平滑に仕上げられている。底部はケズリ。内面は口縁部からヘラ状の工具で届く範囲を削っており、粗い仕上がりである。色調は茶灰褐色を呈しており、胎土は精良堅緻。個体間の接合部は粘土の充填が不十分で空間が残っている。４世紀後半だろう。２はピット１５出土の小型丸底壺で、内外面とも口縁部がオサエ、胴部がケズリでナデ仕

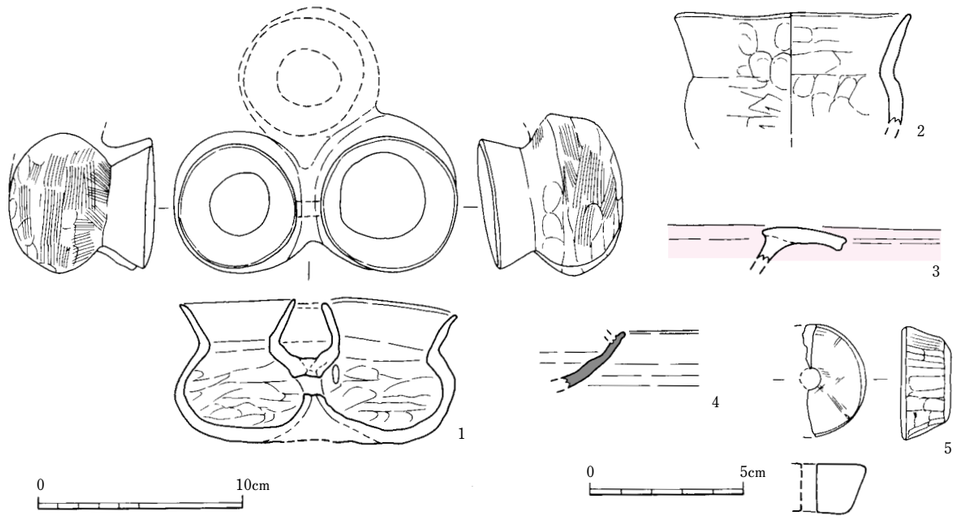


第179図　6～8号土坑実測図（1/ 60）

上げしていないため、表面に凹凸が残る粗製品である。内外赤橙色を呈し、変色なし。胎土は角閃石を多く含む。３はピット１６出土の丹塗磨研広口壺の鋤先口縁部である。口縁部は貼り付けで、丁寧に研磨されているが、外面は器面が失われている。弥生時代中期後葉。４はピット１７出土の須恵器杯身で、外面と受け部は暗灰色、内面は青灰色であることから、伏せて焼成されたとわかる。外面は回転ヘラケズリ。６世紀後葉から末。５はピット２０出土の滑石製紡錘車で、各面は丁寧に研磨されているため、加工痕はほとんど観察できない。15.26g を測る。



第180図　南側調査区出土遺物実測図1（10は1/ 2、他は1/ 3）



第181図　南側調査区出土遺物実測図2（5は1/２、他は1/３）

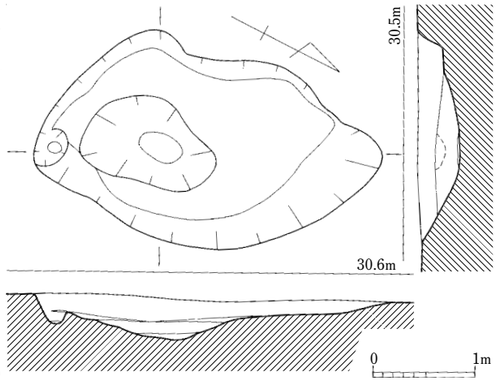
北側調査区

北側は遺跡の北端で遺構がほとんどないことがわかっていたが、調査区東端は古代官道推定路線に隣接していることから、道路状遺構が検出される可能性があった。掘削したところ旧地形が大きく削平されていたため遺構は残っていなかった。それ以外も遺構がほとんどなく不整形な落ち込みと木の根の抜け跡と見られる土坑が１基のほかは小さなピットのみであった。

南部には縄文時代の遺物包含層が南北に溝状に広がっていたが、これは調査区の東側は本来やや隆起していたことがわかったことから、遺跡の本体である西側の台地との間に谷地形があり、そこに縄文包含層が堆積したことが明らかになった。堆積層の広がりに比べて遺物はごくわずかしかなく、調査区北側に偏って出土した。この包含層の縁辺の小ピットは不規則ながら並んでいるようにも見えた。

９号土坑（図版５８、第１８２図）

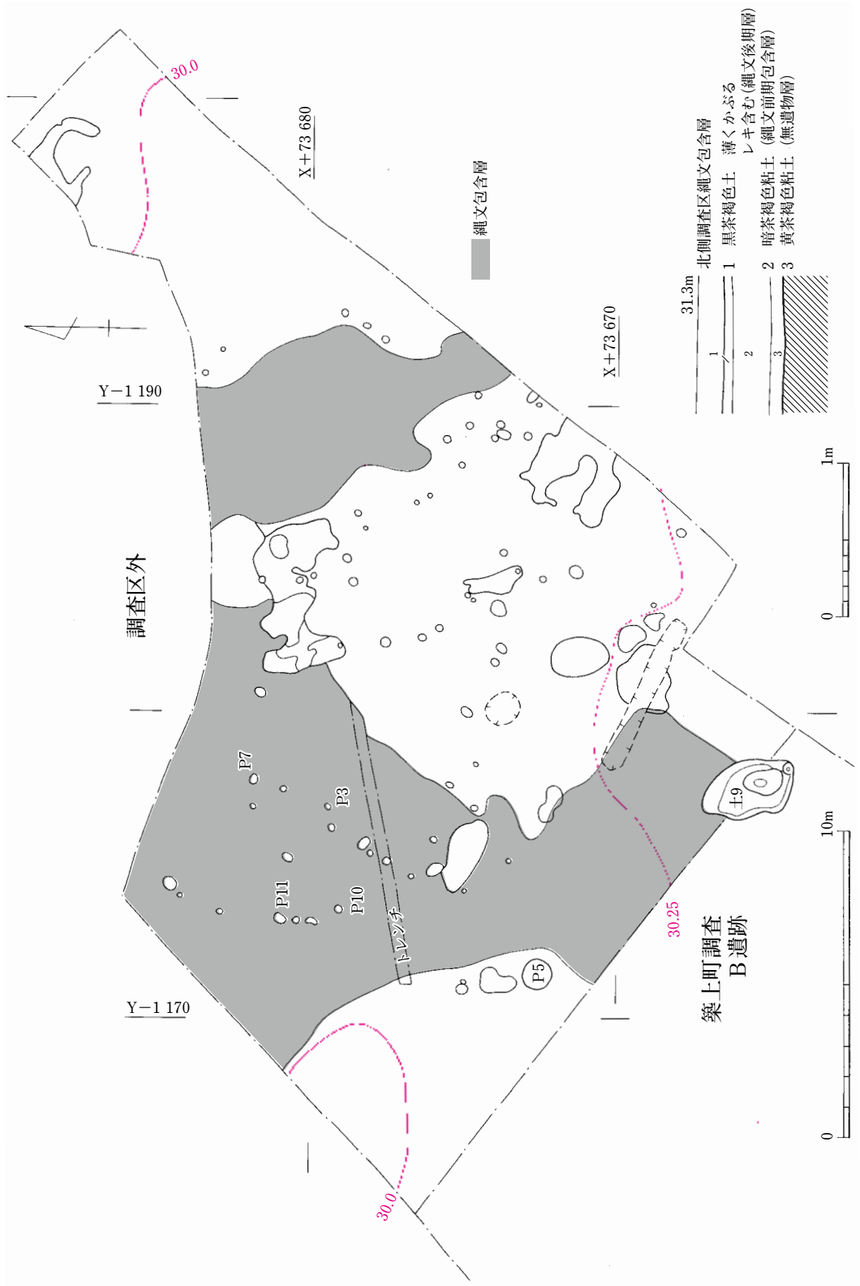
北側調査区の西端部で検出された不整形プランの土坑で、築上町が半分調査したものである。埋め戻しされていたものを再度掘り上げて、図化しているので検出当初のものとは形が違っているだろう。長軸は3.4m、短軸は2.03mである。床面は断面弧形で、最深部でも40cm程度である、倒木痕の可能性が高いが断定しにくい。出土遺物に図化できるものはなかった。



第182図　9号土坑実測図（1/６０）

縄文包含層出土遺物（図版５９、第１８４図）

縄文包含層は北側調査区でのみ検出された。前述の通り東側の台地と遺跡本体である西側の台地

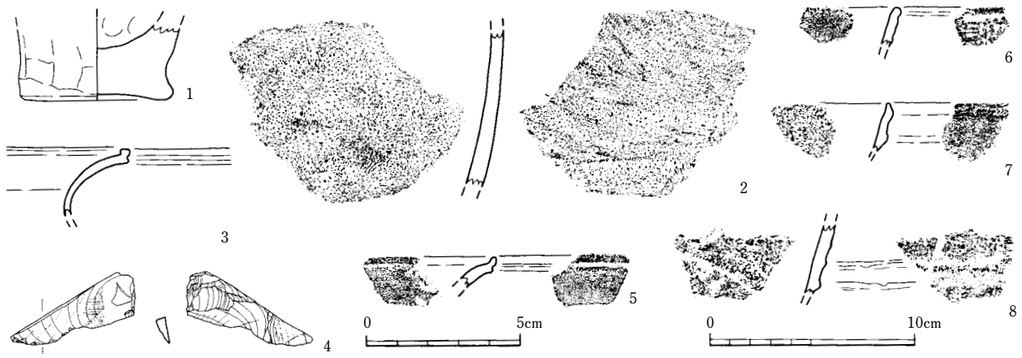


第１８３図　北側調査区遺構配置図（1/２００）および縄文包含層基本土層図（1/４０）

との間の谷地形にあたる部分で、２条の溝状に検出された。掘削したところ壁の立ち上がりが非常になだらかであったことから人工的な溝でないことは明らかで、流路とするには浅いことから落ち地形に堆積した包含層と認識した。

土層は上位が縄文時代後期、下位が前期の包含層で、後期の包含層は削平を受けているため薄かった。最下層は無遺物層だが、包含層自体が遺物をわずかにしか含まなかったことから完全に無遺物層ともいいきれない。

１はピット３出土で、壺か甕の底部で、器面摩滅のため調整は観察できない。内外オサエとナデ。



第184図　北側調査区出土遺物実測図（4は1/２、他は1/３）

混入物多く、外面にぶい淡橙灰色、内面暗橙褐色を呈する。２はピット５出土の縄文時代後・晩期の粗製深鉢胴部片で、胴下位にあたると考えられるが小片のため傾き不明。幅1.5cmの工具で引っ掻いている。外面黄橙色、内面にぶい暗灰～灰白色を呈する。混入物多い。３はピット１０出土の晩期の浅鉢片で、黒色磨研土器だが、器面が失われておりミガキが残っていない。外面口縁部には凹線が入る。外面淡暗茶灰白色､内面暗黄灰白色を呈する。４はピット１１出土の黒曜石製掻器で、縦長剥片の端部に刃部をつけている。２面の素面は指をあてる部分であるため、刃潰し加工はされていない。刃部は小さく湾曲しており、左手で使うのに適している。2.83g を測る。５～８は縄文時代遺物包含層の出土である。５は晩期の浅鉢片で、黒色磨研土器だが、器面が失われておりミガキが残っていない。外面口縁部には凹線が入る。６は深い貝殻条痕の残る縄文時代後・晩期の鉢の口縁部片で、外面淡黄灰白色、内面黄白色を呈する。７・８は包含層出土のミミズ腫れ突帯がつく鉢の胴部片で、轟Ｂ式土器だろう。７は器面摩滅が著しく、観察できないが、上端は口縁部が残っている可能性がある。８は外面淡黄灰白色、内面黄白色を呈する。

５　小結

安武・深田遺跡Ｂ遺跡２の北側調査区は遺構がほとんどなかったが、縄文時代後・晩期の包含層が広がっていることがわかった。想定されていた古代官道の遺構は削平が著しかったためか確認できなかった。南側調査区では遺跡の南端を捉えることができ、倒木痕が多く見られたことから集落の縁辺に木が立っていたことがわかった。

今回の調査で注目されるのは、３連式小型丸底壺である。側面に孔が空いているので内容物を使い分けたものではないことから、共飲共食の儀礼に使うものと想定される。珍しい器種なので、恒常的な祭祀に使うものではなく特別な場合に使用されるものであろう。同じピットから出土しているが、残り１つは残欠も残っていない。削平で失われた可能性もあるが、意図的に割って埋納したものではないだろう。

出土地点の北側の築上町調査区にはやや規模の大きい竪穴住居跡と側柱掘立柱建物跡があり、集落の有力者が存在していたことが想定されるので、有力者が使用したものかもしれない。この掘立柱建物跡や竪穴住居跡については築上町が報告することになっているので、その成果と併せて検討するべきであろう。

Ⅴ　安武・深田Ｃ遺跡

１　調査の概要

安武・深田遺跡は城井川西岸の自然堤防上に位置している。椎田バイパス築城 IC 建設時に調査がなされており､日本最古級の鍛冶遺構を持つ弥生時代の住居跡など多くの遺構が発見されている。調査は IC より北側をＢ遺跡、南側をＣ遺跡とし、用地の進捗状況に合わせて２ヵ年度に分けて調査を行っており、西側の２筆を１区、東側の１筆を２区として調査を行った。

安武・深田Ｃ遺跡は椎田道路築城 IC の南側にあたり、北側の築上町教育委員会調査範囲（一部当館による調査）がＢ遺跡である。用地買収の進捗により､平成２２･２３年度の２ヶ年度にわたって調査を行った。以下に年度ごとの経過をまとめる。

平成２２年度の調査（１区）は、用地の解決を待って５月１３日より狭小な水田３枚分を対象として行った。先行して行った確認調査で北西側の１枚分には遺構・遺物が発見されなかったため、実際に発掘調査をおこなったのは1,600㎡である。バックホーによる表土掘削を同日から開始したが、道路・用水路に囲まれた調査区であり、東側の調査区に水路を越えて排土を送る必要があったことから想定よりも多くの時間を要した。表土掘削後、５月２０日より人力による掘削を開始した。周囲の水田にはゴールデンウイーク中に既に田植えが終了しており、調査区で常に水が湧いており、掘削及び清掃などに時間を要したものの、６月１０日に全体写真を撮影した。バックホーによる反転作業後､６月２２日から東側の調査を開始した。湧水が西側ほど多くなかったこともあり、７月７日には空中写真撮影を行い、同９日に建機・道具等の撤収を行った。

平成２３年度の調査（２区）は､用地解決後の試掘確認調査の結果､1 筆のみが調査対象地となった。面積は 300㎡である。１２月１・２日でバックホーによる表土掘削を行い、同６日より人力による掘削を開始した。ほとんどが風倒木痕であったことから、同１３日には全体写真を撮影し、調査を終了した。埋め戻し作業は他の遺跡との兼ね合いがあったことから、間を置き、同２１日に終了した。

２　遺構と遺物

検出された遺構は、１区を中心に土坑７基、溝１０条、谷、ピット多数である。時代は弥生時代中期を中心としており、一部、縄文時代や古代、中世に属する遺物も出土している。今回の調査区は周辺の試掘調査の状況も勘案すると、安武・深田遺跡の南端に当たると考えられ、集落の縁辺部が確認できたと言える。

３　土坑

土坑は調査区内で７基検出され、全てが１区に属するものである。

１号土坑（図版６１、第１８６図）

調査区の西側に位置し、調査区外に延びる。規模は直径 180cm、深さ 15cmの円形土坑になるものと考えられる。土器が床面付近から出土しており、上部を削平された貯蔵穴であろう。

出土遺物（第１８８図）

１・２は弥生土器の甕である。共に底部のみが遺存し、摩滅のため調整は不明である。

出土遺物から弥生時代中期後半に属するものと考えられる。

２号土坑（図版６１、第１８６図）

調査区の北西側に位置する。規模は 160 × 150cm、深さ 40cmの正方形土坑である。東側床面が低くなり、浮いた位置から土器が出土した。貯蔵穴と考えられる。

出土遺物（図版６６、第１８８図）

３・４は弥生土器の壺である。１は頸部に断面三角形の突帯を付す。共に摩滅のため調整は不明である。５～７は甕である。５は摩滅するが、本来は口唇部がもう少し跳ね上がるものと考えられる。いずれも摩滅が著しいが、７の外面にハケ目が残る。８～１１は高杯である。いずれも摩滅するが、８は外面にハケ、内面にミガキがわずかに残る。12 は鉢である。端部がわずかに外方に突出する。摩滅のため調整は不明である。

出土遺物から弥生時代中期後半に属するものと考えられる。

３号土坑（図版６２、第１８６図）

調査区の中央に位置する。規模は直径 85cm、深さ 10cmの円形土坑である。わずかに浮いた位置で甕が横位で出土しており、小児棺等である可能性もある。

出土遺物（図版６６、第１８８図）

１３は弥生土器の甕である。口唇部が跳ね上がり、頸部に薄い突帯を付す。摩滅のため調整は不明である。

出土遺物から弥生時代中期後半に属するものと考えられる。

７号土坑（第１８６図）

調査区の中央南端に位置する。規模は 340cm× 100cm以上、深さ 20cmの長楕円形土坑になるものと考えられる。北側に 5cmほど高いテラスを持つ。

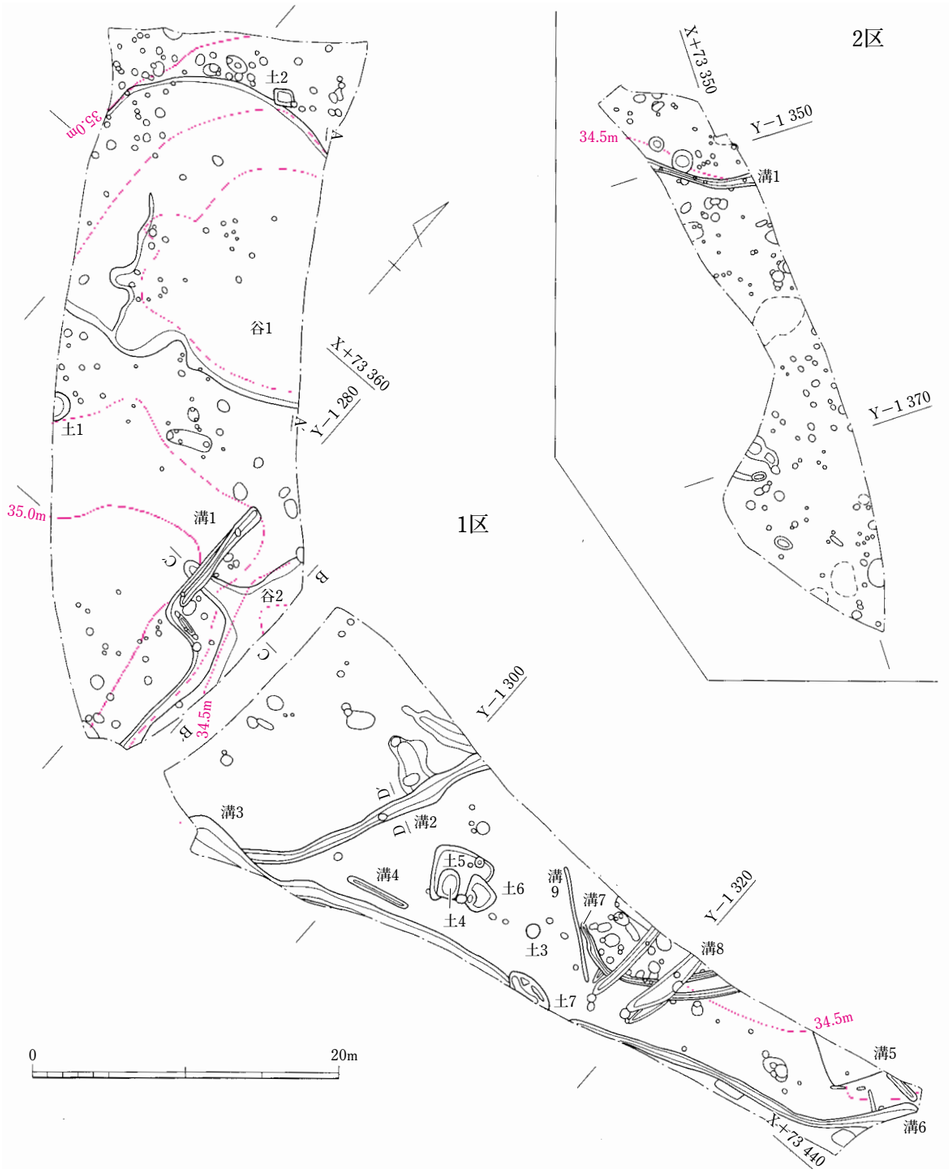
図化に耐えうる資料はないが、弥生土器片・黒曜石剥片が出土している。時期は弥生時代中期に属するものと考えられる。

４号土坑（第１８７図）

調査区の中央に位置し、５号土坑に切られるか。規模は 200 × 140cm、深さ 12cmの不整形土坑である。

出土遺物（第１８８図）

１４～１６は弥生土器の甕である。１４は底部がわずかに丸みを帯び、壺の可能性がある。１５・１６は端部が外方に突出する。１７は鉢の口縁部でわずかに外反する。いずれも摩滅のため



第185図　安武・深田C遺跡遺構配置図（1/ 400）

調整は不明である。切り合いと出土遺物から弥生時代中期前半～中頃に属するものと考えられる。

５号土坑（第１８７図）

調査区の中央に位置し、４号土坑を切り、６号土坑に切られる。規模は 390 × 360cm、深さ 12cmの不整形土坑である。

後述する磨製石斧を除き図化に耐えうる資料はないが、土師器片・須恵器片・焼土が出土している。時期は弥生時代～古墳時代に属するものと考えられる。

６号土坑（第１８７図）

調査区の中央に位置し、５号土坑を切る。規模は 175 × 170cm、深さ 20cmの長方形土坑である。南西側の径 90cmの範囲は 10cmほど低くなる。図化に耐えうる資料はないが、土師器片・須恵器片・焼土が出土している。時期は古墳時代後期に属するものと考えられる。

４　溝

溝は調査区内で１０条検出された。調査区が狭いため、性格はいずれも不明である。

１号溝

調査区の中央西寄りに位置する。規模は長さ 7.9m、幅 95cm、深さ 20cmで北流する。

出土遺物（第１８８図）

１８は須恵器の蓋である。回転ナデを施す。この他図化に耐えないが、弥生土器片も出土している。

出土遺物から、古墳時代後期頃に属するものと考えられる。

２号溝（図版６２、第１８９図）

調査区の中央に位置し、３号溝に切られる。規模は長さ 17.8m、幅 100cm、深さ 60cmで南流する。

出土遺物（第１８８図）

１９は土師器の椀か。摩滅するがわずかに板状圧痕の痕跡が見られる。

切り合いと出土遺物から、中世前期に属するものと考えられる。

３号溝

調査区の中央南端に位置し、２号溝を切る。規模は長さ 23m、幅 170cm、深さ 55cmで、床面は起伏がありどちらかに傾斜することはない。

出土遺物（第１８８図）

２０は土師器の椀である。摩滅が著しいが、底部にわずかに糸切りの痕跡が残る。２１は須恵器の蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、内面不定方向のナデ、他は回転ナデを施す。２２は弥生土器の甕である。摩滅のため調整は不明である。２１・２２は混入品。

切り合いと出土遺物から、中世前期に属するものと考えられる。

４号溝

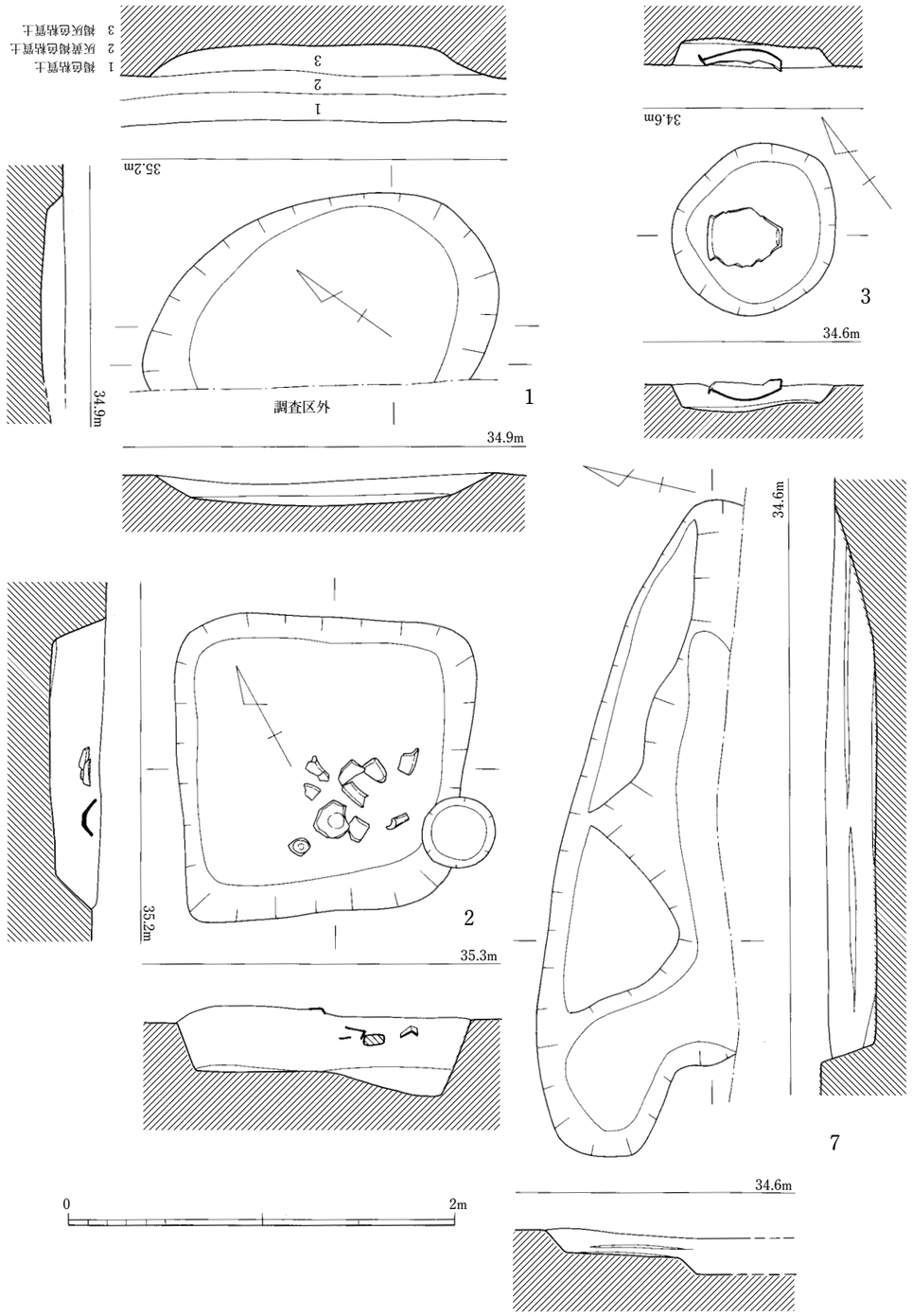
調査区の中央南側に位置する。規模は長さ 4.1m、幅 35cm、深さ 10cmで西流する。図化に耐えうる資料はないが、弥生土器片が出土している。時期は弥生時代に属するものと考えられる。

５号溝

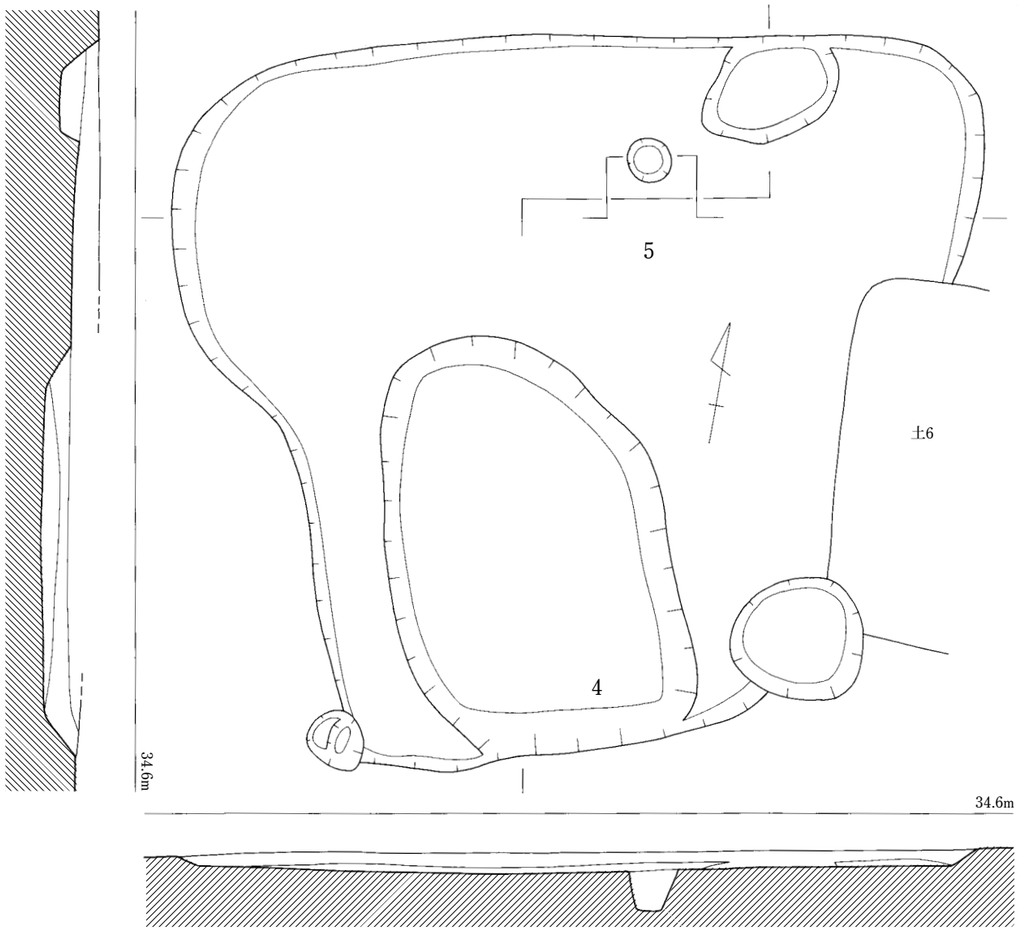
調査区の中央東端に位置する。規模は長さ 2.6m 以上、幅 35cm、深さ 10cmで東流する。

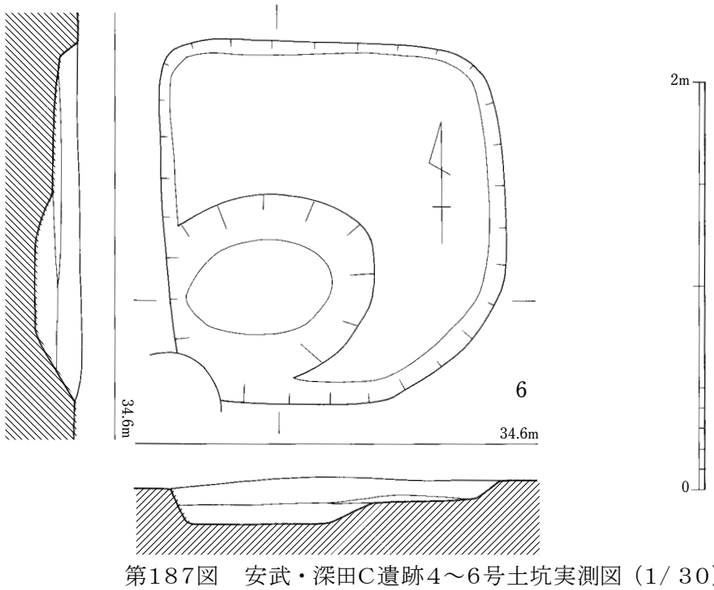
出土遺物（第１８８図）

２３は弥生土器の甕である。口唇部が跳ね上がり、頸部に断面三角形の突帯を付す。ヨコナデを



第186図　安武・深田C遺跡1～3・7号土坑実測図（1/ 30）





第187図　安武・深田C遺跡4～6号土坑実測図（1/30）

施す。

出土遺物から、弥生時代中期後半に属するものと考えられる。

６号溝

調査区の中央東端から南東端に位置する。規模は長さ 24m 以上、幅 100㎝、深さ 10㎝で、床面は起伏がありどちらかに傾斜することはない。等高線に沿うように弧を描いており、区画溝のようなものになるか。

出土遺物（第１８８図）

２４は弥生土器の甕である。外面ハケ、内面ナデ、底部外面ナデを施す。

出土遺物から、弥生時代中期後半頃に属するものと考えられる。

７号溝

調査区の中央に位置し、８・９号溝に切られる。規模は長さ 10.7m 以上、幅 50㎝、深さ 15㎝で西流する。弧状に巡るものの、内部から他の遺構は検出されなかった。

出土資料はなく、時期は切り合いから弥生時代中期に属するものと考えられる。

８号溝

調査区の中央に位置し、7 号溝を切る。規模は長さ 5.5m 以上、幅 120㎝、深さ 5㎝で南流する。図化に耐えうる資料はないが、弥生土器片・須恵器片が出土している。時期は古墳時代に属するものと考えられる。

９号溝

調査区の中央に位置し、7 号溝を切る。規模は長さ 7.8m、幅 30㎝、深さ 10㎝で北流する。

出土遺物（第１８８図）

２５は弥生土器の甕である。摩滅のため調整は不明である。

切り合いと出土遺物から、弥生時代中期に属するものと考えられる。

２区１号溝

調査区の西端に位置する。規模は長さ 6.6m 以上、幅 70㎝、深さ 15㎝で南流する。等高線に沿うように弧を描いており、区画溝のようなものになるか。

図化に耐えうる資料はないが、弥生土器片が出土している。時期は弥生時代に属するものと考えられる。

5　谷

調査区内で２つの谷が検出された。

１号谷（図版６３、第１８９・１９０図）

調査区の北西側に位置する。規模は幅20m、深さ25～35cmで、北東側に向かって下がる。椎田バイパス建設時にも谷が検出されており、同一のものであろう。南西側に向かって徐々に幅が狭くなることから、南西の調査区外にある谷の起点まで遠くないものと考えられる。

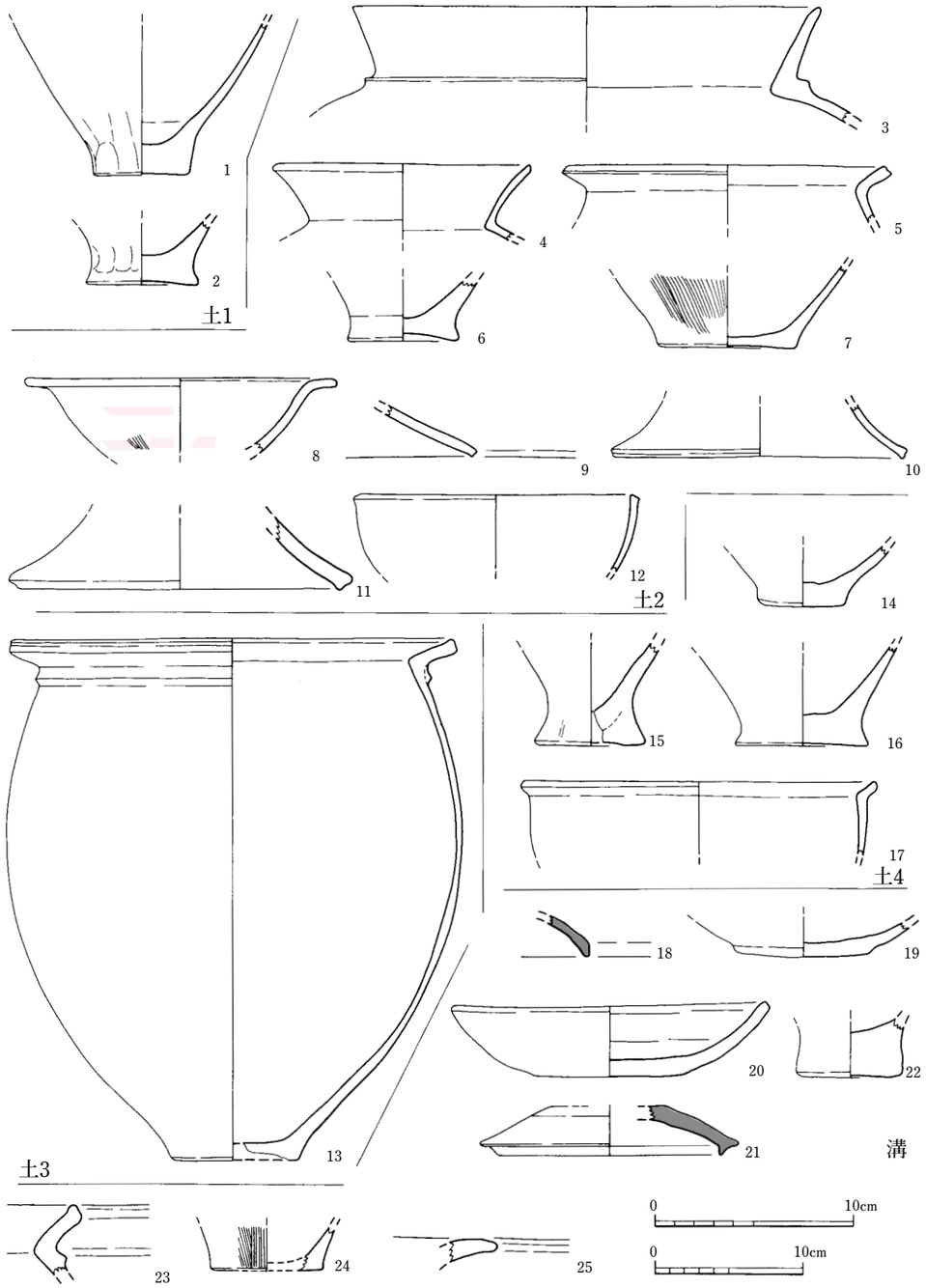
出土遺物（第１９０図）

１～７は谷全体出土、８～１１は上層出土、１２～１８は下層出土である。１は弥生土器の壺である。胴部に断面台形の突帯が２条付くものと考えられる。２～４は甕である。２・３は口唇部が跳ね上がり、頸部下に断面三角形の突帯を付す。５は高杯である。いずれも摩滅するが、５の内面にケズリの痕跡が残る。６は須恵器の蓋である。回転ナデを施す。７は瓦質土器の鍋か。ヨコナデを施す。

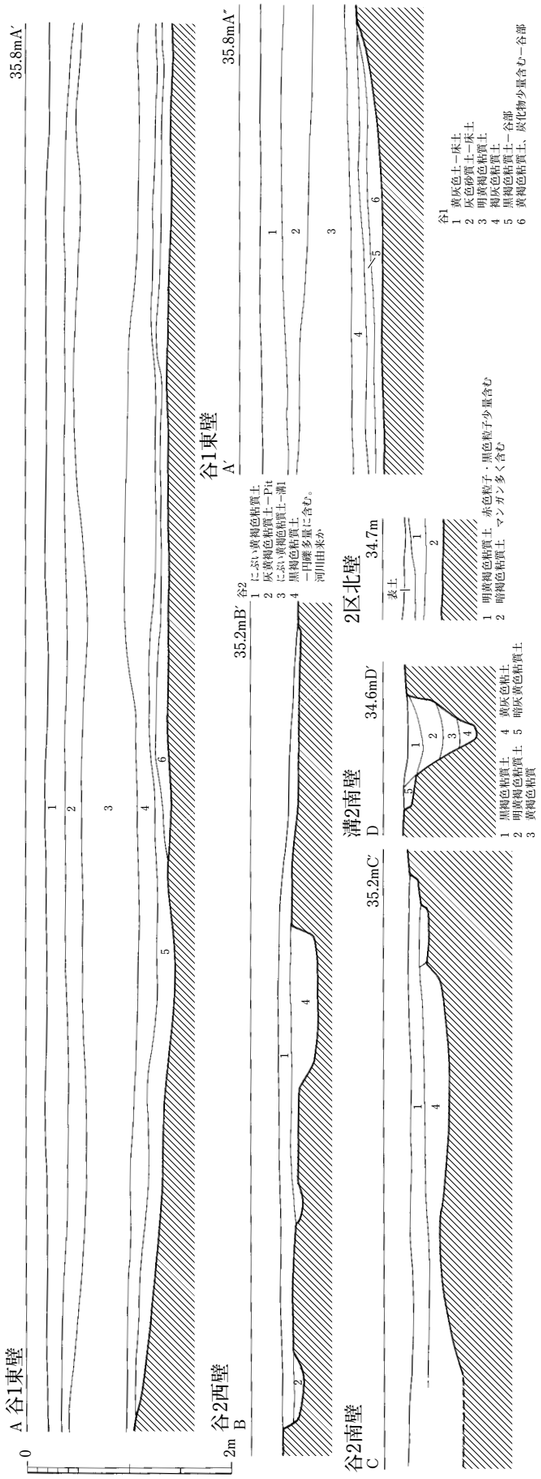
８～１１は弥生土器の甕である。８・９は口縁が跳ね上がり、９は頸部下に断面三角形の突帯が２条付される。１１は底部端が外方に突出する。いずれも摩滅のため調整は不明である。

１２～１８は弥生土器の甕である。１２・１５は口唇部が跳ね上がり、１３・１６は頸部下に２条の突帯が付される。いずれも摩滅のため調整は不明である。この他後述する打製石鏃、磨製石斧、図化はしていないが6cm角程のチャートの原石が出土している。

出土遺物から、弥生時代中期後半を中心とする時期に属するものと考えられる。



第188図　安武・深田C遺跡土坑・溝出土遺物実測図（1/４、18～21・25は1/３）



第189図　安武・深田C遺跡谷・溝土層、
2区壁土層実測図（1/６０）

２号谷（図版６３・６４、第１８９・１９０図）

調査区の西側に位置し、1号溝に切られる。丁字の溝状になっており、深さは1mほどである。東側の調査区には見られないことから小規模な谷ないしは溝になるものと考えられる。

出土遺物（第１９０図）

１９は須恵器の杯である。回転ナデを施す。この他、図化に耐えないものの弥生土器片が出土している。

切り合いから、弥生時代～古墳時代に属するものと考えられる。

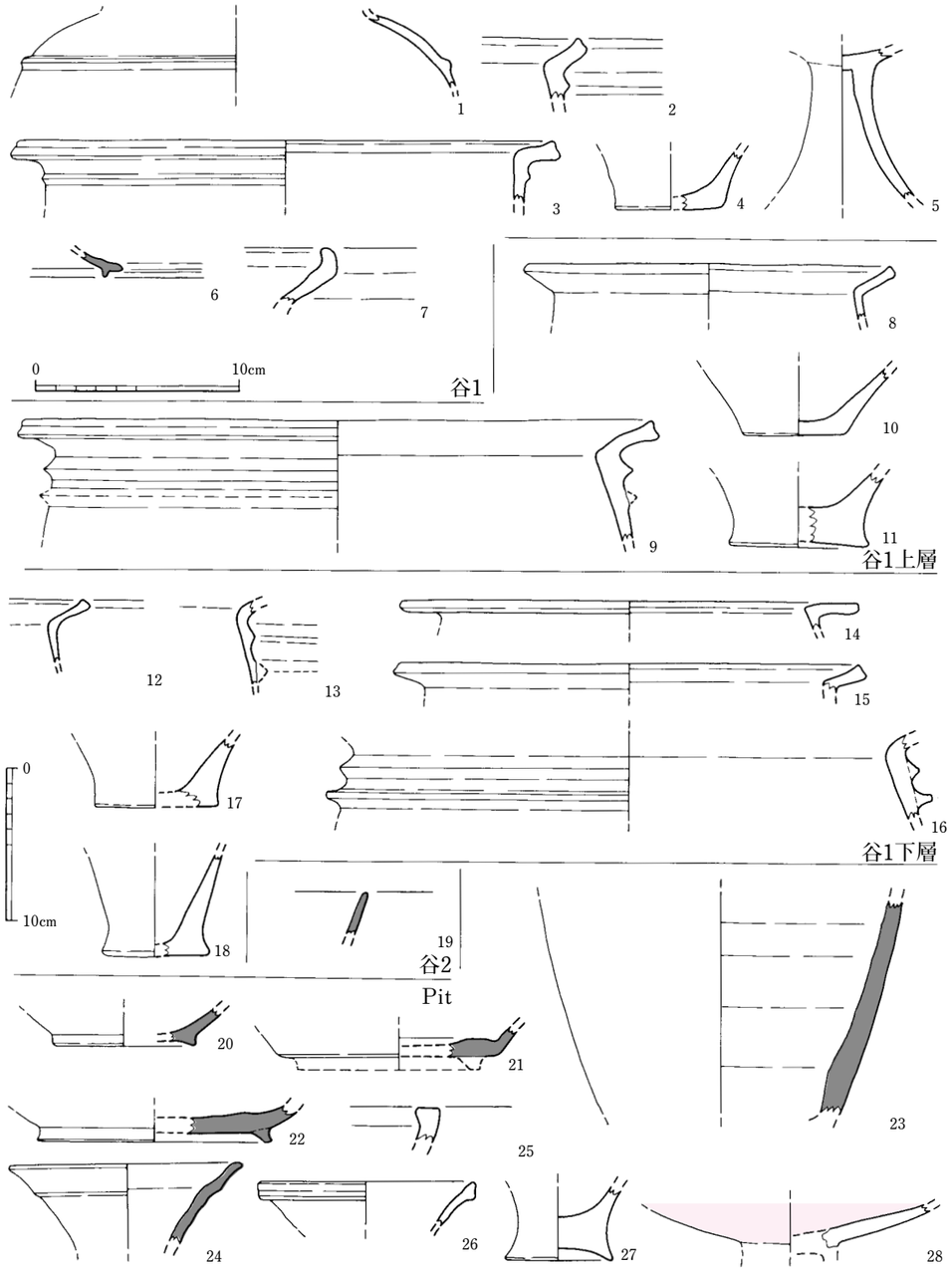
６　その他の遺構

ピットや遺構外出土の土器について報告す

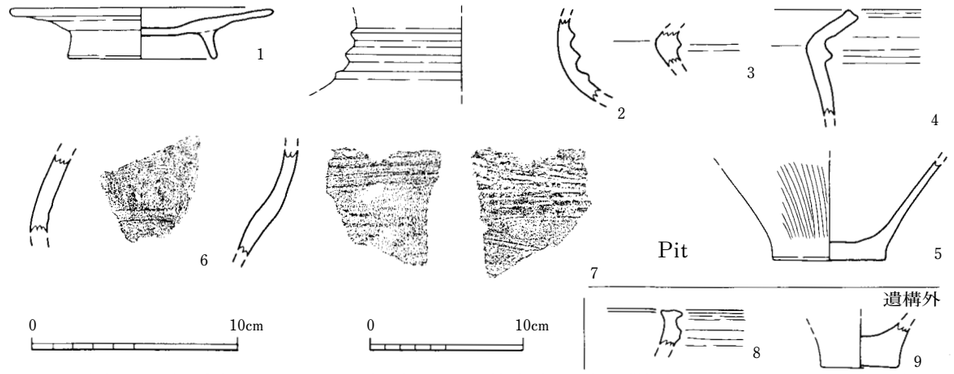
る。

ピット出土遺物（第１９０・１９１図）

２０～２８は１区出土。２０～２２は須恵器の杯である。いずれも高台が付くもので、回転ナデを施す。古代に属するものである。Ｐ３０出土。２３は須恵器の長頸壺である。上部外面タタキ後ナデ、中位内面ナデ、他は回転ナデを施す。Ｐ４２出土。２４は須恵器の甕である。下位に段を形成し、回転ナデを施す。Ｐ１３出土。２５は瓦質土器の鉢か。ヨコナデを施す。Ｐ６１出土。２６



第190図　安武・深田C遺跡谷・ピット出土遺物実測図（1/４、６・７・19～25は1/３）



第191図　安武・深田C遺跡2区ピット・遺構外出土遺物実測図（1/４、1・6～8は1/３）

は弥生土器の壺である。Ｐ２出土。２７は弥生土器の甕である。Ｐ３０出土。２８は弥生土器の高杯である。内外面に丹およびミガキの痕跡が見られる。Ｐ４０出土。

第１９１図は２区出土。１は土師器の高台付皿である。底部外面ナデ、他はヨコナデを施す。Ｐ６出土。２は弥生土器の壺である。頸部に断面三角形の突帯を３条付す。ヨコナデを施す。Ｐ７出土。３～５は弥生土器の甕である。４は口縁を跳ね上げ、頸部に突帯を付す。５は底部で外面ハケ、内面ナデを施す。３はＰ５、４・５はＰ８出土。６・７は縄文土器の鉢である。６は内外面ヨコナデ、７は外面下位ヨコナデ、他は条痕を施す。６はＰ４、７はＰ３出土。

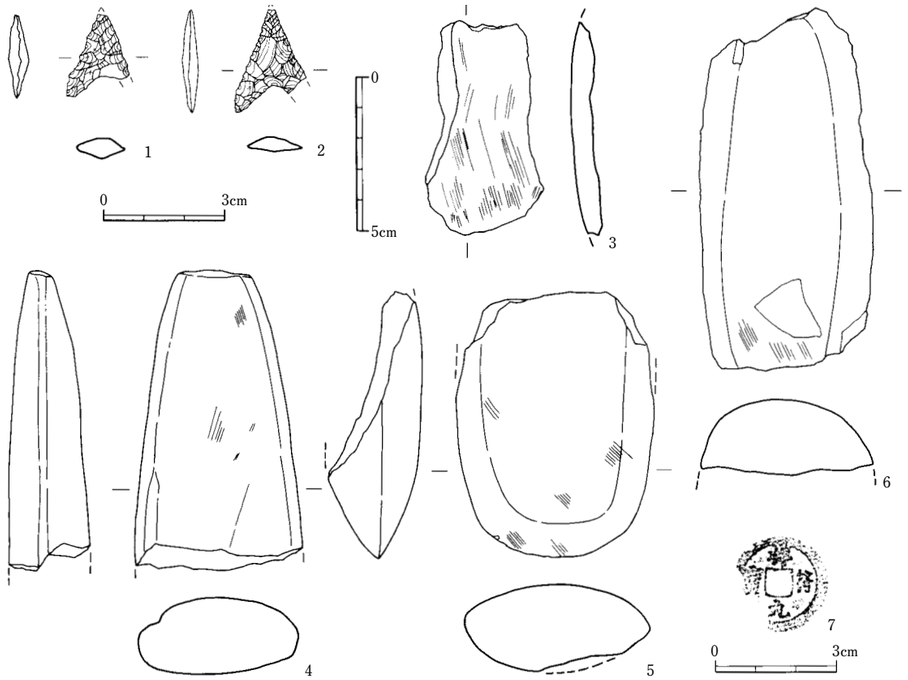
その他の遺構出土遺物（第１９１図）

８は弥生土器の鉢である。ヨコナデを施す。２区北側壁第２層直上出土。９は弥生土器の甕である。摩滅のため調整は不明である。２区壁面出土。

７　特殊遺物（図版６６、第１９２図）

調査区内で出土した特殊遺物について報告する。

１・２は打製石鏃である。ともに凹基式で両側面に細かい剥離を施し、２は鋸歯状を呈する。１号谷上層出土。３～６は磨製石斧である。４は基部片で乳棒状を呈する。５は刃部片で使用痕はさほど認められない。６は裏面を大きく破損するが、下端には使用痕らしきものが確認され、先端に近いものと考えられる。また、斜め方向に火成岩の嵌入が見られる。３～５は１号谷上層出土。６は５号土坑出土。７は銅銭である。祥符元寶で、初鋳 1008 年の宋銭である。出土地不明。



第192図　安武・深田C遺跡出土石製品実測図（1・2・7は2/3、他は1/2）

8　小結

本調査区では、土坑・溝・谷およびピットのみが検出されており、建物跡も復元できなかったことから集落の全体像や特徴などは不明であることから、椎田バイパス築城ICの建設に伴う調査（以下、既調査）範囲も含めた上で本調査区の位置づけを検討してみたい。

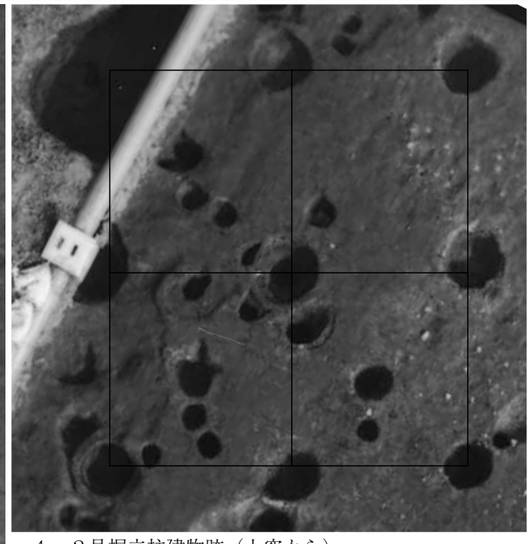
西側で検出された１号谷は、既調査において検出された「谷地区」と同一で、地形と標高から上流に当たるものと考えられる。出土土器も弥生時代中期を中心とした土器が出土しており、既調査資料と矛盾しない。また、削平が考えられるものの、南西側に向かって収束しており、谷地形の縁辺であろうと推測される。２区についても、水路より南側の試掘調査において、遺構・遺物共に検出されなかったことから、集落域の南側縁辺部に当たるものと考えられる。

以上のことから、安武・深田遺跡の集落は築城IC部分を中心として北側（B遺跡）に広がっており、本調査区は南側、南西側の端に当たると言える。

1．安武・深田遺跡B遺跡２全景（西上空から）

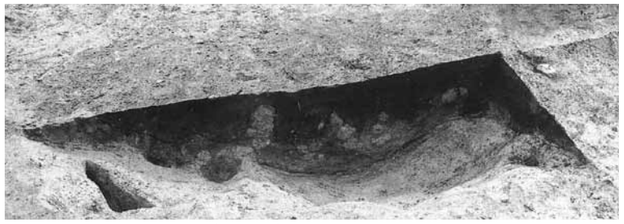
2．同上南区全景（上空から）

3．１号掘立柱建物跡（上空から）

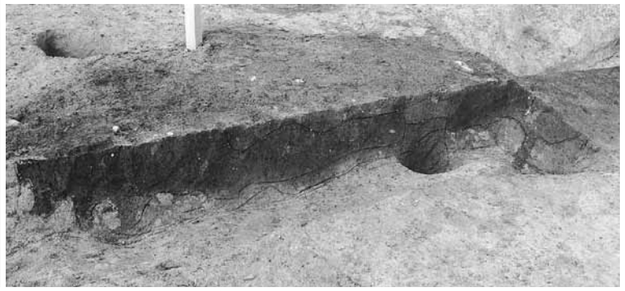


4．２号掘立柱建物跡（上空から）

1．１号土坑（北東から）

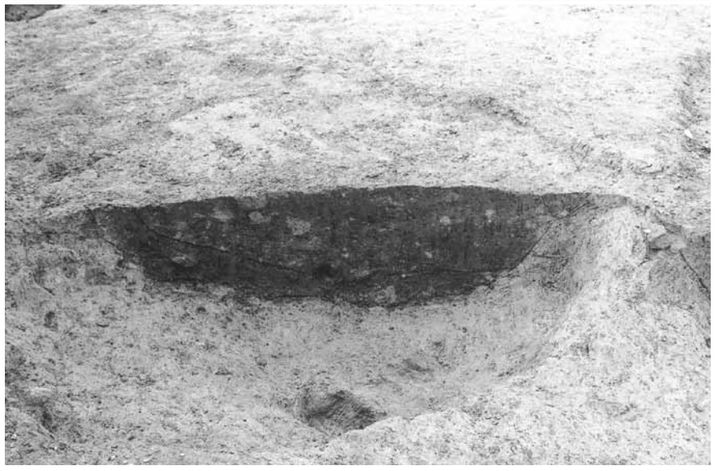


２．１号土坑土層１（北から）



３．同上２（南東から）

４．３号土坑（東から）



５．同上土層（東から）

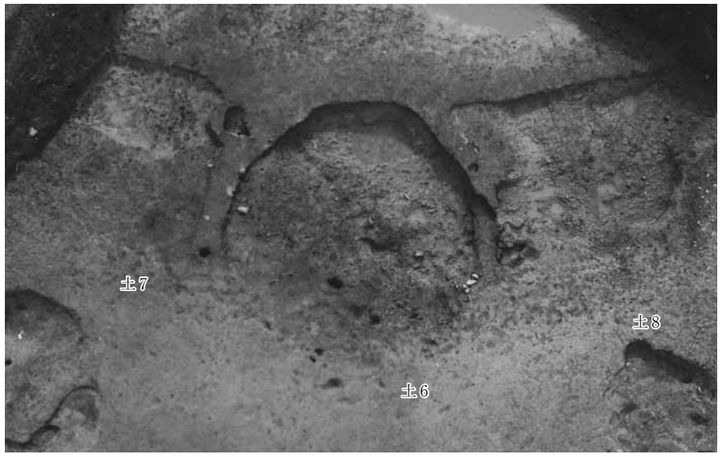
２．４号土坑（西から）

１．２号土坑（上空から）

３．同上土層（南から）

４．５号土坑（南西から）

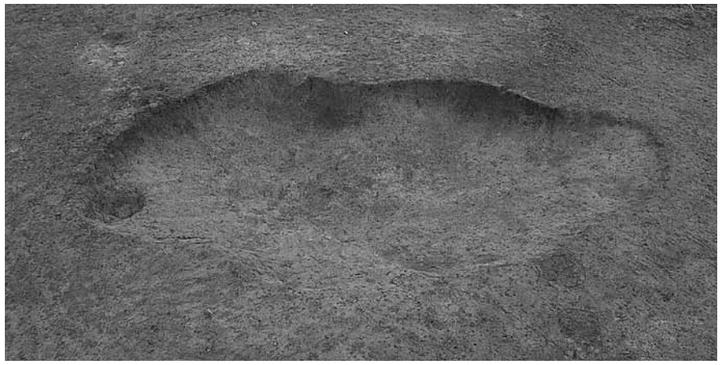
５．同上土層（南東から）



1．６～８号土坑遺物出土状況
（上空から）

2．６号土坑遺物出土状況
（西から）

3．６号土坑土層（南西から）



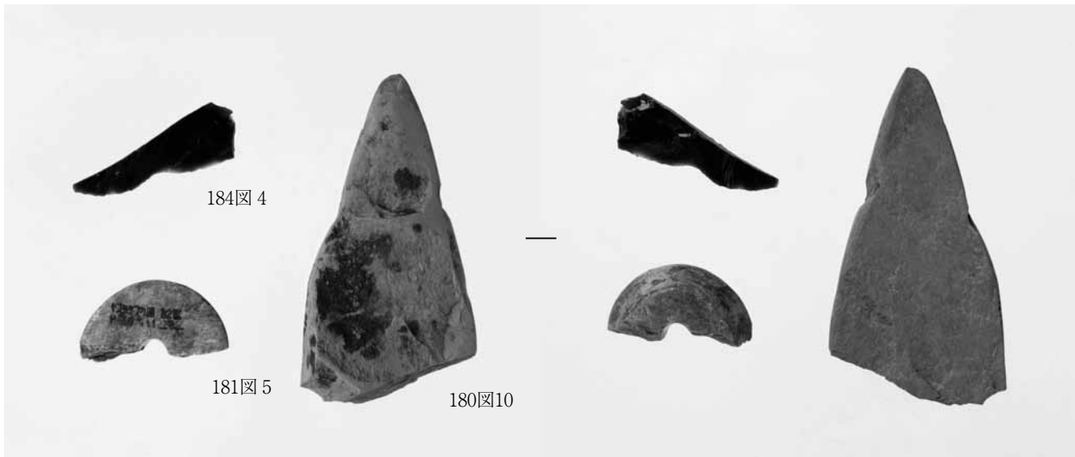
4．９号土坑（東から）

181 図 1-1

180図 11

181図 1-2

180図 12



B 遺跡２出土遺物

1. C遺跡全景（南から）

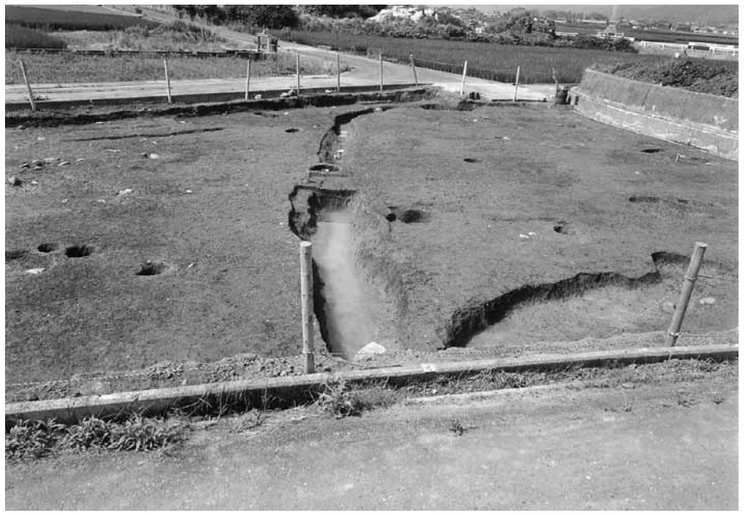
2. C遺跡1区東側全景（上から）

1. C遺跡1区西側全景（南東から）

2. C遺跡1区1号土坑（東から）

3. C遺跡1区2号土坑（南から）

1. C 遺跡 1 区 3 号土坑（南から）



2. C 遺跡 1 区 2 号溝（北から）

3. C 遺跡 1 区 2 号溝土層（北から）

1. C 遺跡 1 区 1 号谷（東から）

2. C 遺跡 1 区 1 号谷土層（南西から）

3. C 遺跡 1 区 2 号谷（東から）

1. C遺跡１区２号谷土層（東から）

2. C遺跡２区全景（上から）

3. C遺跡２区全景（東から）

1. C遺跡２区全景（西から）

2. C遺跡２区全景（南から）

3. C遺跡２区北側壁（南から）

188図 6

188図 7

188図 13

192図 1　192図 2

188図 20

192図 4　192図 5　192図 6

C 遺跡出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	きょうがつじいせき・やすたけ・ふかだいせき
書　名	京ヶ辻遺跡（２区）・安武・深田遺跡（B2・C 区）
副書名	
巻　次	
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第２０集
編著者名	坂本真一（編）　秦憲二　城門義廣　海出淳平
編集機関	九州歴史資料館
所在地	〒 838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
発行年月日	平成 27（2015）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
きょうがつじいせき 京ヶ辻遺跡 ２区	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこまちおおあざありひさ みやこ町大字有久	40625	920071 (町番号) 920135 (県番号)	33° 41′ 00″	130° 59′ 27″	2009.09.28 ～ 2012.12.16	5,850㎡	東九州 自動車道 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
京ヶ辻遺跡 ２区	集　落	弥生時代 古墳時代	竪穴住居跡　37 掘立柱建物跡　7 土　坑　19 溝状遺構　16 谷	弥生土器 土師器　土製品 初期須恵器　石製品 須恵器　金属製品	初期須恵器

遺跡の概要
弥生･古墳時代の竪穴住居跡、土坑および溝、谷を確認した。遺構からは古墳時代中期の初期須恵器が出土した。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
やすたけ・ふかだいせき 安武･深田B遺跡２	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 ちくじょうまちおおあざやすたけ 築上町大字安武	40647	95009 (町番号) 950083 (県番号)	33° 39′ 46″	131° 00′ 60″	2012.11.28 ～ 2012.12.26	710㎡	東九州 自動車道 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安武･深田B遺跡２	集　落	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物跡　2 土　坑　9	縄文土器　打製石器 弥生土器　石製品 須恵器 土師器 瓦質土器	小ピットから３連式小型丸底壺が出土した。

遺跡の概要
検出された遺構は少なく、遺跡の北・東端に当たることが分かった。

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
やすたけ・ふかだいせき 安武･深田C遺跡	ふくおかけんちくじょうぐん 福岡県築上郡 ちくじょうまちおおあざやすたけ 築上町大字安武	40647	95009 (町番号) 950083 (県番号)	33° 66′ 14″	131° 01′ 42″	2011.05.13 2011.07.09 2012.12.01 ～ 2012.12.21	1,600㎡	東九州 自動車道 建設

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安武･深田C遺跡	集　落	弥生時代 古墳時代	谷　2 土　坑　7 溝　10	弥生土器　瓦質土器 須恵器　石製品 土師器　銅銭	

遺跡の概要
検出された遺構は僅少で、遺跡の南～南西端に当たることが分かった。

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度 26	登録番号 15

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告－２０－

京ヶ辻遺跡（２区）

安武・深田B遺跡２・C遺跡

平成27年(2015年)３月31日

発　行：九州歴史資料館
福岡県小郡市三沢5208-3

印　刷：久野印刷株式会社
福岡県福岡市博多区奈良屋町3-1